

竹生島におけるサウンドスケープの変遷に関する研究

倉嶋 祐介

環境計画学科環境社会計画専攻において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2007 年度

承認

指導教員

1. 研究の背景・論点

1-1 竹生島の活性

竹生島は、滋賀県東浅井郡、琵琶湖の北に位置する周囲約 2km の島である。島は国指定の名勝、史跡になっており、島内南部には都久夫須麻神社と宝厳寺がある。宝厳寺は西国三十三ヶ所巡礼の第三十番札所であり、古来より巡礼者が絶えない。島内へは僧以外住むことを許されておらず、島には一件の民家も無い。島への渡航は船を使うしか無い事も相まって、荘厳な信仰の島という色合いが強い。このような竹生島であるが、近年は島を訪れる巡礼者や環境客が減少し、地元の長浜市(旧びわ町)にも、地元としての特別な愛着があるという訳ではない¹⁾ため、長浜市行政も竹生島をどう活用していくのかという方向性を定めることができないでいる。

1-2 音環境への意識とサウンドスケープ

現代の音環境の問題点として我々の音環境への意識が貧しくなってきたことが挙げられる。元来、我々日本人は自然環境に美しさを見出し、情緒を感じる文化にあった。この美的感覚は音環境についても同様であり、雨の音や虫の声に耳を傾けてきた。そういった伝統的な文化のなかからは水琴窟やししおどし、風鈴や鐘といったものも表れ、今日まで音、を聴く、楽しむ、といった文化は続いている。

しかし文明の発達とともに、古来より親しんできた自然環境の音を聴くという文化、音への高い意識が徐々に下がりつつある。現代の社会は人工物で溢れ、四方八方から音が飛び交い、騒音問題が社会問題として日常的に取り上げられている。

2. 研究の目的・意義

研究の目的は、

- ①竹生島の概要を調査し、巡礼地としての特性と歴史を明らかにすることで、竹生島の活用の手がかりとする。
- ②テキスト分析により、巡礼者が竹生島のどのようなサウンドスケープを評価してきたのかを明らかにする。
- ③サウンドスケープの変遷を明らかにすることにより、竹生島を構成する音の要素とその傾向を明らかにする。

であり、研究の意義は、

- ①竹生島を構成するサウンドスケープが明らかになり、訪れる巡礼者等が島のどのような要素を

評価してきたのかを明らかにすることで、竹生島での評価の高い要素が明らかとなり、それを生かした竹生島の活用を模索することができる。

- ②音の記述を追えば、聞こえてくる「音」と、それを聞く「巡礼者」の意識がどのような相互関係をもって変化してきたのかが明らかになる。
- である。

3. 調査・分析方法

3-1 研究対象

巡礼者が竹生島のサウンドスケープをどのように評価してきたかを分析するため、「巡礼記」という道中日記を対象とする。巡礼記は現在に至るまで様々な編集、出版されているため、時代変遷を追うことが可能であり、巡礼の際、当地を訪れた時に感じた自然環境に対する感覚も記されているものとする。

3-2 調査・分析の手順

本研究の分析は以下の手順で進めることとする。

- ①文献調査、実地調査、ヒアリング
- ②文献からのテキスト分析

まず、文献調査、実地調査、ヒアリングによって竹生島の辿ってきた歴史、西国巡礼の成立と現在までの流れ、現在の竹生島の状態と、抱える問題や宝厳寺、都久夫須麻神社の日常を明らかにする。

次に収集した巡礼記からのテキスト分析をおこない、竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにする。

テキスト分析では、文献より音の種類、季節、場所を抽出・分類し、表 1 のカテゴリに分類する。時代区分を「江戸時代まで」とそれ以降は「元号毎」に分類する予定であったが、明治期の文献が、蔵書先の都合(貴重文献につき一般の複写・閲覧不可)等により、分析対象として加えることができなかったことと、昭和の抽出語句が多く、母数に偏りが出たため、「江戸時代まで」、「大正」、「昭和 1」、「昭和 2」、「平成」として分析をおこない、時代毎の傾向を明らかにする。

表 1 抽出語句カテゴリの分類

音	水(せせらぎ、清水、潮騒等)、船、雨(雨、あられ、みぞれ、雷等)、風、草木(枯葉、木の実等)、動物、声(唄、売声以外の人の声、唄、歌、音楽)、時(鐘の音など)、静寂、
季節	春、夏、秋、冬
場所	湖、山、土産店、社寺、波止場、ターミナル

4. 竹生島の抱える課題とサウンドスケープの変遷

4-1 竹生島が抱える問題

- ①2007-09-14 中辻藤男氏（奉賛会事務局）
滋賀県長浜市役所びわ支所(旧東浅井郡びわ町役場)にて
- ②2007-10-16 生嶋厳雄氏（都久夫須麻神社宮司）
竹生島内都久夫須麻神社にて
- ③2007-11-01 峯 覚雄氏（宝厳寺住職）
竹生島内宝厳寺にて
- 上記調査により明らかになった竹生島の問題を以下に記す。

表2 竹生島が抱える問題²⁾

竹生島が抱える問題
電気が無いので、防災、防犯、維持管理において力不足である。
旧びわ町には、地元としての竹生島に特別な愛着は無い。
観光客は増えて欲しいが、孤島という地理的な性格上、事業を起こすと経費が嵩む。
カワウのよる森林の枯死が大問題である。景観の維持が困難になっている。
電気が無いので、通常の生活ができない。竹生島は非日常であるが、どこかで日常的なものを残しておかないといけない。
安定供給できる電力が欲しいが、太陽電池パネルや風力発電は、景観の問題上難しい。
竹生島の文化、文化財を残すため、島は自然回帰の方向が良い。必要以上の観光化は望まない。宗教上の聖地という体裁を残したい。
修行の場ということもあり、必要以上のバリアフリー化は望まない。
夜間にモーターボート等で無断侵入する等のいたずらに困っている。
船の滞在時間が1時間半では短い。

以上のことが問題として顕在化していることがわかった。

4-2 竹生島におけるサウンドスケープの変遷

全国の図書館蔵書から収集を希望した巡礼記の中から借用または閲覧が可能なものを実際に収集し、さらにその中より、竹生島の項に音に関する記述がある文献を分析対象とした。このようにして文献から抽出・分類をおこなった結果、分析対象は表2の文献になった。これらの文献から抽出・分析した結果を以下に示す。

図1は各時代におけるカテゴリの出現頻度である。結果をみると、波の音、水の音、風の音、といった自然の音は現在に至るまで等しい割合で取り上げられ、竹生島を構成するサウンドスケープの大きな要素となっていることがわかる。反対に、雨の音、時を知らせる音というのは割合が低く、竹生島を訪れる人達の評価の傾向がうかがえる。

季節に関して、秋の記述は大きく減少している、時代を経て夏の季節と冬の季節、次いで冬の季節の評価が高い

場所に関しては湖や山、社寺の記述が一定してあり、一定した評価を得ていることをあらわしている。

表2 分析対象文献

タイトル	著者	出版
西園通記	益廣部	1812
西園札旅	草庵道流館	1860
竹島遊	不明	1917
竹島誌	馬場嘉	1925
巡礼旅	白根子	1965
西園紀	杉葉子	1966
西園主所	平義雄	1967
巡礼寺	三浦佐小唄三	1967
閑遊札旅	首藤	1968
カラ巡礼	佐藤研	1973
西園紀行	中野郎	1974
竹島誌	澤英	1975
西園札	澤英雄	1975
竹島誌	澤英	1975
西園主遊札	渡辺順	1976
竹島	中井郎	1977
札所めぐり	竹柳子	1982
句集竹島	山住郷	1984
同行入	松藤造	1985
神倉島の竹生島	び野龍盛	1986
西園札旅 麓のろ	松藤明	1986
神倉島の竹生島	び野龍盛	1986
西園主遊 巡礼 諸社 康内	西園斎	1987
西園花主 観音堂	佐藤研	1988
西園新園 雲場 紀行	森原男	1991
西園3所 巡	小藤	1993
西園主所めぐり	藤森治	1994
御歌集	和嘉男	1995
西園札 御	河島朗	1995
やぶぎ	橋本三	1996
西園主所 巡	不明	1997
西園札	白根子	1997
句集竹島	山住郷	2001
古堂とある記	能登	2001
西園主所 オジ松達中	クイダタラシ	2003
西園札旅	草庵道流館	2003
西園雲場 紀行	松本男	2004
西園雲場 紀行	松本男	2004
西園主所やぶぎ 観音	京都閣版ター	2004
西園主所 巻く	歩旅ジズ吉巡	2006

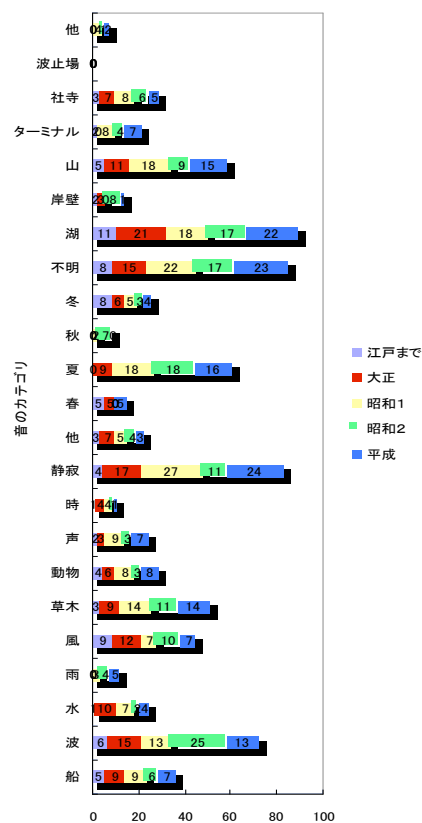


図1 各時代におけるカテゴリの出現頻度

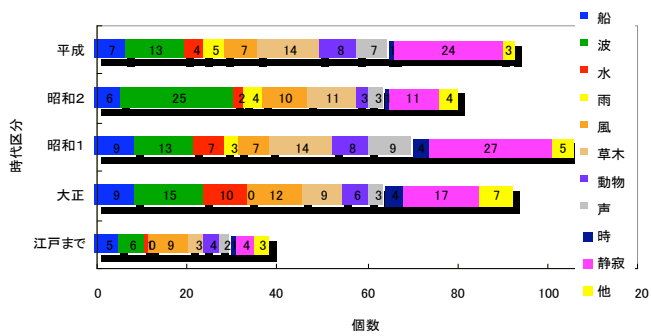


図2 音の各カテゴリがその時代に占める割合(個)

上の図は、時代毎の音の各カテゴリがその時代に占める割合である。時代を通して波、風、草木、静寂といった自然の音が多い。水の音はやや減少傾向であり、雨、声、時の音は竹生島では評価の低いサウンドスケープのようだ。

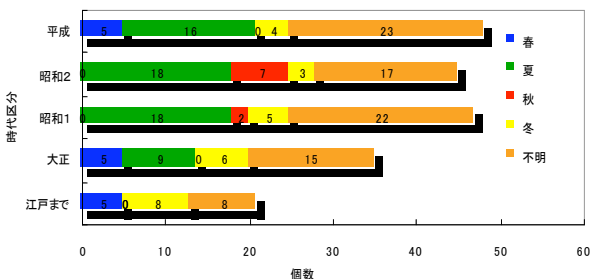


図3 季節の各カテゴリがその時代に占める割合(個)

上の図は、時代毎の季節の各カテゴリがその時代に占める割合である。竹生島を訪れた時の季節が判別しづらいもの、引用元の季節が明らかでないものがあるため、季節不明に分類せざるを得ないものが多い。判別可能なものでは、夏の記述が圧倒的に多く、冬の記述がやや減少傾向である。穏やかな気候での渡航者が多く、湖が荒れる秋から冬は敬遠されるようだ。

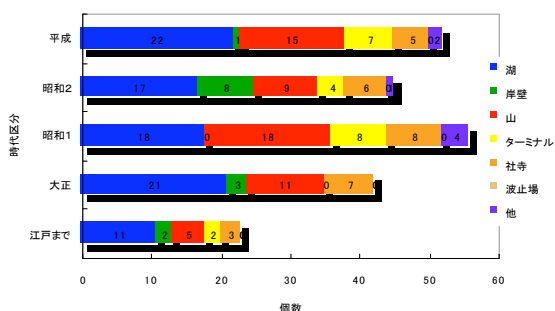


図4 場所の各カテゴリがその時代に占める割合(個)

上の図は、時代毎の場所の各カテゴリがその時代に占める割合である。湖部分と山部分が大きな割合を占め、竹生島における2大要素といえるだろう。ターミナルや社寺といった場所においても大きな増

減は見られない。

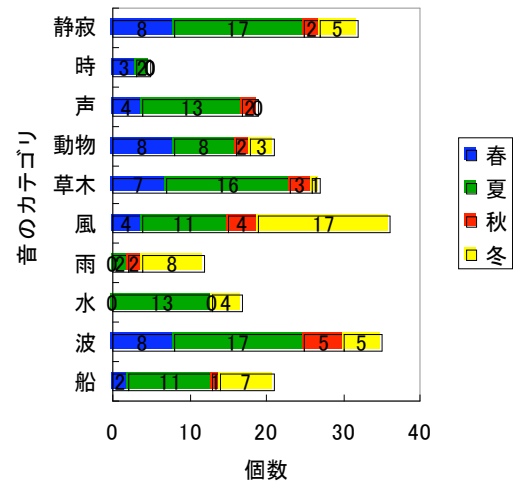


図5 各音カテゴリにおける季節の割合(個)

上の図は各音カテゴリにおける季節の割合である。春と夏で半数以上を占め、穏やかな季節の評価が高いことがわかる。秋や冬では、降り積もる雪の記述や、荒れる波風の記述が多い。

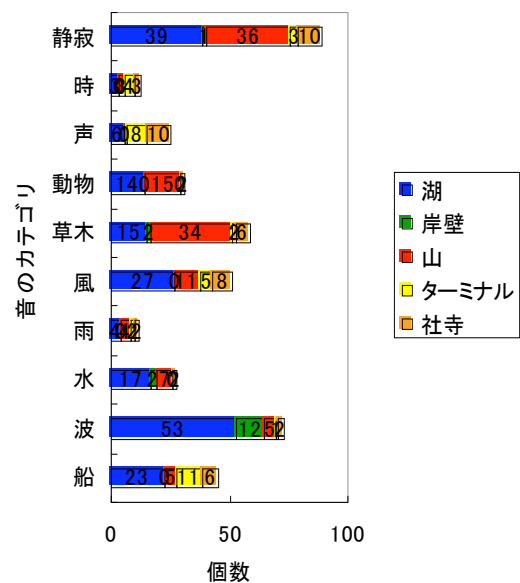


図6 各音カテゴリにおける場所の割合(個)

上の図は各音カテゴリにおける場所の割合である。「湖」と「山」という大きな2つの要素がみてとれる。社寺やターミナルの記述は全体からみると極めて少なく、「湖」と「山」という竹生島を構成する自然に高い評価をしているようだ。

4-3 音とその音が聞かれた状況の関係の時代変遷を明らかにするための、音、季節、場所をアイテムとした数量化理論第Ⅲ類分析

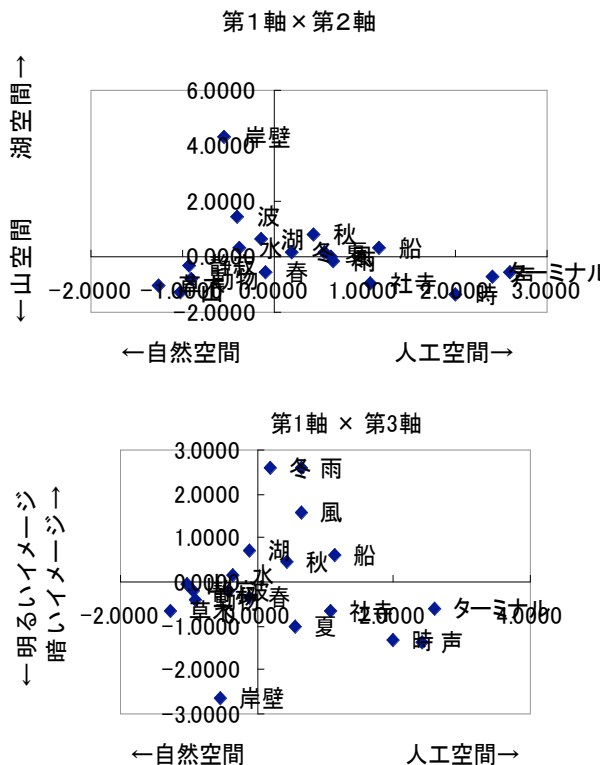


図7 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係

この平面において, 「声」と「ターミナル」, 「社寺」, 「岸壁」は単独で位置する傾向にあり, 他の環境要素と関係が少なく, 独自のサウンドスケープを形成していることを示している. 対照的に「風」と「雨」や, 「草木」と「山」, そして「波」と「水」のカテゴリ間は距離が近く, お互いに関係性の強いサウンドスケープであるといえる.

季節カテゴリは, いびつではあるが反時計回りに季節の移り変わり(春→夏→秋→冬)と対応した布置をしている. そして, 「雨」や「風」の音が冬に, 「社寺」や「声」の音が夏に評価されることが多いことを反映して, これらの音の布置は, 原点から各季節カテゴリを結ぶ方向の延長線上にある.

抽出語句をこの布置にあてはめて時代変遷をみると, 「自然空間—人口空間」軸での評価に大きな変化は無く, 島の自然と, 建造物双方が幅広く評価されていることがいえる. 「山—湖」軸では時代とともに山から湖へ推移する傾向が見て取れる. しかし山空間の評価が大きく減少しているということではなく, 湖空間の評価が高くなってきた, とみるべきだろう. 雄大な琵琶湖中をいく船旅は, 大きな印象を与えるのかもしれない. 「明るいイメージ—暗いイメージ」では, 時代とともに暗いイメージから明るいイメージを持つようになっている傾向がみられ. 現代では, 過去に「波」, 「湖」, 「雨」, 「冬」などの要素が持っていた自然への畏怖や崇拜とい

った感覚が薄れ, 「夏」や「声」「草木」にみられるような, 明るいイメージを島に持つようになってきていると思われる.

5. 結論・考察

5-1 竹生島のサウンドスケープのまとめ

①「声」と「ターミナル」, 「社寺」, 「岸壁」は他の環境要素と関係が少なく, 独自のサウンドスケープを形成している. 対照的に「風」と「雨」や, 「草木」と「山」, そして「波」と「水」のカテゴリはお互いに関係性の強いサウンドスケープであるといえる.

②全体としては「静寂」, 「草木」, 「波」, 「船」, 「風」の音の評価が高く, 場所は「湖上」, 「山」という大きな2要素の評価が高い.

5-2 竹生島を評価する視点のまとめ

①自然空間と人工空間とでは, 自然空間の評価が高いが, その割合はある程度一定している.

②山空間と湖空間とでは, 時代とともに山から湖へ評価が移る傾向がみられる. しかし山空間の評価も大きく減少しているわけではなく, 湖空間の評価が上がってきたと考えるべきである.

③島に抱くイメージでは, 時代とともに暗いイメージから明るいイメージへ評価が移ってきている.

5-3 サウンドスケープの変遷についての考察

竹生島の環境は大きく変化しておらず, それを評価する人々の意思が変化してきていると考えられる. 山から湖へ, 暗いイメージから明るいイメージへと島の評価が移ってきたことは, 近年の渡航の容易さや観光化による影響も大きいと考える.

6. 竹生島の活性への提案

本研究の結果よりを踏まえ, 以下に今後の竹生島活性への提案を述べる.

●竹生島に滞在し, 自然や文化に触れる宿泊学習やワークショップ, イベント等を実施

自然の音を聞くことを体験し, 脈々と続いてきた自然, 巡礼という文化を味わい, 竹生島活性の一歩となるのではないだろうか.

【脚注】

1) 中辻藤男, 2007-09-14, ヒアリング

2) 中辻藤男・生嶋巖雄・峰覚雄, 2007-09-14, 10-16, 11-01, ヒアリング

【参考文献】

1) 永幡幸司, 前田耕造, 岩宮眞一郎; 歳時記に詠み込まれた音環境の時代変遷の統計的分析, 日本音響学会誌, 52(2), 77-84(1996)

Research on transition of soundscape in Chikubu-shima Island

Kurashima Yusuke

1. Background of research

Chikubu-shima is an island of about 2km in surroundings located in the Shiga Prefecture Higashiazai-gun and the north of Biwako. The island is a place of scenic beauty, a historic site of the country specification, and has the Hougon-ji and the Chikubushima-jinja in the southern part of the island. Hougon-ji is the 30th note place of the west country 33-place pilgrimage, and the pilgrim is visiting still a lot. There is no directionality how to use Chikubu-shima Island because the number of a pilgrim and environmental guest who visits the island decreases, and there is not a special attachment in Nagahama City in recent years either.

2. Purpose and meaning

- ① I investigate the summary of Chikubu-shima Island and do it with the clue of the practical use of Chikubu-jima Island by clarifying a characteristic as the pilgrimage place and the history.
 - ② I clarify what kind of sound-scape of Chikubu-jima Island a pilgrim evaluated by text analysis.
 - ③ I clarify the element of the sound to constitute Chikubu-shima Island by clarifying the change of the soundscape and the tendency.
-
- ① A soundscape to constitute Chikubu-shima Island becomes clear, and a high element of the evaluation in Chikubu-shima Island becomes clear by clarifying what kind of element of the island coming pilgrims evaluated and can grope for the practical use of Chikubu-shima Island which kept it alive.
 - ② It becomes clear if I chase the description of the sound what kind of mutual relations the consciousness of "a pilgrim" hearing "sound" and it which I hear changed with.

3. Research method

- ① Documents investigation, an on-the-spot survey, hearing
I clarify the history that I followed, the approval of pilgrimage around the thirty-three holy places in the Kinki district and a flow until the present, the state of current Chikubu-shima Island and a problem and the daily life to hold of Chikubu-shima Island.
- ② The text analysis from documents
I perform the text analysis from a description of pilgrimage that I collected and clarify the soundscape that has been evaluated in Chikubu-shima Island.

4. Problem that Chikubu-shima Island has, and Transition of soundscape

Culture / the scene of Chikubu-shima Island which has been inherited ceaselessly for more than 1000 years is lost at the present by the beast harm of the common cormorant, and electricity is needed for the maintenance of cultural assets, crime prevention / disaster prevention again.

A pilgrim / the tourist is late years, a tendency to decrease, but I do not expect the big sightseeing, and the plan that kept tradition and culture, a scene alive is expected, and the borrowing of the island by events seems to be still possible, but there are electricity and the problem of the disaster prevention, and the large-scale plan seems to be difficult now.

- ① "A voice" and "a terminal", "shrines and temples", "the quay" have little other environment elements and relations, and I form an original soundscape, and it may be said that I am contrastive, and "wind" and

"rain" and "the trees and plants" and "a mountain" and a category of "a wave" and "the water" are strong soundscapes of the relationships each other.

- ② As a whole, "quietness", "the trees and plants", "a wave", "a ship", the evaluation of the sound of "the wind" are high, and, in the place, "beside the lake", evaluation of big 2 elements called "the mountain" are high.
- ③ Evaluation of the natural space is high, but, in nature space and artificial space, the ratio maintains the same to some extent.
- ④ In mountain space and lake space, the tendency that evaluation moves to from the mountain to the lake with the times is watched and, however, the evaluation of the mountain space is big and does not decrease and should think that evaluation of the lake space stopped.
- ⑤ For the image to have towards the island, evaluation moves from a dark image to a bright image with the times.

5.Proposal of Chikubu-shima Island to activation

- A plan to carry out lodging learning and a workshop, an event I stay in Chikubu-shima Island, and to conflict with nature and culture.

We experience that I hear a natural sound, and will not a plan to taste culture called the pilgrim who followed ceaselessly become one step of the Chikubu-shima Island activity?

目 次

第一章 序章	1
1-1 研究の背景	1
1-1-1 竹生島の活性	1
1-1-2 サウンドスケープの概念	1
1-1-3 サウンドスケープの歴史と概念の確立	2
1-1-4 現代の音環境への意識	2
1-1-5 竹生島とサウンドスケープの関わり	3
1-2 研究の目的・意義と位置づけ	3
1-3 論文の構成	4
第二章 「巡礼記」を分析する意義と視点	6
2-1 緒言	6
2-2 テキストから日本人の音風景の捉え方の特徴を分析した先行研究	6
2-3 「巡礼記」をテキストとすることの意義	7
2-4 「巡礼記」を分析する視点	8
第三章 研究・分析方法	9
3-1 緒言	9
3-2 分析対象としての「巡礼記」について	9
3-3 分析の手順	11
3-3-1 文献調査,実地調査,ヒアリング	11
3-3-2 文献からのサウンドスケープ調査	12
第四章 竹生島の歴史	19
4-1 緒言	19
4-2 歴史	19
4-3 生態・獣害	24
4-3-1 日本野鳥の会	24
4-3-2 滋賀県湖北場所振興局森林整備課	24
4-3-3 滋賀県生活環境部自然保護課	24
4-3-4 獣害についての考察	26

4-4	西国三十三箇所巡礼と竹生島	26
4-4-1	西国三十三箇所巡礼の成立	27
4-4-2	西国三十三箇所巡礼の発展	27
4-4-3	西国三十三箇所巡礼の隆盛	28
4-4-4	現在に至るまでの西国三十三箇所巡礼	28
第五章	宝厳寺,都久夫須麻神社と奉賛会へのヒアリングとその考察	31
5-1	緒言	31
5-2	2007.09.14 中辻藤男氏(奉賛会事務局)	31
5-3	2007.10.16 生嶋厳雄氏(都久夫須麻神社宮司)	31
5-4	2007.11.01 峯寛雄氏(宝厳寺住職)	32
5-5	ヒアリングのまとめ	33
第六章	「巡礼記」に取り上げられた音の分析と考察	35
6-1	緒言	35
6-2	分析対象としての「巡礼記」について	35
6-3	文献からの音の記述の抽出	39
6-4	音の出現頻度の変遷を探索するための時代毎の音の出現頻度分析と考察	42
6-4-1	時代毎の音の各カテゴリ出現数	42
6-4-2	江戸時代まで	47
6-4-3	大正時代	50
6-4-4	昭和時代	55
6-4-5	平成時代	67
6-5	「音×季節」,「音×場所」のクロス集計	73
6-5-1	江戸時代まで	75
6-5-2	大正時代	76
6-5-3	昭和時代1	77
6-5-4	昭和時代2	78
6-5-5	平成時代	79
6-5-6	音と季節,場所からみる時代変遷	80
6-6	音とその音が聞かれた状況の関係の時代変遷を明らかにするための,音,季節,場所をアイテムとした数量化理論第Ⅲ類分析	80
6-6-1	巡礼記から抽出した語句を用いての数量化理論Ⅲ類分析	81
6-6-2	カテゴリの布置の時代変遷	83

第七章 伝統的な音風景を生かした音環境づくりに向けて	86
7-1 緒言	86
7-2 竹生島の伝統的な音風景の捉え方のまとめ	86
7-2-1 江戸時代まで	88
7-2-2 大正時代	88
7-2-3 昭和時代 1	88
7-2-4 昭和時代 2	88
7-2-5 平成時代	88
7-2-6 音, 季節, 場所の関係	88
7-2-7 サウンドスケープの捉え方の変遷	89
7-3 巡礼地としての特性	89
7-4 竹生島の景観と文化の維持について	90
7-5 伝統的な音風景の捉え方を生かした環境づくりに向けて	90

図 表 目 次

【図】

図 2-1	俳句に詠まれた音,季節,場所の関係	6
図 3-1	先行研究における音の分類表	15
図 3-2	時代毎の抽出語句数	16
図 3-3	時代毎の抽出語句数(分割後)	17
図 4-1	湖上からの竹生島の景観	21
図 4-2	国宝 唐門の正面	22
図 4-3	国宝 弁財天像	23
図 4-4	営巣状況によるカワウの営巣場所の区分	25
図 4-5	熊野年代記による西国巡礼者数の推移①	29
図 4-6	熊野年代記による西国巡礼者数の推移②	29
図 6-1	時代毎の抽出語句数の割合(分割後)	40
図 6-2	各時代における,各カテゴリの出現頻度	43
図 6-3	音の各音カテゴリがその時代に占める割合(個)	44
図 6-4	季節の各カテゴリがその時代に占める割合(個)	45
図 6-5	場所の各カテゴリがその時代に占める割合(個)	46
図 6-6	江戸時代以前の抽出語句の各カテゴリの割合	47
図 6-7	大正時代の抽出語句の各カテゴリの割合	50
図 6-8	昭和時代 1 の抽出語句の各カテゴリの割合	55
図 6-9	昭和時代 2 の抽出語句の各カテゴリの割合	56
図 6-10	平成時代の抽出語句の各カテゴリの割合	67
図 6-11	各音における季節の割合(個)	73
図 6-12	各音における場所の割合	74
図 6-13	江戸時代までの各音における季節の内訳(個)	75
図 6-14	江戸時代までの各音における場所の内訳(個)	75
図 6-15	大正時代の各音における季節の内訳(個)	76
図 6-16	大正時代の各音における場所の内訳(個)	76
図 6-17	昭和時代 1 の各音における季節の内訳(個)	77
図 6-18	昭和時代 1 の各音における場所の内訳(個)	77
図 6-19	昭和時代 2 の各音における季節の内訳(個)	78
図 6-20	昭和時代 2 の各音における場所の内訳(個)	78
図 6-21	平成時代の各音における季節の内訳(個)	79

図 6-22	平成時代の各音における場所の内訳(個)	79
図 6-23	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係	82
図 6-24	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(江戸時代まで)	83
図 6-25	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(大正時代)	83
図 6-26	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(昭和時代 1)	84
図 6-27	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(昭和時代 2)	84
図 6-28	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(平成時代)	84

【表】

表 3-1	現在までに出版された巡礼記(抜粋)	10
表 3-2	文献調査時に参照・引用した文献表	11
表 3-3	西国三十三箇所巡礼の札所と山号, 寺院名	13
表 3-4	抽出語句カテゴリの分類	14
表 3-5	抽出した語句の元号で分類表	16
表 3-6	抽出した語句の元号で分類表(分割後)	16
表 4-1	竹生島の歴史	19
表 6-1	収集希望文献一覧	35
表 6-2	分析対象文献一覧	38
表 6-3	時代毎の抽出語句数	39
表 6-4	明治期の収集希望文献	40
表 6-5	文献毎の抽出語句数	40
表 6-6	抽出語句カテゴリの分類	42
表 6-7	時代毎の各カテゴリ出現数(個)	42
表 6-8	時代毎の音の各カテゴリがその時代に占める割合	44
表 6-9	時代毎の季節の各カテゴリがその時代に占める割合	45
表 6-10	時代毎の場所の各カテゴリがその時代に占める割合	45
表 6-11	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係の固有値	81
表 6-12	巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係のカテゴリースコア	81
表 7-1	各音カテゴリが象徴していると思われるイメージ	86

1 - 1 研究の背景

1 - 1 - 1 竹生島の活性

竹生島は、琵琶湖の北部に浮かぶ島であり、国指定名勝および国指定史跡である。

滋賀県長浜市（旧・東浅井郡びわ町）に属し、琵琶湖八景（深緑）に数えられる島であり、能や謡曲に取り上げられている。

島内には都久夫須麻神社と宝厳寺があり、古来より信仰の対象となっている島である。都久夫須麻神社は、もとは神仏一体であったが明治期の神仏分離により、弁財天社から改称した。宝厳寺は西国三十三箇所巡礼の第三十番札所であり、現在も多くの巡礼者が訪れる聖地である。

上述のような竹生島であるが、近年は島を訪れる巡礼者や環境客が減少し、地元の長浜市(旧びわ町)にも、地元としての特別な愛着があるという訳ではない¹⁾ため、長浜市行政も竹生島をどう活用していくのかという方向性を定めることができないでいる。また、カワウの獣害による森林の枯死により景観、文化の維持も困難になってきている。

さらに、電力供給が無いため自家発電で最低限の電力を発電している。よって夜間は停電し、防災・防犯の不備、文化財維持の困難、不便な生活、といった問題を抱えている。

以上のように現在の竹生島が抱える問題は、①島をどう活用していくかという方向性が定まらない、②獣害による森林の枯死が切迫している、③安定した電力供給が無いことから、島の防災・防犯や管理、維持が困難である、という問題の3点にあるといえる。

1 - 1 - 2 サウンドスケープの概念

「サウンドスケープ(soundscape)」とは、カナダの現代音楽作曲家・音楽教育家 R. マリー・シェーファーが提唱した概念であり、「sound(音)」と、「scape(眺め、景色)」という2つの語からなる複合語である。日本語で「音の風景」と訳され、その定義は、「個人あるいは社会によってどのように知覚され認識されるかに強調点の置かれた音の環境」²⁾である。

個々の音をそれぞれ単独に扱うのではなく、それらの組み合わせが構成する音環境全体を、1つの「景観」あるいは「風景」としてトータルに捉える。

また、個々の音あるいは特定の音環境を問題にする場合にも、環境全体との関連に置いて捉えるという考え方である³⁾。サウンドスケープは、認識主体が捉えた音の状態を指すので、サウンドスケープ研究や、サウンドスケープの思想を入れた環境づくりでは、「誰が聞くのか」「誰が聞いているのか」という認識主体の存在が重要である。

音環境をサウンドスケープとしてとらえる場合、またサウンドスケープを研究する際の有効な音の分類手段として、「基調音」「信号音」「標識音」がある⁴⁾。「基調音」とは、「特定の社会において絶えず聞こえているような音、あるいは他の音が知覚される背景を形成するのに十分なほど頻繁に聞こえているような音」⁵⁾、「信号音」とは「人が特に注意を向けるすべての音」である。サウンドスケープ研究において信号音は基調音と対比され、それらは視覚における図と地と同じような関係をなす。この対比関係を持つことによって音を風景として捉えることができる⁶⁾。「標識音」とは、「その共同体の人々によって特に尊重され、注意されるような特質を持つ

た共同体の音」を意味する⁷⁾。

以上挙げた3つの音から、対象とするサウンドスケープがどういった様相を呈しているか、どういった特徴を持っているか、を導きだすことができる。サウンドスケープの研究はこの3つの音の分類を基本に進められている。

1 - 1 - 3 サウンドスケープの歴史と概念の確立

サウンドスケープは元来音楽の分野から生まれて来た概念である。19世紀末から20世紀にかけ、従来のコンサートホールで演奏される西洋音楽に対して疑問を持ち始めた作曲家達が、それまで西洋音楽の常識であった「音楽の音＝楽音」「環境音＝非楽音」という関係を徐々に破壊していった。⁸⁾このような現代音楽の流れは、ジョン・ケージの音楽観でひとつの頂点を迎える。ケージは、「音楽とは音である。コンサートホールの中と外を問わず、我々を取り巻く音である。」⁹⁾といい、あらゆる音響が音楽の対象である、つまり聴かれる対象となるという可能性を示した。このような音楽会の影響を受けたR. マリー・シェーファーは、当初サウンドスケープという言葉を用いていたが、騒音で溢れる音環境をみて、世界サウンドスケーププロジェクト（WSP）を組織し、カナダやヨーロッパで調査、研究、教育、啓蒙と活動の場を広げていった。

上記のように、サウンドスケープ概念は進化していく中で多様な学問分野を吸収していった。それゆえ、サウンドスケープは学際的である。関連領域は音楽学、音響学、騒音制御工学、文化人類学、社会学、都市計画・環境計画、心理学、地理学、歴史学、建築学等、多方面にわたる。現在世界中で行われているサウンドスケープ研究は、サウンドスケープの概念を中心に据えた上で、1つあるいは複数の切り口で行われている。

1 - 1 - 4 近年の音環境への意識

前節まで述べてきた点に加え、音環境の問題点として我々の音環境への意識が貧しくなってきたことが挙げられる。元来、我々日本人は自然環境に美しさを見出し、情緒を感じる文化にあった。この美的感覚は音環境についても同様であり、雨の音や虫の声に耳を傾けてきた。そういった伝統的な文化のなかからは水琴窟やししおどし、風鈴や鐘といったものも表れ、今日まで音、を聴く、楽しむ、といった文化は続いている。

しかし文明の発達とともに、古来より親しんできた自然環境の音を聴くという文化、音への高い意識が徐々に下がりつつある。現代の社会は人工物で溢れ、四方八方から音が飛び交い、騒音問題が社会問題として日常的に取り上げられている。

騒音問題が取りざたされていても、我々は問題に対して消極的である場合が多い。音が氾濫する環境のなか、街中ではヘッドホンを装着して周囲の音から自分を切り離し、自分だけの音環境を構築し、家に帰ればオーディオスピーカーから流れる音に耳を傾ける。人工的な音との接点は多くなり、反比例するように自然音との接点はどんどん減少しているのではないだろうか。音楽との接点は多くなったが、生活の中で氾濫する音との接点が少なくなり、無関心になればなるほど、さらに社会は音で氾濫してゆく。また、騒音問題の当該地域と自分の生活に関わりが少ないからと、他人事のように無関心を装うのも、音が氾濫してゆく一因であると考えられる。

以上のように現代の音環境は、①生活の中で氾濫する音、②氾濫する音からの逃避と無関心、③それによりさらに氾濫する音という3つの問題を抱えているといえる。

1 - 1 - 5 竹生島とサウンドスケープの関わり

本研究では、竹生島の将来への方向性が定まらない状況である問題に着目する。竹生島を活用する方法を模索する、ひとつの視座としてサウンドスケープの概念を用いる。

「音」に着目した理由は、竹生島は古来より続く荘厳な雰囲気への信仰、修行の島であるため、竹生島を評価するにあたり、「音」が重要な位置にあると考えたからである。数多く訪れる巡礼者達が、竹生島のどのような「音」を評価してきたのかを明らかにすることで、竹生島を活用する方向性を見定める手がかりにできると考える。

1 - 2 研究の目的・意義と位置づけ

R. マリー・シェーフアーは、過去のサウンドスケープを知るために、人類学や歴史の記録に並んで文学や神話からとられた「耳の証人」の陳述を分析している¹¹⁾。録音機器の存在しなかった時代のサウンドスケープを知るには、有効な手段である。R. マリー・シェーフアーが中心となった世界サウンドスケーププロジェクト(WSP)の活動では、この方法によって世界各地の様々な音について調査し、データとして蓄積している¹²⁾。

以上のことを踏まえ、本研究では認識主体である巡礼者達の音風景の捉え方に着目し、彼らが評価してきたサウンドスケープの変遷を明らかにすることを目的とする。サウンドスケープの変遷を追うことによって、対象地点において評価の高い要素を明らかにし、活用を図るひとつの指針とする。また、1 - 1 - 5で述べたように音環境への意識が貧しく変化してしまった現代において、対象地点での音環境への意識はどのように変化してきたのかを明らかにする。

研究方法は、対象地点を1地点定め、そこに由来する書物をテキストに、巡礼者が対象地点のどのような要素を評価してきたのかを明らかにする、という方向で進める。以下に詳細を記す。

本研究の対象地点は「竹生島」とする。竹生島は、滋賀県東浅井郡、琵琶湖の北に位置する周囲約2kmの島で、国指定の名勝、史跡になっており、島内南部には都久夫須麻神社と宝厳寺があるのみである。宝厳寺は西国三十三箇所巡礼の第三十番札所であり、古来より巡礼者が絶えない。島内へは僧以外住まうことを許されておらず、島には一件の民家も無い。島への渡航は船を使うしか無いことも相まって、荘厳な信仰の島という色合いが強い。

竹生島を対象とする理由は、古来より信仰の島として続いているため、大きな環境の変化、例えば開発で別の施設が建設されたり、埋め立てられて元の様相とかけ離れてしまったり、寺社で無くなってしまったり、といったことが無い、島全体のサウンドスケープの変遷を追うことが可能なことと、竹生島を訪れた巡礼者が記した道中日記である巡礼記が存在することである。巡礼記には巡礼の際、当地を訪れた時に感じた自然環境に対する感覚も記されているものと考えられる。巡礼記の存在により、その中に記された記述からサウンドスケープを読み取ることが可能になる。巡礼記は現在に至るまで様々に編集、出版されているため、時代変遷を追うことが可能であ

る.

よって,①巡礼記等の書物が多数存在する事,②巡礼の聖地としての特性上,島に環境の変化が少ない,という 2 点から,時代によって認識主体(巡礼者)の音への意識が変化しているかどうかを分析することが可能となり,巡礼者が対象地点のどのような要素を評価してきたのかの変遷を追うことが可能となる.

以上述べてきたことから,本研究の目的とサウンドスケープ研究としての位置づけをまとめる.研究の目的は,

- ①竹生島の概要を調査し, 巡礼地としての特性と歴史を明らかにすることで, 竹生島の活用の手がかりとする.
- ②テキスト分析により, 巡礼者が竹生島のどのようなサウンドスケープを評価してきたのかを明らかにする.
- ③サウンドスケープの変遷を明らかにすることにより, 竹生島を構成する音の要素とその傾向を明らかにする.

であり,研究の意義は,

- ①竹生島を構成するサウンドスケープが明らかになり, 訪れる巡礼者等が島のどのような要素を評価してきたのかを明らかにすることで, 竹生島での評価の高い要素が明らかとなり, それを生かした竹生島の活用を模索することができる.
- ②音の記述を追えば, 聞こえてくる「音」と,それを聞く「巡礼者」の意識がどのような相互関係をもって変化してきたのかが明らかになる.

である.

1 - 3 論文の構成

本研究では,竹生島を対象に,手法をサウンドスケープとして竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにする.

第一章で本研究に至る経緯と背景,目的・意義を述べる.なぜ竹生島を対象とし,なぜサウンドスケープの概念を用いるのか,サウンドスケープの変遷から何を論ずるのかを述べる.

第二章で巡礼記を分析する意義と視点を述べる.本研究はサウンドスケープの概念を用いて進めるが,本研究で用いるテキスト分析の視点についてや,竹生島の歴史,西国三十三箇所巡礼について記述し,竹生島が辿ってきた歴史を明らかにする.

第三章の研究・分析方法では,テキスト分析の意義と対象文献の選択方法,語句の抽出過程,分析方法,分析の進め方を述べる.

第四章で宝厳寺,都久夫須麻神社と奉賛会におこなったヒアリングについて述べる.実際に竹生島とともに生活しておられる方々の声を聞き,竹生島がどう変わってきたのか,現在竹生島に何を感じているのかを明らかにする.

第五章で「巡礼記」に取り上げられた音の分析と考察をおこない,竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにする.時代毎のサウンドスケープの特徴を明らかにし,その変遷を辿

ることで、竹生島で評価されてきたサウンドスケープが明らかとなる。

第六章で伝統的な音風景を生かした音環境づくりに向けての意見を述べる。分析で明らかとなったサウンドスケープを、竹生島の活用にどう役立てていくのか、筆者の意見を述べる。

上記のような論文の構成で進めることとする。

【参考文献および脚注】

¹⁾中辻藤男, 2007-09-14, ヒアリング

²⁾平松幸三; サウンドスケープの思想性・学問性, サウンドスケープとその計画論への展開, 土木学会関西支部共同研究グループ, 39(1991)

³⁾鳥越けい子; サウンドスケープデザインの考え方, サウンドスケープとその計画論への展開, 土木学会関西支部共同研究グループ, 18(1991)

⁴⁾R. マリー・シェーファー; 世界の調律, 平凡社, 30-31

⁵⁾R. マリー・シェーファー; 世界の調律, 平凡社, 396

⁶⁾R. マリー・シェーファー; 世界の調律, 平凡社, 398

⁷⁾R. マリー・シェーファー; 世界の調律, 平凡社, 398

⁸⁾平松幸三; サウンドスケープの思想性・学問性, サウンドスケープとその計画論への展開, 土木学会関西支部共同研究グループ, 1(1991)

⁹⁾平松幸三; サウンドスケープの思想性・学問性, サウンドスケープとその計画論への展開, 土木学会関西支部共同研究グループ, 2(1991)

¹⁰⁾平松幸三; サウンドスケープの思想性・学問性, サウンドスケープとその計画論への展開, 土木学会関西支部共同研究グループ, 2(1991)

¹¹⁾R. マリー・シェーファー; 世界の調律, 平凡社, 209

¹²⁾R. マリー・シェーファー; 世界の調律, 平凡社, 209

2 - 1 緒言

本章では、竹生島のサウンドスケープの変遷を明らかにする上で、「巡礼記」をテキストとして分析する意義と視点を述べる。

2 - 2 テキストから日本人の音風景の捉え方の特徴を分析した先行研究

テキストから日本人の音風景の捉え方の特徴を分析した先行研究として、岩宮眞一郎、永幡幸司は「俳句の中の音とその音が聞かれた状況の関係」¹⁾において、日本大歳時記および朝日俳壇に掲載された、江戸時代から現代に至る音に関する記述のある 3810 句から、音と音が聞かれた状況の関係を考察している。分析の結果、「祭、時」と「社寺」、及び、「水」と「川、海」は他の環境要素と関係が少なく、独自のサウンドスケープを形成していること、「社寺」空間は、「時(を告げる音、主として鐘の音)、祭」の音との結びつきが強く、特異な音環境を形成していること、などを明らかにした。そして季節に対する象徴性が、次第に「音」から失われつつあるようだ、日本人は自分達を取り巻く音から季節を感じ取るという文化を無くしつつあるのではないかと警鐘を鳴らしている。

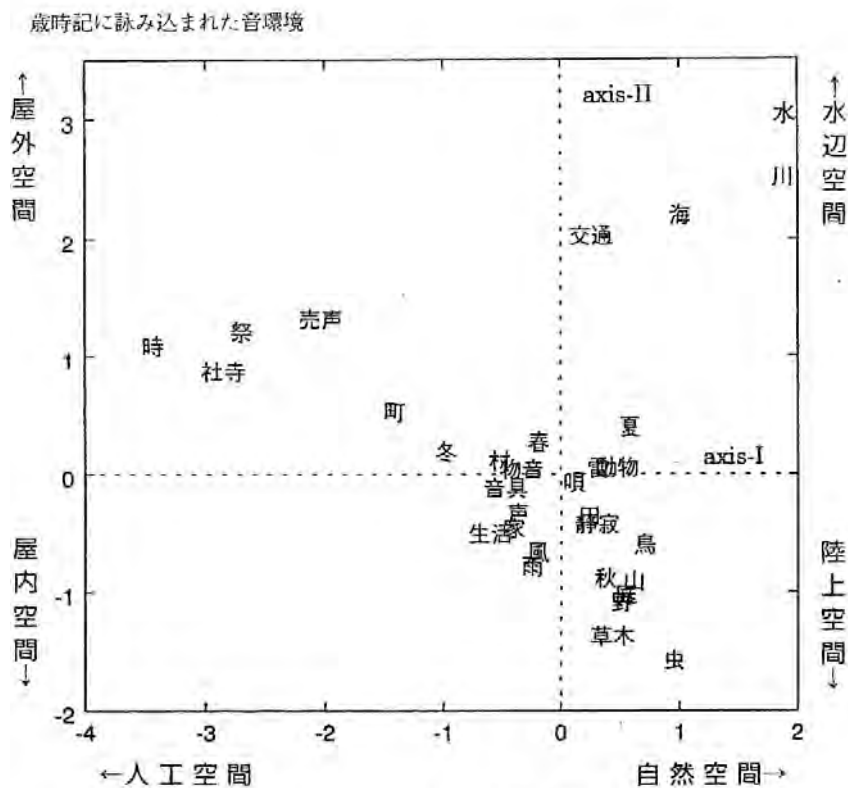


図 2-1 俳句に詠まれた音、季節、場所の関係²⁾

さらに永幡幸司,前田耕造,岩宮眞一郎らは,「歳時記に詠み込まれた音環境の時代変遷の統計的分析」³⁾において,日本におけるサウンドスケープの変化が,江戸時代から昭和にかけては緩やかだったのに対し,ここ数十年の変化は急激であり,その変遷の内容は,自然空間のサウンドスケープから人間の生活音によるサウンドスケープというものであったこと,そして音を季節の象徴として敏感に読み取り,そこから情緒を感じる,といった日本の音文化が廃れていきつつある,として,生活環境全体から季節感が失われていくことを危惧している。

2 - 3 「巡礼記」をテキストとすることの意義

本研究では竹生島を対象地点と定め,認識主体を竹生島を訪れる巡礼者として,彼らが記した巡礼記を手がかりに,竹生島で評価されてきたサウンドスケープの変遷を明らかにすることが目的である。本節では,巡礼者が評価して来た竹生島のサウンドスケープの変遷を探る上で,「巡礼記」をテキストとすることの意義を述べる。

人々は,苦しき不自由な時代に観音への救いを求め,様々な思いをもって巡礼の旅に出ている。観音は救いを求めるものすべてに救いの手を差し伸べ,その求めに応じた様々な姿に変化して現れると伝えられ,千手観音,馬頭観音などがよく知られている。巡礼の旅は過酷なものであり,現在のように移動手段が発達していなかった時代には,道中病に倒れ,力尽きた者達も数多く存在した。文明が発達し,科学が進歩した現在においても,観音の救いを求め巡礼の旅に出る風習は脈々と続いており,多くの人々が各地の巡礼地を訪れている。このように巡礼は,現在でも長い年月に渡って多くの日本人が行ってきた伝統的な修行であり,その厳しい道中を記した巡礼記には,修行の道中で出会った様々な事象,考えなどが素直に記されているといえる。これは音についても同様である。また,修行の最中で感じたことの記述には,著者の心理状態や信仰やイメージが含まれた状態で読み取ることができる。

以上のように,「巡礼記」をテキストとすることの意義は,巡礼は長い年月をかけて行われてきた修行であるから,数多くの巡礼記が存在するということと,厳しい修行の道中を記した書物であることから,著者が巡礼時に感じた感覚を鮮明に読み取ることが出来るという点である。

以下に例を示す。

「さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響いて,,,⁴⁾」

この記述ではさざ波の寄せる音を琴の音色に例えてそれに情緒を感じるとしている。波の音の優雅さを琴に見立てるといふ,現代では失われてしまったと思われる感性が感じられる。過去の記述を追うことにより,このような当時の人々の感性を感じることができ,それが時代変遷とともにどう移り変わっていったのか,様々な感性は現代にも受け継がれているのか,を明らかにすることができる。同時に,竹生島に寄せるさざ波が評価されている,ということも言える。

「浪が激しく砕けていたのには驚きというより,こわくなりました⁵⁾。」

この記述では、寄せる波が竹生島に当たって砕ける様子が恐怖の対象として記されている。波を見て恐れを抱くというのは、現代にも通じる感性である。竹生島は水神である弁財天を祀るが、琵琶湖の湖上という渡航困難な立地に水神を祀ることは、水神を讃えると同時に、畏怖の対象として認識していたのかもしれない。

上記の例のように、浪の音ひとつを取ってみても、その中には著者一人一人の豊かな感性が見て取れる。記された記述のひとつひとつを注意深く分析することにより、竹生島を取り巻くサウンドスケープの流れを明らかにしてゆく。

2 - 4 「巡礼記」を分析する視点

2 - 3で述べたように巡礼とは修行であるから、修行中は心身共に非常に敏感になっている。そして修行の中で自分自身と向き合い、その中で感じたこと、思ったことを巡礼記として記すのである。

本研究の目的は、竹生島で評価されてきたサウンドスケープの変遷を明らかにすることである。巡礼記を分析する方法は、サウンドスケープの要素を識別するため、「音の種類」、「季節」、「場所」といったサウンドスケープを特定する要素を抽出し、それらが時代変遷とともにどのように変化してきたか、竹生島を評価する感性は時代とともに変化しているのか、を明らかにし、それを竹生島におけるサウンドスケープの変遷とする。

【参考文献および脚注】

- 1) 岩宮眞一郎, 永幡幸司; 俳句の中の音とその音が聞かれた状況の関係, 騒音制御, 20, 47-51 (1996)
- 2) 岩宮眞一郎, 永幡幸司; 俳句の中の音とその音が聞かれた状況の関係, 騒音制御, 20, 47-51 (1996)
- 3) 永幡幸司, 前田耕造, 岩宮眞一郎; 歳時記に詠み込まれた音環境の時代変遷の統計的分析, 日本音響学会誌, 52 (2), 77-84 (1996)
- 4) 馬場海嘉; 竹生島略誌, 宝厳寺事務所, 5 (1925)
- 5) 松原哲明, 西国巡礼の旅 観音のころ, 咬成出版社, 218 (1986)

3 - 1 緒言

本章では,巡礼者が竹生島のサウンドスケープをどのように捉えてきたかを分析するため,巡礼記をテキストとして,巡礼記の中に取り上げられている音の種類,季節,場所を分析及び考察し,竹生島で評価されてきたサウンドスケープの変遷を明らかにする方法を述べる.

3 - 2 分析対象としての「巡礼記」について

巡礼とは,各地の寺院や神社を訪ね巡り,巡拝をする宗教的な行為のことである.巡礼を世に広めたのは平安期の花山法皇とされ,院政期から中世にかけての観音信仰の広まりとともに,戦争や貧困のなかで武士や貴族,宗教者に浸透する.中世以降は一般階級にも広がりをみせる.近世では比較的平和な世相を反映して人々は極楽往生から現世利益を求めるようになり,移動手段の発達もあり,旅行的要素も含んで大いに広まった.

江戸時代頃から,読み書きの教養のある一般大衆は道中記を記すようになり現在に至るまで様々な巡礼記が編集・出版されている.下記に例を示す.

表 3-1 現在までに出版された巡礼記(抜粋)

タイトル	著者	出版年	出版社
西國順禮記	竹屋喜兵衛, 中村藤兵衛	1714	
西國巡禮歌要解	愍譽	1779	
西國順禮細見大全	俣野通尚	1825	
西國卅三處靈場記	厚譽春鶯	1833	
西國三十三所観音靈場記圖會	厚譽春鶯和上舊	1845	
福原西國巡拝記	会下山人	1927	神戸巡礼会
西國三十三所巡禮に関する目録	田中緑紅	1931	三々會 : 有樂會
西國巡禮案内記 : 新釋御詠歌物語附	清水谷善照	1953	西国札所会事務所
新釈西国巡礼歌	松原泰道	1960	鴻盟社
巡礼の旅 : 西国三十三カ所	白洲正子	1965	淡交新社
西国巡拝記	杉本苑子著	1966	大法輪閣
西国三十三ヶ所靈場巡り記		1966	徳島県老人クラブ連合会
巡礼の寺 : 西国三十三カ所観音靈場	三浦美佐子, 小川光三	1967	保育社
西国三十三カ所	平幡良雄	1967	札所研究会
ドライブ西国三十三カ所	札所研究会	1971	札所研究会
西国巡礼	白洲正子	1974	駸々堂
西国三十三所巡礼	渡辺守順	1976	白川書院
関西巡礼の旅 : 西国三十三観音	首藤一	1978	実業之日本社
巡礼の旅 : 新西国靈場	京都新聞社	1979	京都新聞社
新西国巡礼の寺	橋本哲二	1982	保育社
播磨西国三十三カ寺巡礼	藤木明子	1984	神戸新聞出版センター
観音のころ : 西国巡礼の旅	松原哲明	1986	佼成出版社
西国三十三所観音巡礼 : 法話と札所案内	西国札所会	1987	朱鷺書房
生きる : 西国巡礼と観音信仰	伊佐早二郎	1990	泰流社
聖なる旅	真野俊和	1991	東京堂出版
西国札所古道巡礼 : 「母なる道」を歩む	松尾心空	1992	春秋社
良寛巡礼	小林新一	1992	恒文社
西国 33 カ所靈場めぐり	小林茂	1993	日地出版
花天月地	黒田杏子	2001	立風書房
遍路と巡礼の民俗	佐藤久光	2006	人文書院
西国札所古道巡礼 : 「母なる道」を歩む	松尾心空	2006	春秋社

本研究では、竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにするために、西国三十三箇所を扱った巡礼記をテキストとする。理由は竹生島に関する記述のある巡礼記が数多く存在す

ることと、巡礼記には修行道中で感じた率直な感情が綴られており、自然環境に関する記述も同様であると判断したからである。

3 - 3 分析の手順

本研究の分析は以下の手順で進めることとする。

①文献調査,実地調査,ヒアリング

②文献からのテキスト分析

まず、文献調査、実地調査、ヒアリングによって竹生島の辿ってきた歴史、西国巡礼の成立と現在までの流れ、現在の竹生島の状態と、抱える問題や宝厳寺、都久夫須麻神社の日常を明らかにする。次に収集した巡礼記からのテキスト分析をおこない、竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにする。

3 - 3 - 1 文献調査,実地調査,ヒアリング

竹生島の基礎調査を目的に、文献調査、実地調査、ヒアリング調査を実施する。文献調査により竹生島の概要と歴史の把握を、実地調査により実際の竹生島の景観とサウンドスケープの調査を行う。さらにヒアリング調査によって実際に竹生島とともに生活する人らの声を聴き、文献からは得られない竹生島の実態を得ることが目的である。

文献調査時に引用・参照した文献は以下のとおりである。

表 3-2 文献調査時に参照・引用した文献表

タイトル	著者	出版年	出版社
竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝厳寺事務所
古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺	陳舜臣, 峰寛海	1980	淡海社
宝厳寺と湖北の名刹	大山邦興	2002	小学館
神を斎く島のメモリー 竹生島	(株) 日本出版出版事業部	1986	滋賀県びわ町観光協会
竹生島の鳥	堀田光鴻	1939	日本野鳥の會
現場から 竹生島の森林再生 カワウ被害地における保安林改良事業	井上清	2003	日本治山治水協会治山研究会
カワウによる竹生島植生影響調査報告書	カワウ研究会	1997	滋賀県生活環境部自然保護課
西国三十三所巡礼	三石学	2005	国文学解釈と鑑賞
近世の西国巡礼	新城常三	1977	民俗学研究紀要
近世における竹生島の開帳について	佐々木孝正	1968	印度学仏教学研究
竹生島における神仏分離について	佐々木孝正	1975	大谷学報
西国巡礼と四国遍路の再考察と 現在の巡礼者の動き-1-	前田卓	1990	関西大学社会学部紀要
竹生嶋誌	澤実英	1975	宝厳寺事務所

ヒアリング対象者は、次のとおりである。竹生島に深く関わる人達として、以下の3名を選抜した。

①2007-09-14 中辻藤男氏（奉賛会事務局）

滋賀県長浜市役所びわ支所(旧東浅井郡びわ町役場)にて

②2007-10-16 生嶋巖雄氏（都久夫須麻神社宮司）

竹生島内都久夫須麻神社にて

③2007-11-01 峯 寛雄氏（宝巖寺住職）

竹生島内宝巖寺にて

3 - 3 - 2 文献からのサウンドスケープ調査

①文献の収集

西国三十三箇所巡礼の巡礼記を GeNii 学術コンテンツ・ポータル¹⁾内の Webcat Plus²⁾で「西国」、「巡礼」、「三十三」、「順礼」、「竹生島」等をキーワードに検索し、全国の図書館に蔵書があり、借用可能なものについては借用する。借用不可なものに関しては、閲覧可能なものが近隣場所に蔵書されている場合、直接複写もしくはテキストデータを収集しに向かう。

平行して近隣場所の図書館を巡り、蔵書されている巡礼記を複写、もしくはテキストデータ収集をおこなう。

②文献からの音の記述の抽出・分類

収集した文献からのテキストデータのうち、竹生島について記述されている箇所を分析対象とする。西国三十三箇所は以下、表 3-3 に示すとおり、第1番から第33番まで番号が振られており、巡礼記も多くは第1番から、巡礼する順番に従って記されている。本研究の分析対象は竹生島のため、第30番の宝巖寺の巡礼の項を分析対象として抽出する。

表 3-3 西国三十三箇所巡礼の札所と山号, 寺院名

札所番号	山号	寺院名
第 1 番	那智山	青岸渡寺
第 2 番	紀三井山	金剛宝寺護国院
第 3 番	風猛山	粉河寺
第 4 番	槇尾山	施福寺
第 5 番	紫雲山	葛井寺
第 6 番	壺阪山	南法華寺
第 7 番	東光山	龍蓋寺
第 8 番	豊山	長谷寺
第 9 番		興福寺南円堂
第 10 番	明星山	三室戸寺
第 11 番	深雪山	上醍醐寺
第 12 番	岩間山	正法寺
第 13 番	石光山	石山寺
第 14 番	長等山	園城寺
第 15 番	新那智山	観音寺
第 16 番	音羽山	清水寺
第 17 番	補陀落山	六波羅蜜寺
第 18 番	紫雲山	六角堂頂法寺
第 19 番	霊麁山	革堂行願寺
第 20 番	西山	善峯寺
第 21 番	菩提山	穴太寺
第 22 番	補陀洛山	總持寺
第 23 番	応頂山	勝尾寺
第 24 番	紫雲山	中山寺
第 25 番	御嶽山	清水寺
第 26 番	法華山	一乗寺
第 27 番	書寫山	圓教寺
第 28 番	成相山	成相寺
第 29 番	青葉山	松尾寺
第 30 番	厳金山	宝厳寺
第 31 番	姨綺耶山	長命寺
第 32 番	繖山	観音正寺
第 33 番	谷汲山	華厳寺

巡礼記の竹生島の項のテキストデータより、音やその状況(季節, 場所)を抽出し、それらを各カテゴリ(表3-4)に分類する。

音に関する記述とは、記述が「記述に音の要素が内包されていていると考えるのが自然なもの」という観点でおこなった。例を挙げると、「稲妻ショーはなかなか見もので さながら花火大会のようだ³⁾。」という記述には、「稲妻ショー」という記述がある。これは、稲妻が走る様子の記述であるが、直接擬音語で音を表した表現ではないが、稲妻の音を記述から読み取ることは容易であるため、「稲妻の音の記述」として抽出・分類する。抽出・分類に関しては、「音の種類」、「季節」、「場所」が読み取れる範囲で文節単位まで分割して抽出し、状況を把握しやすいよう、文節を複数続けた形で分類する。

表3-4は、先行研究⁴⁾における音の分類法を参考にして、図3-1に示したものが先行研究における、歳時記を対象としたテキスト分析の音の分類であるが、この分類を参考にして、より竹生島を分析するのに都合の良いように若干の修正を加えた。具体的には、場所のカテゴリに土産物店や波止場、ターミナルを追加したことや、田畑や村等の削除である。また、音のカテゴリは、雨と雷など、いくつかのカテゴリをまとめた。これについては、数量化Ⅲ類の項で後述する。

表3-4 抽出語句カテゴリの分類

音	水(せせらぎ, 清水, 潮騒等), 船, 雨(雨, あられ, みぞれ, 雷等), 風, , 草木(枯葉, 木の実等), 動物, 声, (唄, 売声以外の人の声, 唄, 歌, 音楽), 時(鐘の音など), 静寂,
季節	春, 夏, 秋, 冬
場所	湖, 山, 土産店, 社寺, 波止場, ターミナル

アイテム	カテゴリ
音	S1: 水 (せせらぎ, 清水, 潮騒等), S2: 雨 (雨, あられ, みぞれ等), S3: 風, S4: 雷, S5: 草木 (枯葉, 木の実等), S6: 動物 (蛙を含む), S7: 鳥 (鳴き声, 羽音), S8: 虫, S9: 声 (S10, S11 以外の人の声全般), S10: 唄 (歌, 音楽), S11: 売声 (物売りの声), S12: 生活 (家事の音, 仕事の音等), S13: 交通 (交通に関わる音), S14: 時 (鐘の音など時を告げる音), S15: 祭 (祭りに関わる音), S16: 音具 (風鈴, 鳴子, 楽器等), S17: 物音 (S1~S16 で分類不可能な音を含む), S18: 静寂
季節	SE1: 春, SE2: 夏, SE3: 秋, SE4: 冬
地域	P1: 海辺, P2: 川辺, P3: 山, P4: 野, P5: 田畑, P6: 町, P7: 村, P8: 家, P9: 庭, P10: 社寺仏閣

図 3-1 先行研究における音の分類表

以上までの流れを,例を用いて説明する.例では,1925 年刊,馬場海嘉著の「竹生島略誌」を用いる.

,,,夏は避暑地として頗る宜い,緑樹の露滴る如き岩陰に清涼を入る折々,さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響て,,,⁵⁾

「竹生島略誌」の中の,上記一節の,「さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響て」というくだりについて考察する.「さざ波の音」は波の音,「夏は避暑地として,,,」とあるので季節は夏,千場所は,「さざ波」より「湖」,「岩陰に清涼を入る折々」は山の岩肌の記述なので,「山」のカテゴリに分類する.このような流れで分類をすすめていく.

次に時代変遷を追うにあたっての文献の時代区分であるが,記述の中に伝承等の引用が含まれている場合は,引用元の時代に当てはめて分析をすすめることとする.しかし,伝承等の引用であっても,著者の巡礼時の状況に当てはめて引用している場合は,記述時の時代に区分するものとする.表 3-5 に収集文献のうち,分析対象としたもの(第六章で詳述)から抽出した語句を元号で分類したものを以下に示す.

表 3-5 抽出した語句の元号で分類表

	西暦	語句数
江戸まで	-1868	21
明治	1868-1912	0
大正	1912-1926	35
昭和	1926-1989	91
平成	1989-2006	47

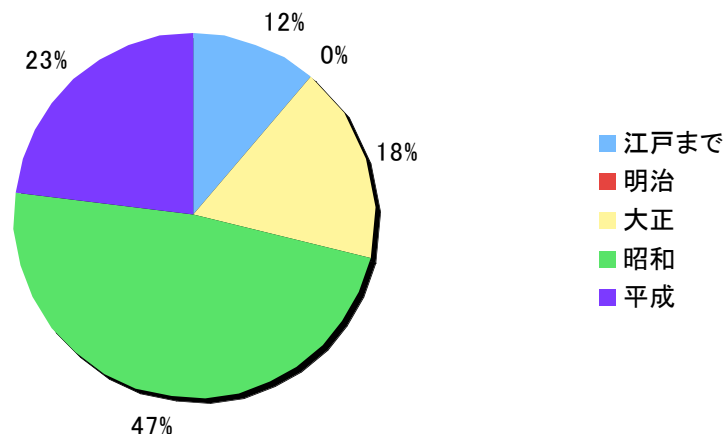


図 3-2 時代毎の抽出語句数

表 3-5 のままだと,昭和の語句の数が極めて多く,元号ごとの母数に大きな偏りが出るので,下記表 3-6 に示すように,昭和を 1,2 と分割して分析をすすめることとする。

明治時代の語句が存在しない問題とその原因については,第六章で詳述する。

表 3-6 抽出した語句の元号で分類表(分割後)

	西暦	語句数
江戸まで	-1868	21
明治	1868-1912	0
大正	1912-1926	35
昭和 1	1926-1980	46
昭和 2	1980-1989	45
平成	1989-2006	47

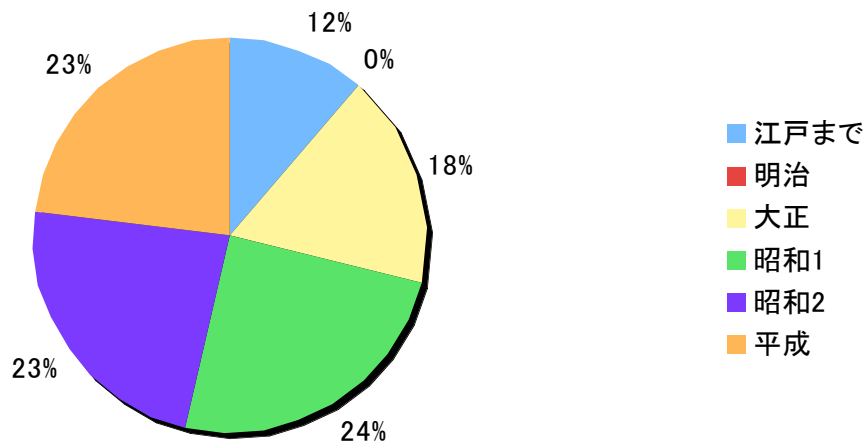


図 3-3 時代毎の抽出語句数(分割後)

③分類された抽出語句の分析

竹生島を構成する様々な音がどのように評価されてきたかを明らかにするため, 下記の分析をおこなう.

(i) 音の出現頻度の変遷を探るための時代毎の音の出現頻度分析をおこない, 音の種類, 季節, 場所に分類された各カテゴリを元号毎にどのような頻度で表れているかを明らかにする. ある時期を境に出現頻度が低くなっていったカテゴリや, 逆に出現頻度が高くなってきたカテゴリ, また全体として, 各カテゴリの大まかな出現頻度の推移が明らかとなる.

(ii) 「音の種類」と「季節」, 「音の種類」と「場所」とのクロス集計をおこない, 記述された音が, どの季節で評価されている傾向があるか, どの場所で評価されている傾向があるかを明らかにする. これにより, 竹生島で評価の高い「音の種類」と「季節」, 「音の種類」と「場所」の組み合わせが明らかになる.

(iii) 音とその音が聞かれた状況の関係の時代変遷を明らかにするため, 音の種類, 季節, 場所をアイテムに数量化理論第Ⅲ類分析をおこない, 音とその音が聞かれた状況の関係を包括的に捉える. 名義尺度の相互関係を空間上の布置で表現することができ, 各カテゴリ同士の結びつきの強弱を視覚的に捉えることができる. どの要素が関係し合ってサウンドスケープを形成しているかが明らかとなる.

(iv) 記述に込められたサウンドスケープを考察し, どのような音が描写されているか, どのような感情が込められているかを個別に読み解く.

【参考文献および脚注】

- 1) GeNii(NII 学術コンテンツ・ポータル): <http://ge.nii.ac.jp/genii/jsp/index.jsp> , 2008-01-10
- 2) Webcat Plus: <http://webcatplus.nii.ac.jp/> , 2008-01-10
- 3) クレイグ・マクラフラン; 西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中, 小学館, 304(2003)
- 4) 永幡幸司, 岩宮眞一郎; 歳時記に詠み込まれた音環境の時代変遷の統計的分析(第2報), 日本音響学会誌, 53(1), 3-12(1997)
- 5) 馬場海嘉; 竹生島略誌, 宝厳寺事務所, 3(1925)

4 - 1 緒言

本章では、竹生島の歴史を年代順に明らかにすることにより、現在までの竹生島が辿ってきた歴史の流れを理解することを目的とする。

4 - 2 歴史

弁財天霊場として知られる宝厳寺は、琵琶湖の北部に浮かぶ周囲 2 km の竹生島にある。竹生島巖金山と号し、真言宗豊山派に属する。本尊は弁財天と千手観音である。

竹生島は、安岐の巖島、鎌倉の江ノ島とならび、弁財天三霊場の一として全国的に著聞であり、島内には浅井姫命を祀る都久夫須麻神社と神宮寺宝厳寺の仏堂として法華堂、弁財天堂、千手千眼観音を安置する観音堂が建つ。古来より浅井姫命が鎮座し、水神として崇められ、ことに湖上を往来する船の安全航行を願って尊崇されていた。

表 4 - 1 に竹生島の歴史を年表として記す。

表 4 - 1 竹生島の歴史

和暦	西暦	竹生島
天平 10	738	聖武天皇の勅命により、招提寺の僧行基、竹生島に渡り 四天王像を造り小堂に安置する
勝宝 元	749	元興寺僧泰平、東大寺僧賢円、来島し修行する
	4	752 国造の田次丸、行基建立の小堂を三間の仏殿に改築する
	5	753 郡の大領浅井直馬養、金色の観世音菩薩像を造立する
宝字 8	764	恵美押勝の乱の時、これを征討した將軍の蔵下鷹は竹生島の神に戦勝を祈願する
貞観 2	860	天台僧真静、来島し修行する
	13	871 浅井盤提、食堂を建立する
	14	872 浅井広志根、湯釜を鑄造施入する
仁和 3	887	天台僧尋明・慶詮・雲晴ら来島、修行する
寛平 2	890	天台僧清源・道塵・理聖ら来島、修行する
昌泰 3	900	十月、宇多法皇が行幸され、本工寮に命じ三間の仏殿を七間に改築させ、 勅旨田三町を施入する
延喜 6	906	天台僧柿源・甚祐ら来島、修行する
	13	913 住僧慶照・基然ら銅鐘一口鑄造する
	16	916 常住沙弥豊祐、多宝塔一基を建立する
延長 8	930	越前掳出雲真行、法華三昧堂を建立し、金色釈迦如來像と四天王像を安置する
貞元 2	977	天台座主良源、竹生島に於て舞樂を奏し、法華の妙典を請じ、雨を乞う
貞永 元	1232	9 月、全山焼亡の大火に見舞われる
弘安 7	1284	春、早崎村に守護使重行乱入のため、寺僧ら六波羅の奉行所へ提訴する

		1303	台風による被害
正中	2	1325	10 月, 大地震で多くの堂舎が倒壊する
	3	1326	3 月, 沙門素達, 勸進聖として資縁勧募を行う
建武	3	1336	10 月, 足利直義, 禁制状を竹生島に下す
延元	元	1338	6 月, 後醍醐天皇, 綸旨を下して竹生島に天下の太平を祈らしめる
貞和	元	1345	11 月, 足利尊氏, 錦織東郷の地頭職を竹生島に寄進する
観応	元	1350	4 月, 大光寺住持宗光, 弘法大節真跡の上新請来経等目録一卷を竹生島に寄進する
明德	2	1391	6 月, 細川頼之, 将軍家御教書を竹生島に与える
永享	8	1436	4 月, 足利義教, 御判の御教書（守護使不入・課役免除）を竹生島に与える
享徳	3	1454	正月, 全山火災に見舞われ, すべての堂舎が焼失する
	4	1455	青蓮院尊応法親王により, 勸進状が作られ復興始まる
天文	9	1540	この頃, 竹生島復興一応完了す
永禄	元	1558	秋, 全堂舎焼失
元亀	元	1570	7 月, 木下藤吉郎秀吉, 竹生島に安堵状を与える 朝倉義景, 竹生島に参詣, 翌年名刀菊一文字を奉納
天正	2	1574	9 月, 秀吉, 早崎郷のうち三百石を竹生島へ寺領として寄進する
	3	1575	9 月, 竹生島領を押領せんとした阿閉貞征を信長に訴えんとし, 阿閉方知行之内寺領目録を作成する
	4	1576	秀吉, 長浜城築城の祝福と戦勝祈願の為, 竹生島に寄進する
	5	1577	秀吉, 中国征伐出陣に際し, 戦勝祈願の為, 寄進する
	6	1578	武運長久を祈願し, 秀吉夫人・浅野氏等, 寄進する
	9	1581	4 月, 織田信長, 近侍数名を伴い参詣する
	10	1582	8 月, 柴田勝豊, 竹生島に安堵状を下す
	13	1585	秀吉, 渡島し参詣する
	16	1588	正月, 北政所等, 竹生島に寄進する
	19	1591	この年の検地において, 寺領三百石を再度確認し保証さる 4 月, 秀吉に寺領安堵の判物, 蓮華会の下知, 水祇の地の事を申し出る
慶長	8	1603	9 月, 豊臣秀頼, 片桐且元を奉行とし, 観音堂・唐門を他より移築する
	18	1613	4 月, 徳川原康, 竹生島に三百石の朱印を正式に与える
元和	3	1617	7 月, 二代将軍秀忠, 朱印状を竹生島に与える
寛永	13	1636	11 月, 三代将軍家光, 朱印状を竹生島に与える
元禄	10	1697	4 月 8 日より 6 月 30 日まで, 竹生島観音開帳を行なう
宝永	2	1705	江戸深川永代寺において, 竹生島出開帳を行なう
	7	1710	京都円山において, 竹生島弁才天の出開帳を行なう
元文	5	1740	江戸本所回向院において, 2 月 20 日より 4 月 20 日まで出開帳を行う
寛政	元	1789	江戸目白長谷寺において出開帳を行う
文化	6	1809	大阪北野太融寺において出開帳を行う
	15	1818	京都真如堂における開帳で, 46 点の宝物を展観する

明治	元	1868	3月, 政府の神仏分離令が布達される
	2	1869	大津県庁より, 竹生島役者が召喚され, 島内の縁起・古記録などの資料提出を命じられる
	4	1871	2月, 大津県庁より, 竹生島弁才天社を都久夫須麻神社と改称するよう命じられる
	6	1873	蓮華会の帰属が争われ, 神祭と仏事に二分される
	7	1874	寺地と社寺の境界が決定する
	16	1883	5月, 神社と寺院の備品を区別し, 引受品明細を郡役所を提出する
	34	1901	観音堂・唐門・渡廊が国宝に指定される
昭和	11	1936	観音堂・唐門の改築が成る
	12	1937	6月, 弁財天堂の造営に着手する
	17	1942	新弁才天堂完成する
	28	1953	宝厳寺唐門が新国宝に, 観音堂・渡廊は重要文化財の指定を受ける
	41	1966	先代住職, 馬場海寿老師寂. 峰寛海普山
	52	1977	6月, 宝物館竣工



図4-1 湖上からの竹生島の景観¹⁾



図4-2 国宝 唐門の正面²⁾



図4-3 国宝 弁財天像³⁾

尚,本節を記すにあたり参考にした文献は,以下のとおりである.

「古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺⁴⁾」

「宝厳寺と湖北の名利⁵⁾」

「神を齋く島のメモリー 竹生島⁶⁾」

4 - 3 生態・獣害

竹生島は、常緑広葉樹林と多種の竹林に覆われた美しい島として有名であった。湖で陸地と隔てられているという土地条件に起因してか、生態系は特殊である。

竹生島には猫などの動物は生息せず、生息が確認されているのは、鷺、カワウなどの野鳥、ネズミ、蛇、ゴキブリ等である⁷⁾。中でも野鳥の増殖による森林の枯死が問題になっており、行政等による調査も行われている。以下に調査内容を示す。

4 - 3 - 1 日本野鳥の会

1939年6月に堀田光鴻氏が、マガモの巣の発見の報告を受け、竹生島へ調査へ赴いている。調査時では、一番多いのが五位鷺、次いで青鷺、そしてカワウという順が続いている⁸⁾。この当時より樹木の枯死が問題となっており、狩猟家を動員しての野鳥の駆除が行われていた。

4 - 3 - 2 滋賀県湖北地域振興局森林整備課

滋賀県湖北地域振興局森林整備課主幹の井上清氏の報告によると、戦後、竹生島にはじめてカワウの営巣が確認されたのは1983年であった⁹⁾。最初はわずかな数であったが、急激に増加し、1993年頃には被害が拡大し、森林被害は全島の75%まで及んでいる。そこで平成1999年から保安林改良事業を実施し、改植等の森林再生への取り組みが行われている。

4 - 3 - 3 滋賀県生活環境部自然保護課

カワウの営巣状況と植生との関連、および時間的変化を明らかにするため、1996年の5月と8月に、営巣地域と営巣数および植生の調査を行っている。調査の結果、以下図4-4に示すように、カワウの営巣地域は島北部の東西両斜面から南部の西斜面へと広がっており、現在最も営巣密度が高いのは、南部の西斜面であった。島全体での推定営巣数は1439巣と推定されている¹⁰⁾。

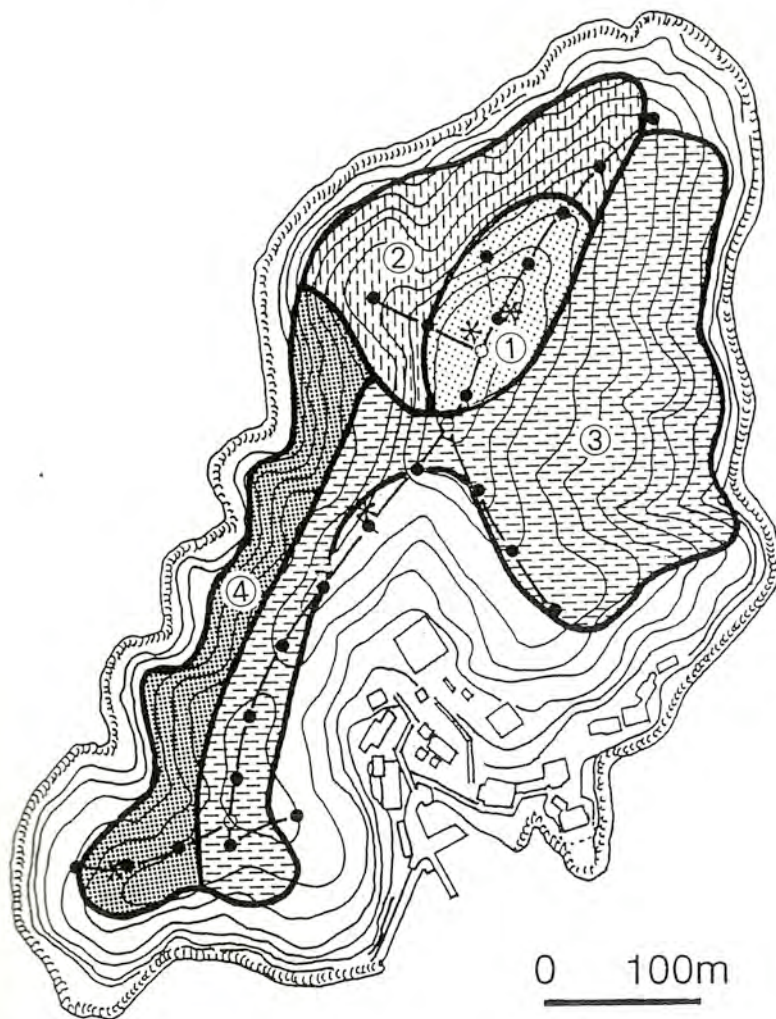


図 3-15 営巣状況によるカワウの営巣地域の区分.

- ①1992年にはコロニーがあり、今回カワウの営巣が確認されなかった地域.
 - ②1992年にはコロニーがあり、今回もカワウの営巣が確認された地域.
 - ③1992年にはコロニーがなく、今回カワウの営巣が確認された地域.
 - ④1992年にはコロニーがほとんどなく、今回カワウの営巣が特に多く確認された地域.
- 黒丸と細い実線は带状区、アスタリスクは方形区の場所を示す.

図 4-4 営巣状況によるカワウの営巣地域の区分 ¹¹⁾

調査によると、営巣木としてよく利用されるタブノキをはじめとした大径木の樹勢を、営巣期開か異なる地域間で比較すると、営巣期間が長い地域ほど枯れた木が多かった。営巣地の植生は、

- ① 高木層の樹冠がほぼ 100%閉鎖している、
- ② 高木層の樹冠が閉鎖しておらず、草木層の被覆度は低いあるいは島本来の林床に生育している植物により高い、

③ 高木層の樹冠が閉鎖しておらず、草木層の被覆度はカワウの営巣後侵入したと思われるヨウシュヤマゴボウやイタドリにより高い、

の3タイプに大別された。

1992年の調査結果との比較で、①の植生が②の植生へ、②の植生が③の植生へ移行することが明らかになった。つまり①→②→③と植生が変化するにつれ、高木層の樹冠が透けてきて枯れ枝が目立つようになり、林床の植生もカワウの糞の影響で枯れ始める。

岩穴、常緑樹・落葉樹・スギ・ヒノキ・竹のどのカテゴリにおいても、①、②、③の順に枯れた木が多くなっていった。さらに、カワウの営巣数は、②の植生の地域が①や③の、植生の地域よりも多い傾向があった。

③の植生になると、枯れて折れる枝の増加による営巣場所の減少により、カワウの数は少なくなり、営巣がまったくみられない場所もでてくる。③の植生の地域の中でもカワウが営巣をやめた場所では、樹木の枯れ枝の減少や樹木実生の種類や個体数の増加など、植生回復の兆しが見られた。とくに、樹木の実生には、先駆性のニワトコ、アカメガシワ、タラノキばかりでなく、ヤブツバキ、シロダモ、そしてわずかながらもタブノキが確認された。ただし、植生の回復の速度は、カワウの活動の言皆で植生が退行していく速度よりかなり遅いと推察された。

調査の結びとして今後、島の植生や景観を保全していくためには、(1) カワウの営巣とどこに折り合いをつけるかという目標の明確化、(2) 目標に向けての段階的な対応、(2) カワウの営巣状況および植生の継続調査、(4) 植生の早期回復へのテコ入れ、が必要だと述べている。

4 - 3 - 4 獣害についての考察

カワウの営巣が今後進行していけば、カワウの営巣地域の植生は4 - 3 - 3で述べた植生③の状態、つまり高木層の木々や林床はカワウの糞で枯れていく状態になるだろう。折れる木々の枝によって営巣が困難になり、カワウが他の地域へ移り、またその地域の植生を破壊していき、最終的に竹生島全体の森林を破壊しかねない状況を招くだろう。早急にカワウを竹生島から追い出すことが求められるが、完全に追い出す方法が確立されていない現在では、難しいといえる。竹生島の景観、植生を維持する上で、カワウによる森林の枯死を阻止することは、急務である。

4 - 4 西国三十三箇所巡礼と竹生島

西国三十三箇所巡礼は、弘法大師ゆかりの寺院を巡る四国遍路と並んで日本を代表する巡礼である。観世音菩薩が衆生を救うため三十三の姿に変えて現れるという「法華経（妙法蓮華経）」のなかにある観世音菩薩普門品（ふもんぼん）の教えに従い、その功德を受けるため近畿地方に点在する三十三箇所観音霊場を円環的に訪ね歩いて本尊巡拝をする信仰の旅である¹²⁾。

観音の功德を賞賛した、いわゆる「観音教」とよばれる「観世音菩薩普門品」は、現在でも「般若心経」とともに日本人に親しまれ、心の拠り所となっている。観音は救いを求めるものにあまねく手を差し伸べ、求めに応じた姿に変化して現れるといわれ、聖観音、千手観音、十一面観音、馬頭観音などがよく知られている。観音の紀元は紀元前後にあるとされているが、日本人に観音信仰が芽生えたのは7世紀の初頭から8世紀にかけてであるといわれている。最初は阿弥陀如来像

の左右の脇に立つ像であったが後に観音の教えが普及すると独立した菩薩として観音が信仰されるようになった¹³⁾。

4 - 4 - 1 西国三十三箇所巡礼の成立

「中山寺由来記」など西国巡礼の始まりを説いた縁起によれば、大和長谷寺の徳道上人（656-）が冥府で閻魔大王に会い、三十三箇所霊場の功德を世に広めよとの命を受け、そのしるしを摂津の中山寺に納めた事が最初と言われ、後にこれを花山天皇がこれを復活し、仏眼上人と共に西国三十三箇所巡礼を始めたと言われている¹⁴⁾。1726年刊行の「観音霊場記」にあるように、広く一般に知られているのは、徳道上人が養老年中（717-723）に若くして命を失って閻魔大王に会いに行ったところ、「お前はまだ死期に達しておらず若い、もう一度元の世界に戻って三十三所の霊験あらたかな観音堂を世に広めるようにと、三十三所宝印を授けられた。この仰せをありがたく賜った徳道上人は三日後に蘇生し、摂津国中山寺の石櫃に宝印を納めた」という話である。

第45代聖武天皇の727年に徳道上人が十一面観音を安置し、堂宇を建立し、現在の長谷寺の基盤が確立したと言われている¹⁵⁾。

徳道上人は656年頃生まれ、718年に西国三十三箇所観音霊場を巡拝している。そのあと長谷寺に十一面観音を安置した。

徳道上人が確立したといわれる西国三十三箇所観音霊場巡拝を復活させ、世に広めたのが花山法皇であるといわれる。平安初期、984年に第65代天皇に17歳で即位した花山天皇は翌年に右大臣藤原兼家の謀略により京都山科の元慶寺に出家を勧められた。出家した花山天皇は長谷寺で出会った仏眼上人の勧めによって988年の初め、徳道上人が中山寺の寺内に埋めた観音霊場の宝印を掘り出した後、書写山円教寺に赴き、播磨の聖と言われる性空上人を佛友として那智山をはじめとして紀伊、和泉、河内、大和、山城、丹波、摂津、播磨、丹後、近江の国々を回って、同年の秋、美濃の国の谷汲において三十三箇所の観音霊場巡礼を終えたとされている。この道中で詠んだ歌が御詠歌の始まりである。

4 - 4 - 2 西国三十三箇所巡礼の発展

奈良時代の草創期から平安時代にかけての竹生島宝厳寺は、観世音菩薩が祀られ、やがてその霊験所としての信仰がかたまっていた。平安時代には、その霊験の数々が喧伝され、貴賤大衆の信仰をあつめた。

11-12世紀の院政期には観音信仰が多いに広まり、貴族の間に観音霊場巡拝が始まった。また院勢力の熊野詣でが盛んになった事もあり、三十三箇所観音巡礼が貴族や武士、聖などに広まった。中世の竹生島は弁財天降臨の霊島として信仰を集めた。同時に西国三十三箇所巡礼の風習が庶民層にまで浸透し、貴賤大衆の参詣も隆盛期を迎えた¹⁶⁾。

平安時代末期になると、園城寺(三井寺)の山伏・修験者たちによって近畿各地の霊場が統合され、紀州那智山の観音を筆頭に、西国三十三箇所の観音霊場を巡礼する風習が成立した。竹生島観音は第十七番の霊験所として丹後松尾寺の次に数えられた¹⁷⁾。その後、歳月の経過とともに、三十三箇所の霊場には若干の入れ替わりや、巡拝順序に変更があった。やがて室町時代を迎えて、庶民の間に西国三十三箇所巡礼の風習はきわめて盛んとなり、現在の巡拝順序が確立した。

西国三十三箇所寺院の宗派は清水寺、興福寺南円堂の法相宗以外は天台宗、真言宗の密教系の寺院である。また、開基の時期をみると、縁起・伝説による古代のものが多く、新しい寺院でも平安時代には創建されている。

鎌倉期には行者や山伏、遊業聖、僧侶、三十三度行者が中心であり、一般庶民は室町時代になって西国巡礼を行った物だと考えられる。

1455年に成立した五山禅僧、恵鳳の漢詩集「竹居清事」には三十三所巡礼という言葉が文献としてはじめて登場し、三井寺の覚忠が平安末期に三十三所巡礼をしたことや、東国からの巡礼者が多く見られるようになり、巡礼団が伊勢から熊野に向かった事等が書かれている。この頃から武士や宗教者に限定されていた西国巡礼も一般庶民にも広がりを見せ、室町時代には西国巡礼が民衆化して多いに発展した¹⁸⁾。

室町時代には観音巡礼とともに、弁財天に対する現世利益の信仰を求めて、民衆の竹生島参詣が一段と盛んになった¹⁹⁾。

4 - 4 - 3 西国三十三箇所巡礼の隆盛

江戸時代の西国巡礼はいずれも伊勢神宮の参拝から始まっている²⁰⁾。1718年には、伊勢神宮参宮が50万人を超えるなど、参詣は元禄時代以降急速に発展し²¹⁾、享保、宝暦、寛政年間には最盛期を迎えた。

江戸時代になると、先達であった勧進聖が幕府の取り締まりにより急速に衰えた。貨幣経済の発達や街道の整備とともに一般庶民の旅が盛んになった。また、伊勢神宮参拝や熊野詣と合わせて西国巡礼が行われるようになり、関東、東北の巡礼が多くなった。東国の民衆にとって、熊野詣と西国巡礼は一体的なものとして捉えられ、行われていた²²⁾。熊街道の伊勢路は熊野三山と第一番札所那智山青岸渡寺へ通じる道としての役割を担った。巡礼者は、那智から紀三井寺等を回った後、余力があれば高野山や金毘羅へ詣で、最後の札所の谷汲山では満願を果たしたしるしに白衣などを納め、東国への帰りには善光寺に参詣し、極楽往生を祈願した。この時期には「にせ巡礼」と呼ばれる、巡礼にまぎれて偽り事を言って金銭をだまし取る悪行が横行している²³⁾。

嘉永頃になると、巡礼者の増加とともに道中を案内するガイドブックである「西国三十三箇所名所図絵」や、「紀伊国名所図絵」などの巡礼案内記や巡礼絵図、巡礼縁起、御詠歌、札所本尊の御影、札所境内図などが多く出版されるようになる。また、読み書きの教養のある一般民衆は道中日記を綴るようになった²⁴⁾。

4 - 4 - 4 現在に至るまでの西国三十三箇所巡礼

江戸以降では、西国三十三箇所巡礼者数の記録が残っている場合がある。竹生島宝厳寺では、1773年の巡礼者数1万人余りを最高とし、以来7,8年間は年3000人から9000人の間で推移している²⁵⁾。さらに、那智神社蔵の「熊野年代記」には、西国巡礼の実数推定の手がかりとなる数値が挙げられている²⁶⁾。

享和元年（一八〇一）	三〇、〇〇〇人
二年（一八〇二）	三六、〇〇〇人
三年（一八〇三）	二八、〇〇〇人
文化元年（一八〇四）	二三、〇〇〇人

図4-5 熊野年代記による西国巡礼者数の推移①²⁷⁾

五年（一八二二）	一三、三五二人	二年（一八〇五）	二〇、四七八人
六年（一八二三）	一四、〇三〇人	三年（一八〇六）	二〇、〇〇六人
七年（一八二四）	一二、九五〇人	四年（一八〇七）	一八、七二七人
八年（一八二五）	一一、七四六人	五年（一八〇八）	一一、四七〇人
九年（一八二六）	（順礼数欠）	六年（一八〇九）	一四、七六三人
十年（一八二七）	二万五、六千人（閏六月迄）	七年（一八一〇）	一五、八〇〇人
		八年（一八一）	一四、〇七五人
		九年（一八二二）	一五、〇二五人
		十年（一八二三）	一四、六八九人
		十一年（一八二四）	一六、五五〇人
		十二年（一八二五）	一三、五三〇人
		十三年（一八二六）	一四、三四九人
		十四年（一八二七）	一五、一七八人
		文政元年（一八二八）	一五、二二五人
		二年（一八二九）	一八、六三三人
		三年（一八三〇）	一四、六九九人
		四年（一八三一）	一三、二三五人

図4-6 熊野年代記による西国巡礼者数の推移②

史料によれば、毎年の巡礼者数は、1万～2万5千人を数えており、隆盛ぶりがうかがえる。西国巡礼者数は、江戸後期頃、「熊野年代記」で1万～2万、竹生島で1万+ α 、と予想されている²⁸⁾。

明治以降になっても、竹生島では、渡船業が成り立つほど参詣者は多かったようである²⁹⁾。

近年の巡礼者は、2007-09-14、滋賀県長浜市(旧びわ町役場)でおこなったヒアリングより推察すると、4万人程度だと思われる。竹生島への入島者数は平成18年度の一年間で12万7866人であり、役場の予想ではそのうち巡礼者数は1/3程度であろうとのことであった³⁰⁾。現在に至るまでも、巡礼の流れは脈々と続いている。

【参考文献および脚注】

- 1) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,巻頭写真(1980)
- 2) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,巻頭写真(1980)
- 3) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,巻頭写真(1980)
- 4) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,68-110,134-136(1980)
- 5) 大山邦興;宝厳寺と湖北の名利,小学館,2-35(2002)
- 6) (株)日本出版出版事業部;神を齋く島のメモリー 竹生島,滋賀県びわ町観光協会,2-75(1986)
- 7) 中辻藤男, 2007-09-14, 生嶋巖雄, 2007-10-16, 峯覚雄, 2007-11-01, ヒアリング
- 8) 堀田光鴻;竹生島の鳥, 野鳥, 日本野鳥の會, 715 (1939)
- 9) 井上清;現場から 竹生島の森林再生カワウ被害地における保安林改良事業, 治山, 日本治山治水協会治山研究会, 48 (3) . 48 (2003)
- 10) カワウ研究会;カワウによる竹生島植生影響調査報告書, 滋賀県生活環境部自然保護課, 16 (1997)
- 11) カワウ研究会;カワウによる竹生島植生影響調査報告書, 滋賀県生活環境部自然保護課, 36 (1997)
- 12) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),30(2005)
- 13) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),31(2005)
- 14) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),31(2005)
- 15) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),31(2005)
- 16) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,92(1980)
- 17) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,83(1980)
- 18) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),33(2005)
- 19) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,95(1980)
- 20) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),34(2005)
- 21) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,155(1977)
- 22) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,162(1977)
- 23) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,158(1977)
- 24) 三石学;西国三十三所巡礼,国文学解釈と鑑賞,70(5),35(2005)
- 25) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,164(1977)
- 26) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,165(1977)
- 27) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,165(1977)
- 28) 新城常三;近世の西国巡礼,民俗学研究紀要,1,168(1977)
- 29) 陳舜臣,峰覚海;古寺巡礼 近江 3 竹生島宝厳寺,淡海社,103(1980)
- 30) 中辻藤男, 2007-09-14, ヒアリング

5 - 1 緒言

本章では,基礎調査として文献には記されていない生の声を聞くためにおこなったヒアリングの結果と考察を記す.実際に竹生島と生活を密にしている方々へヒアリングを実施することで,竹生島の歴史と現状,課題を明らかにする.

5 - 2 2007.09.14 中辻藤男氏(奉賛会事務局)

奉賛会とは,竹生島全体の振興を図る団体である.奉賛会自体は宗教団体ではなく,宝厳寺と都久夫須麻神社のパイプ役という役柄になっている.ヒアリングにおいて明らかになった箇所を以下に列挙する.

竹生島について

- ・ 竹生島の土地は宝厳寺と都久夫須麻神社が各々所有している.島には県道が通る.
- ・ 電気が無いので,文化財の保存が弱い.
- ・ 島は夜間,無人と言われてきたが,実際は宿直のような形で人が交代で宿泊している.
- ・ 寺と神社,双方に関わるような問題(防災など)については,奉賛会が担当する.
- ・ 平成18年度の入島者数は127,866人.以前は150,000人程度あったが,近年は減少傾向である.巡礼者の割合は1/3程度とのこと.
- ・ 一般観光客の中には,島のバリアフリー化を希望する声も上がってきている.

竹生島が抱える問題等

- ・ 電気が無いので,防災,防犯,維持管理において力不足である.
- ・ 旧びわ町には,地元としての竹生島に特別な愛着は無い.
- ・ 観光客は増えて欲しいが,孤島という地理的な性格上,事業を起こすと経費が嵩む.
- ・ カワウのよる森林の枯死が大問題である.景観の維持が困難になっている.
- ・ 竹生島に生息する生物は,体長が桁違いに大きい.

5 - 3 2007.10.16 生嶋厳雄氏(都久夫須麻神社宮司)

生嶋氏は明治期の神仏分離以降,4代目の神主である.

都久夫須麻神社について

- ・ 建造物は全て人力で建てている.
- ・ 氏子はゼロ.
- ・ 幼少期の多く竹生島で過ごす.当時は15,6名が竹生島で生活していたようだ.
- ・ 世間の環境はどんどん良くなっていったが,島の環境は変わらず.
- ・ 戦後,観光客が裕福になっていったあたりから観光客が増加.入島者数の急激な増減は無い.近年は下降傾向.

- ・土産物店の人は長浜の在住.
- ・昔は琵琶湖の水をそのまま飲料水として利用していた.電気洗濯機の普及以降,水質が悪化し,飲めなくなってしまった.
- ・登録している信者は7,000人程度.滋賀県内は2割程度で,東京が一番多い.
- ・現在,信者は女性が多い.女性の方が感性が豊かだから,ということらしい.
- ・平安時代頃から竹生島は女人禁制であった.
- ・土器投げは,神仏混合時代からあったらしい.
- ・現在,修験者はいない.
- ・竹生島の音は発電機を止めてしまえば昔と変わっていないと思うが,昔は木立の音がもっとあった.鳥の声が増加してきている.
- ・島の場所を借りて,イベントを行う場合もある.
- ・竹生島の名産品は無い.

竹生島が抱える問題等

- ・カワウが森林を枯らしている.
- ・枯死の影響で山肌が露出し,維持管理が困難になっている.
- ・電気が無いので,通常の生活ができない.竹生島は非日常であるが,どこかで日常的なものを残しておかないといけない.
- ・安定供給できる電力が欲しいが,太陽電池パネルや風力発電は,景観の問題上難しい.
- ・竹生島の文化,文化財を残すため,島は自然回帰の方向が良い.必要以上の観光化は望まない.
- ・最低限,防災ができるだけの電力は欲しい.
- ・修行の場ということもあり,必要以上のバリアフリー化は望まない.

5 - 4 2007.11.01 峯寛雄氏(宝厳寺住職)

宝厳寺は神仏分離までは妻帯せず,弟子へ弟子へと受け継がれて来た.峯氏は初の先代からの直系の住職であり,幼少期から竹生島で過ごす.

宝厳寺について

- ・1000年以上続く信仰の流れがある.
- ・防災のために宿直を置き,夜間は無人ではない.
- ・明治までは女人禁制.
- ・昔は現在よりももっと森林が鬱蒼としていた.山は煙り,雨の匂いが印象的であった.
- ・寺の信徒は寺が把握している数で約1000名.
- ・旧浅井町の人たちにとって竹生島は特別な場所.
- ・イベント等での場所の借用は可能.

竹生島が抱える問題等

- ・ 竹生島活性の切り口が観光化というのに懸念,宗教上の聖地という体裁を残したい.
- ・ カワウや枯死の問題の根底にあるのは,昔からの竹生島の環境の問題.木々が茂っていて,木の匂いがする,といった竹生島の個性が失われていく
- ・ 電気が必要なのは,利便性以上に,文化財や文化の維持に必要なからという理由が大きい.
- ・ 夜間にモータボート等で無断侵入する等のいたずらに困っている.
- ・ 森林の枯死により土が流れて,山が危険な状態にある.
- ・ 船の滞在時間が1時間半では短い.
- ・ 船内ではもっと島の深いところを紹介して欲しい.

5 - 5 ヒアリングのまとめ

前節のヒアリング結果を通して明らかになった点を下記に列挙する.

島の維持管理について

- ・ 夜間は発電機が止めるので,電力の供給が中断する.昼間も必要最低限の電力しか供給できないため,島の維持管理,防犯・防災対策が十分にできない.
- ・ 文化財,文化を継承していくためにも,安定した電力の供給を望んでいる.
- ・ 発電機の音は,竹生島の音環境にとって望ましいものではない.
- ・ カワウによる森林の枯死に苦しんでいる.それによって脈々と受け継がれて来た景観,文化が失われる危険がある.
- ・ 島が無人島だという情報を聞きつけて,夜間に無断侵入するいたずら等に困っている.対策として,宿直という形で毎日泊まりこみ,防災に勤めている.

巡礼者,観光客について

- ・ 巡礼者は150,000人程度から近年は減少傾向である.巡礼者の割合は1／3程.
- ・ 旧浅井町の人たちと竹生島は密接な関係にあったが,旧びわ町にはそのような関係は無く,また地元として特別な愛着も無い.
- ・ 修験者は現在,ほぼいない.

島の活性について

- ・ 島の名産品は無い.
- ・ 入島者は増えて欲しいが,神聖な修行の地という特性上,大幅な観光化,必要以上のバリアフリー化は望ましくない.
- ・ 島の伝統・文化を生かした活性を希望する.方向性は自然回帰が良いのではないかな.
- ・ 島の音環境は,大きく変化していないはずである.

以上のようなことが明らかになった.世間から隔絶され,1000年以上前から脈々と受け継がれてきた竹生島の文化・景観が現在,カワウの獣害によって失われつつある.また,文化財の維

持管理,防犯・防災のために電力が必要とされている.

巡礼者・観光客は近年,減少傾向であるが,大きな観光化は望まず,伝統と文化,景観を生かした計画が望まれる.尚,イベント等での島の借用は可能なようだが,電力や防災の問題もあり,大規模な計画は現在,困難なようである.

竹生島は神聖な修行の場として独自の景観・文化を育んできており,島のサウンドスケープは長い時間,大きく変化していないと予想される.次章では,具体的にどのようなサウンドスケープが評価されてきたのかを,巡礼記をテキストに分析していく.

6 - 1 緒言

本章では、竹生島のサウンドスケープを巡礼者がどのように評価してきたかを明らかにするため、「巡礼記」をテキストとして「巡礼記」の中に取り上げられている音の種類と季節、場所を分析および考察し、竹生島で評価されてきたサウンドスケープの変遷を明らかにする。

6 - 2 分析対象としての「巡礼記」について

「巡礼記」は巡礼者が各地を巡礼する際、その道中を記したものである。日記風に書かれたものや、幅広く巡礼を広めるためのガイド調に書かれたもの等、様々なものが存在する。

本研究では竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにするために「巡礼記」をテキストとする。理由は巡礼記には巡礼の際、当地を訪れた時に感じた自然環境に対する感覚が記されているものと考えからである。巡礼記は現在に至るまで様々に編集、出版されているため、過去のサウンドスケープや先人の感じたサウンドスケープを知る良い手段であるといえる。

全国の図書館蔵書から収集を希望した「巡礼記」を以下に示す。

表 6-1 収集希望文献一覧

タイトル	著者	出版年
西國順禮記	竹屋喜兵衛, 中村藤兵衛	1714
西國巡禮歌要解	愍譽	1779
西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1786
西國順禮道中圖	大坂屋長三郎	1794
西國三十三所巡禮道	小西屋与惣次	1795
西國順禮獨案内圖	菊屋喜兵衛	1804
西国巡礼道中記	益子廣三郎	1812
西國順禮細見大全	菊屋喜兵衛	1825
西國三十三所順禮道	ゑづ屋庄八	1831
西國三十三所名所圖會	暁鐘成誌, 松川半山, 浦川公左画	1853
西国順礼旅便利	筒井庄八	1879
西国三十三所靈場靈驗略記	松本喜三郎編, 久保田桃水画	1879
阿波十郎兵衛譚: 西国巡礼女仇討	広岡幸助	1885
西国三十三ヶ所観音靈場記	不明	1886
勸音靈場西國三十三所御詠歌	藤井佐兵衛	1913
竹生島遊覧	不明	1917
竹生島	實生九郎著, 實生重英改訂	1921
竹生島略誌	馬場海嘉	1925

西国三十三所巡禮に関する目録	田中緑紅	1931
西国三十三所巡拝通誌	梅原忠治郎	1937
西国霊場伝説物語	小滝淳	1941
西国巡禮案内記:新釋御詠歌物語附	清水谷善照	1953
新釈西国巡礼歌	松原泰道	1960
巡礼の旅:西国三十三カ所	白洲正子	1965
西国巡拝記	杉本苑子	1966
西国三十三ヶ所	平幡良雄	1967
巡礼の寺:西国三十三カ所観音霊場	三浦美佐子, 小川光三	1967
関西巡礼の旅	首藤一	1968
西国三十三ヶ所霊場巡り記	森藤之	1969
西国巡礼:三十三所観音めぐり	佐和隆研	1970
ドライブ西国三十三カ所	札所研究会	1971
カラー巡礼の旅:西国三十三カ所	佐和隆研	1973
西国巡礼紀行	中西芳朗	1974
竹生島誌	澤実英	1975
西国巡礼	沢野久雄	1975
西国三十三所巡礼	渡辺守順	1976
竹生島	中井一郎	1977
関西巡礼の旅:西国三十三観音	首藤一	1978
巡礼の旅:新西国霊場	京都新聞社	1979
西国・新西国札所めぐり	首藤一	1979
竹生島宝厳寺	陳舜臣, 峰覚海	1980
札所めぐりあいの旅	竹村節子	1982
新西国巡礼の寺	橋本哲二	1982
句集 竹生島	山田佳郷	1984
同行二人	松原泰造	1985
新西国霊場-古寺めぐりへの招待	下休場由晴	1986
観音のころ:西国巡礼の旅	松原哲明	1986
神を齋く島のメモリー竹生島	㈱日本出版出版事業部	1986
西国順礼道中記	大子町史編さん委員会	1986
西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内	西国札所会	1987
私の古寺巡礼	井上靖	1987
西国 33 カ所・新西国巡礼	高山瑛	1987
西国三十三所観音巡礼:法話と札所案内	西国札所会	1987
西国三十三カ所巡礼	井上隆雄, 田中智彦	1988
西国巡礼:三十三所観音めぐり	西国札所会編:佐和隆研著	1988

西国 33 カ所巡拝	小林茂	1990
西国・新西国観音霊場巡拝紀行	漆原秀男	1991
西国三十三所巡礼道	兵庫県教育委員会	1991
西国巡礼の寺	三浦美佐子, 小川光三	1992
西国 33 ヶ所 巡拝	小林茂	1993
女性の西国巡礼三十三度行者: 尼サンドについて	玉城幸男	1993
西国 33 カ所霊場めぐり	小林茂	1993
西国四十九薬師西国三十三観音巡礼記	三橋友次	1993
西国道中記: 三谷家文書		1993
西国観音巡礼: 千余年の信仰にささえられた	平幡良雄	1994
西国三十三カ所めぐり: 歴史と四季が彩る観音の里	藤井金治	1994
御詠歌の旅	和田嘉寿男	1995
西国巡礼と俳句	淵脇逸朗	1995
御詠歌の旅 : 西国三十三札所をめぐる	和田嘉寿男	1995
西国巡礼の寺	五来重	1995
西国遍路と俳句 : 休日を楽しむ霊場の案内	淵脇逸郎	1995
やすらぎ	橋本周三	1996
西国 33 カ所 札所めぐり	橋本哲二	1997
西国三十三カ所	山と溪谷社大阪支局	1997
西国三十三ヶ所巡り-心の鐘を打ち鳴らし今, 巡礼の旅へ		1997
西国巡礼	白州正子	1997
句集 竹生島	山田佳郷	2001
古寺巡礼ひとりある記	能村進	2001
近江西国三十三所観音巡礼	富永航平著: 近江西国観音霊場会編	2001
古寺巡礼ひとりある記 : 西国三十三ヶ所観音霊場	能村進	2001
竹生島: 句集	山田佳郷	2001
謡曲・狂言集	古川久, 小林責校注	2001
西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	2003
よくわかる西国三十三所徒歩巡礼ガイドブック	佐藤孝子	2003
西国三十三か所ガイジン巡礼珍道中	クレイグ・マクラ克蘭	2003
西国観音霊場・新紀行	松本章男	2004
西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	2004
歌僧天田愚庵『巡礼日記』を読む: 父母の面影を求めて西国霊場巡り	松尾心空	2004
享和元年西国巡礼旅日記	舞阪町立郷土資料館	2004
巡礼の文化史	ノルベルト・オーラー	2004

西国三十三ヶ所めぐり	昭文社	2005
西国三十三ヶ所を歩く	歩く旅シリーズ古寺巡礼	2006
西国札所古道巡礼:「母なる道」を歩む	松尾心空	2006

上記収集希望文献から,借用または閲覧が可能なものを実際に収集し,さらにその中より,竹生島の項に音に関する記述がある文献を分析対象とした.このようにして文献から抽出・分類をおこなった結果,分析対象は以下の表の文献になった.

表6-2 分析対象文献一覧

タイトル	著者	出版年
西国巡礼道中記	益子廣三郎	1812
西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1860
竹生島遊覧	不明	1917
竹生島略誌	馬場海嘉	1925
巡礼の旅	白州正子	1965
西国巡拝記	杉本苑子	1966
西国三十三ヶ所	平幡良雄	1967
巡礼の寺	三浦美佐子 小川光三	1967
関西巡礼の旅	首藤一	1968
カラー巡礼の旅	佐和隆研	1973
西国巡礼紀行	中西芳郎	1974
竹生島誌	澤実英	1975
西国巡礼	澤野久雄	1975
竹生島誌	澤実英	1975
西国三十三所巡礼	渡辺守順	1976
竹生島	中井一郎	1977
札所めぐりあいの旅	竹村節子	1982
句集 竹生島	山田佳郷	1984
同行二人	松原泰造	1985
神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986
西国巡礼の旅 観音のこころ	松原哲明	1986
神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986
西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内	西国札所会	1987
西国巡礼三十三所観音めぐり	佐和隆研	1988
西国・新西国観音霊場巡拝紀行	漆原秀男	1991
西国33ヶ所 巡拝	小林茂	1993

西国三十三ヶ所めぐり	藤井金治	1994
御詠歌の旅	和田嘉寿男	1995
西国巡礼と俳句	渕脇逸朗	1995
やすらぎ	橋本周三	1996
西国三十三ヶ所巡り	不明	1997
西国巡礼	白州正子	1997
句集 竹生島	山田佳郷	2001
古寺巡礼ひとりある記	能村進	2001
西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003
西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	2003
西国観音霊場・新紀行	松本章男	2004
西国観音霊場・新紀行	松本章男	2004
西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	2004
西国三十三ヶ所を歩く	歩く旅シリーズ古寺巡礼	2006

6 - 3 文献からの音の記述の抽出

前節で示した分析対象文献から、音に関する記述のある箇所を抽出する。抽出したテキストデータは文章毎にまとめた。次に抽出した語句を「音の種類」、「季節」、「場所」の各カテゴリに分類する。抽出したテキストデータを時代毎に分類したものを以下に示す。

表 6 - 3 時代毎の抽出語句数

	西暦	語句数
江戸まで	-1868	21
明治	1868-1912	0
大正	1912-1926	35
昭和 1	1926-1980	46
昭和 2	1980-1989	45
平成	1989-2006	47

文献からの抽出語句の割合を、時代毎にグラフに表したものが以下である。分析対象文献として明治期の文献が欠如しているが、これは下記に示す、今回対象文献として選んだ明治期の文献が、蔵書先の都合(貴重文献につき一般の複写・閲覧不可)等により入手ができず、分析対象として加えることができなかったためである。

表 6 - 4 明治期の収集希望文献

タイトル	著者	出版年
西国順礼旅便利	筒井庄八	1879
西国三十三所霊場霊験略記	松本喜三郎編, 久保田桃水画	1879
阿波十郎兵衛譚: 西国巡礼女仇討	広岡幸助	1885
西国三十三ヶ所観音霊場記	不明	1886

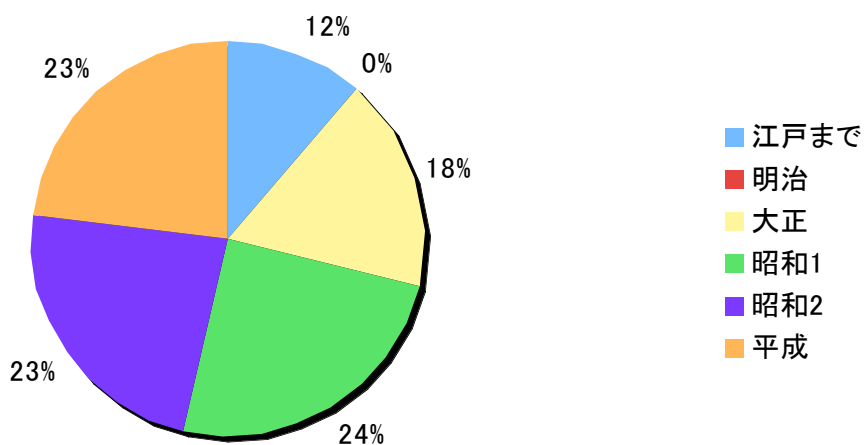


図 6-1 時代毎の抽出語句数の割合(分割後)

さらに文献毎の抽出語句数を以下に示す。主に竹生島扱った文献には音に関する記述が多く、巡礼記の一項としての竹生島という扱いの文献からは、概ね 1-5 個の記述がみられる結果となった。

表 6-5 文献毎の抽出語句数

時代区分	タイトル	著者	抽出語句数
江戸まで	謡曲竹生島(神を斎く島のメモリー竹生島より引用)	不明	1
	西北紀行(神を斎く島のメモリー竹生島より引用)	貝原益軒	5
	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	4
	西国巡礼道中記	益子廣三郎	3
	竹生島誌	澤実英	2
	西国観音霊場・新紀行	松本章男	2
	平家物語竹生島詣(神を斎く島のメモリー竹生島より引用)	不明	3
	神を斎く島のメモリー竹生島	名寄・隆祐	1
小計			21
大正	竹生島遊覧	不明	20

	竹生島略誌	馬場海嘉	15
小計			35
昭和 1	巡礼の旅	白州正子	4
	西国巡拝記	杉本苑子	13
	西国三十三ヶ所	平幡良雄	3
	巡礼の寺	三浦美佐子, 小川光三	2
	関西巡礼の旅	首藤一	2
	カラー巡礼の旅	佐和隆研	2
	西国巡礼紀行	中西芳郎	2
	西国巡礼	澤野久雄	3
	竹生島誌	澤実英	11
	西国三十三所巡礼	渡辺守順	3
	竹生島	中井一郎	4
小計			46
昭和 2	札所めぐりあいの旅	竹村節子	3
	句集 竹生島	山田佳郷	2
	同行二人	松原泰造	5
	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	21
	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	7
	西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内	西国札所会	7
	西国巡礼三十三所観音めぐり	佐和隆研	2
小計			45
平成	西国・新西国観音霊場巡拝紀行	漆原秀男	1
	西国 33 ヶ所 巡拝	小林茂	3
	西国三十三ヶ所めぐり	藤井金治	3
	御詠歌の旅	和田嘉寿男	3
	西国巡礼と俳句	瀧脇逸朗	5
	やすらぎ	橋本周三	2
	西国三十三ヶ所巡り	昭文社	3
	西国巡礼	白州正子	2
	句集 竹生島	山田佳郷	6
	古寺巡礼ひとりある記	能村進	3
	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	7
	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1

	西国観音霊場・新紀行	松本章男	2
	西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	4
	西国三十三ヶ所を歩く	歩く旅シリーズ古寺巡礼	1
小計			47
合計			194

6 - 4 音の出現頻度の変遷を調べるための時代毎の音の出現頻度分析と考察

分析対象とした文献に記述されている音をその種類,季節,場所別に以下のカテゴリに分類する.

表 6 - 6 抽出語句カテゴリの分類

音	水 (せせらぎ, 清水, 潮騒等), 船, 雨 (雨, あられ, みぞれ, 雷等), 風, , 草木 (枯葉, 木の実等), 動物, 声, (唄, 売声以外の人の声, 唄, 歌, 音楽), 時 (鐘の音など), 静寂,
季節	春, 夏, 秋, 冬
場所	湖, 山, 土産店, 社寺, 波止場, ターミナル

6 - 4 - 1 時代毎の音の各カテゴリ出現数

上記のような分類方法で,「巡礼記」に出てくる音を分け,カテゴリ別の出現頻度を時代別に表すと表 6-7,図 6-2 のようになる.

表 6 - 7 時代毎の各カテゴリ出現数(個)

	船	波	水	雨	風	草木	動物	声	時	静寂	他	春	夏	秋	冬	不明	湖	岸壁	山	ターミナル	社寺	波止場	他
江戸まで	5	6	1	0	9	3	4	2	1	4	3	5	0	0	8	8	11	2	5	2	3	0	0
大正	9	15	10	0	12	9	6	3	4	17	7	5	9	0	6	15	21	3	11	0	7	0	0
昭和1	9	13	7	3	7	14	8	9	4	27	5	0	18	2	5	22	18	0	18	8	8	0	4
昭和2	6	25	2	4	10	11	3	3	1	11	4	0	18	7	3	17	17	8	9	4	6	0	1
平成	7	13	4	5	7	14	8	7	1	24	3	5	16	0	4	23	22	1	15	7	5	0	2

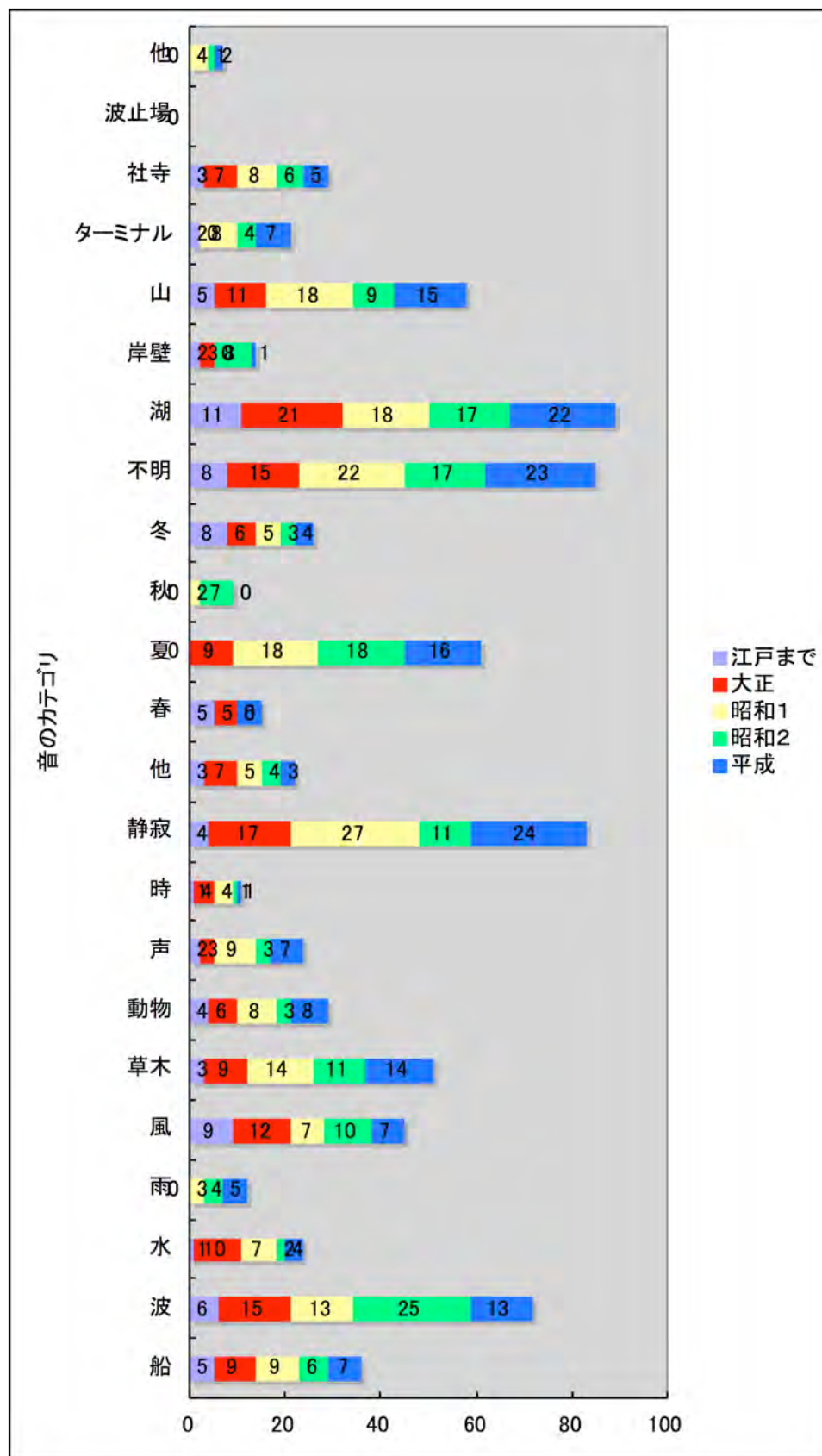


図6-2 各時代における、各カテゴリの出現頻度

分類結果をみると、波の音、水の音、風の音、といった自然の音は現在に至るまで等しい割合で取り上げられ、竹生島を構成するサウンドスケープの大きな要素となっていることがわかる。反対に、雨の音、時を知らせる音というのは割合が低く、竹生島を訪れる人達の評価の傾向がうかがえる。

季節に関して、秋の記述は割合が低くなっている。時代を通して夏の季節と冬の季節、次いで冬の季節の評価が高い

場所に関しては湖や山、社寺の記述が一定しており、一定した評価を得ていることをあらわしている。大正期以降、波止場やターミナルといった、道中の場所の記述もみられるようになる。

表 6-8 時代毎の音の各カテゴリがその時代に占める割合

	船	波	水	雨	風	草木	動物	声	時	静寂	他	合計（個）
江戸まで	13%	16%	3%	0%	24%	8%	11%	5%	3%	11%	8%	38
大正	10%	16%	11%	0%	13%	10%	7%	3%	4%	18%	8%	92
昭和1	8%	12%	7%	3%	7%	13%	8%	8%	4%	25%	5%	106
昭和2	8%	31%	3%	5%	13%	14%	4%	4%	1%	14%	5%	80
平成	8%	14%	4%	5%	8%	15%	9%	8%	1%	26%	3%	93

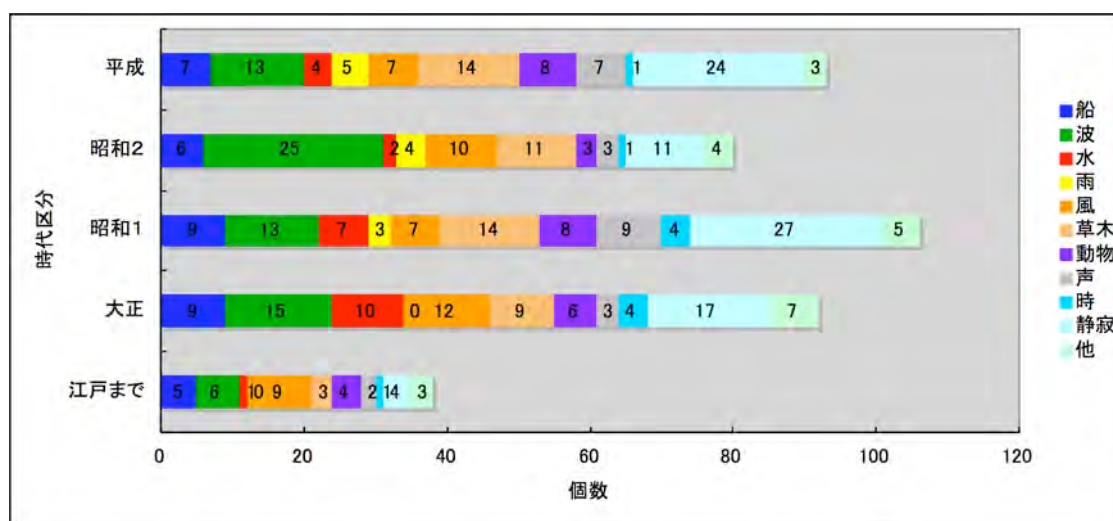


図 6-3 音の各音カテゴリがその時代に占める割合（個）

上の表は、時代毎の音の各カテゴリがその時代に占める割合である。時代を通して波、風、草木、静寂の音が多い。水の音はやや減少傾向であり、雨、声、時の音は竹生島では評価の低いサウンドスケープのようだ。

表 6-9 時代毎の季節の各カテゴリがその時代に占める割合

	春	夏	秋	冬	不明	合計 (個)
江戸まで	24%	0%	0%	38%	38%	21
大正	14%	26%	0%	17%	43%	35
昭和 1	0%	38%	4%	11%	47%	47
昭和 2	0%	40%	16%	7%	38%	45
平成	10%	33%	0%	8%	48%	48

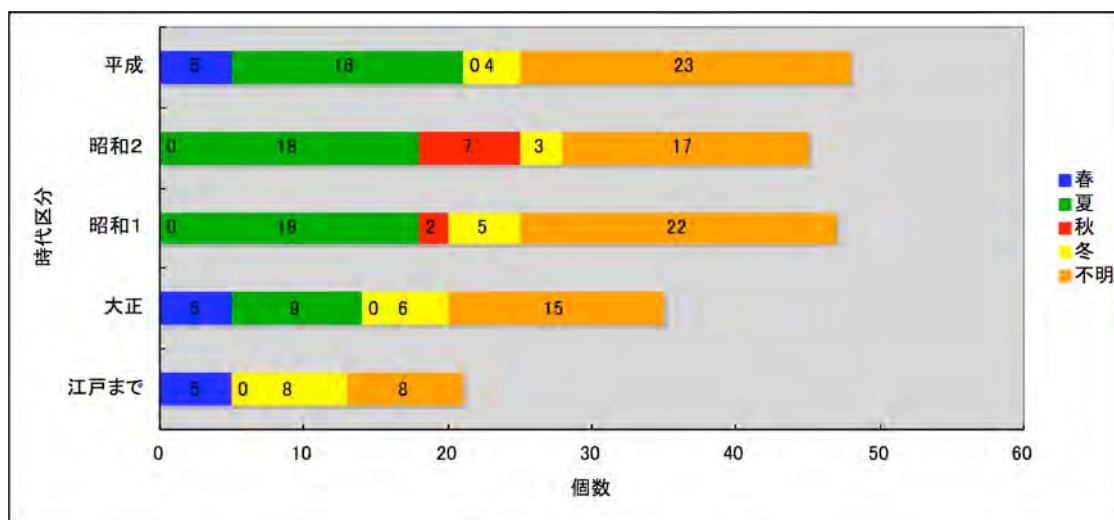


図 6-4 季節の各カテゴリがその時代に占める割合 (個)

上の表は、時代毎の季節の各カテゴリがその時代に占める割合である。竹生島を訪れた時の季節が判別しづらいもの、引用元の季節が明らかでないものがあるため、季節不明に分類せざるを得ないものが多い。判別可能なものでは、夏の記述が圧倒的に多く、冬の記述がやや減少傾向である。穏やかな気候での渡航者が多く、湖が荒れる秋から冬は敬遠されるようだ。

表 6-10 時代毎の場所の各カテゴリがその時代に占める割合

	湖	岸壁	山	ターミナル	社寺	波止場	他	合計 (個)
江戸まで	48%	9%	22%	9%	13%	0%	0%	23
大正	50%	7%	26%	0%	17%	0%	0%	42
昭和 1	32%	0%	32%	14%	14%	0%	7%	56
昭和 2	38%	18%	20%	9%	13%	0%	2%	45
平成	42%	2%	29%	13%	10%	0%	4%	52

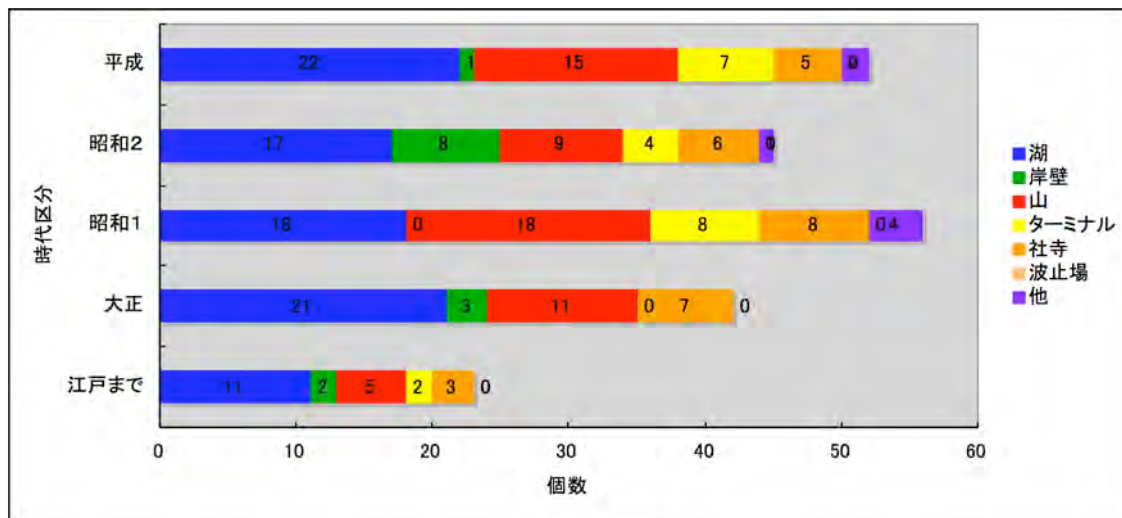


図6-5 場所の各カテゴリがその時代に占める割合(個)

上の表は、時代毎の場所の各カテゴリがその時代に占める割合である。湖部分と山部分が大
きな割合を占めている。ターミナルや社寺、波止場といった場所においても大きな増減はみられ
ない。

以降は時代毎に詳しく分析していく。

6 - 4 - 2 江戸時代まで

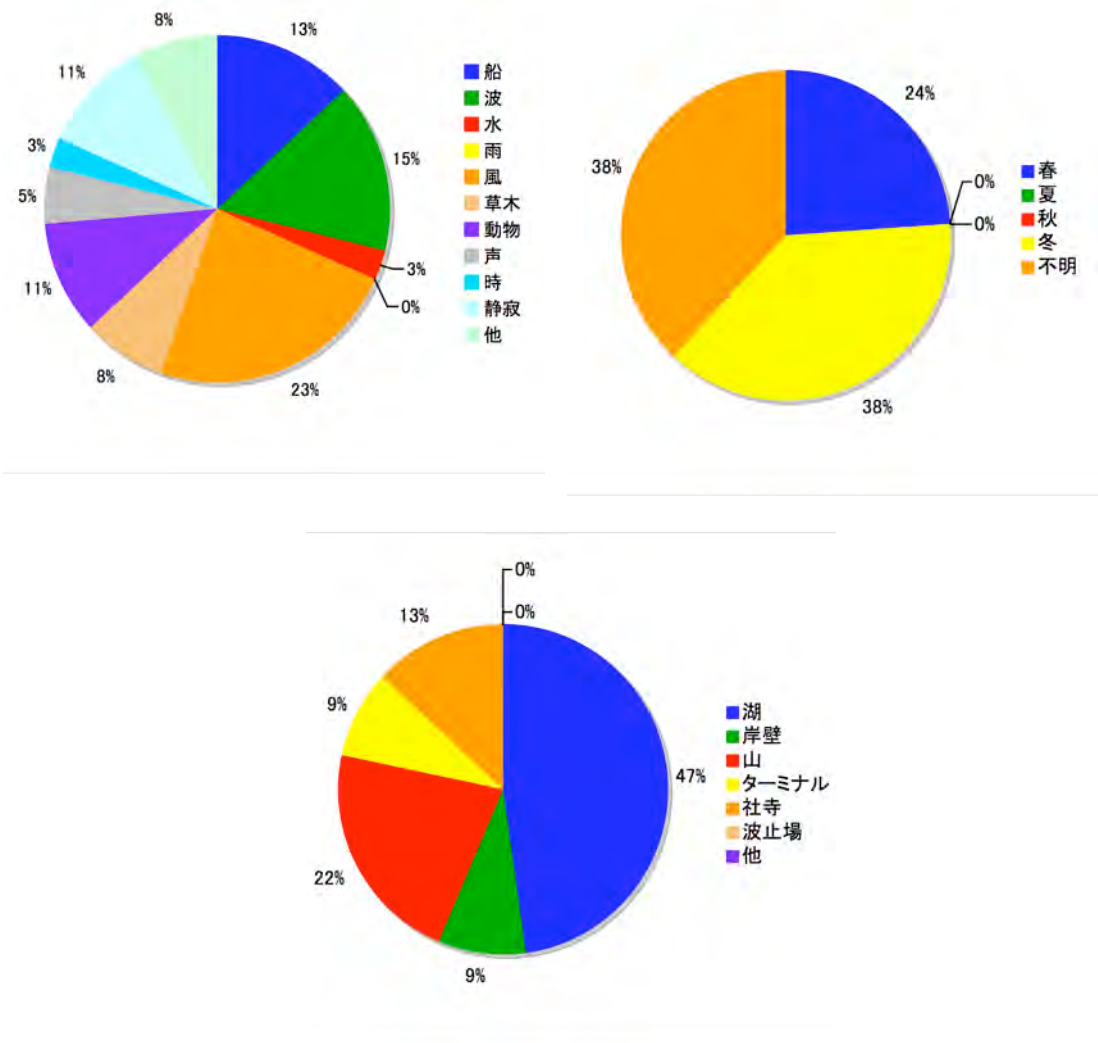


図6-6 江戸時代以前の抽出語句の各カテゴリの割合

図6-6は江戸時代以前の記述のカテゴリの内訳である。船, 波, 風, 静寂の音が多くを占めている。以下に江戸時代の記述を個別に分析していく。

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり, 月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」 謡曲竹生島(神を斎く島のメモリー竹生島より引用)

謡曲竹生島の一説である。竹生島に参詣に訪れた醍醐帝の朝臣が, 竹生島に渡るために漁翁の釣船に乗せてもらう場面である。「緑したたる木の影が湖水に映って, その木陰の間を魚の泳いでいくさまは魚が木に登るようです。月が海上に浮かぶときは, うさぎも波を走るようです。この島の景色は実に面白い。」という訳となる。描写されているサウンドスケープとして, 波(水), 草木, 動物に分類。「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を

春に、場所は湖上のため湖と分類した。

「谷間に鳴く鳶の声は老いさびて聞こえ、ほととぎすが夏の訪れをつげている」竹生島詣(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

鳶とほととぎすを動物に、「夏の訪れ」という語句を時を告げる音に、季節は旧暦の4月のため春に、「谷間に泣く」より場所は山と分類した。

「琵琶を差し出したので、経正はこれをひいた」竹生島詣(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

琵琶を差し出した宝厳寺の僧の声、琵琶の音を他(楽器)に、季節は春、場所は宝厳寺のため社寺に分類した。

「しばらく経文を唱えた」竹生島詣(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

経正が唱えた経文を声に、そこから連想されるサウンドスケープを静寂に、季節は春、場所は宝厳寺のため社寺に分類した。

「湖上の風は冷たい」西北紀行(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

「湖上の風」を風に、季節は1689年2月2日のため冬に、場所は湖上のため湖に分類。

「緑を岸壁が囲い」西北紀行(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

「緑」を草木に、季節を冬に、場所を緑がある山に分類。

「波は岩壁を荒い続けていた」西北紀行(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

「波」を波のカテゴリに、季節は冬、「岩壁を洗う」より場所を岸壁に分類。

「逆風吹いて行きがたし」西北紀行(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

「逆風」を風に、季節を冬に、場所は風が吹き荒れる湖上に分類。

「その小舟は、ゆれる波に、見え隠れしながら竹生島へ」西北紀行(神を齋く島のメモリー竹生島より引用)

「小舟」を船に、「ゆれる波」を波に、季節は冬に、場所は湖上のため湖に分類。

「烈風で吹き折られて航行不能」西国巡礼の旅

奥州からの巡礼者を乗せた「船」は「烈風」で吹き折られた。季節は「春」(1786年4月14日)とは言え、比良おろしと呼ばれる風の恐ろしさを物語っている。場所は湖上である。

「比良山おろしが吹き出して上陸できなかった」西国巡礼の旅

1812年の3月、常陸からの巡礼者を乗せた船は竹生島までもう少しというところまで近づい

たが、比良おろしのせいで上陸できなかったとある。季節は冬、場所は湖である。

「風向きが悪く出航できず」西国巡礼の旅

風向きが悪く出航できず、逗留したという 1860 年、女性巡礼者の記録がある。「船」が出航できないほどの「風」の描写である。季節は不明、場所は出航できず、逗留したということからターミナルとした。

「風向きが悪く出航できず」西国巡礼の旅

上記と同じく、1849 年には武蔵の巡礼者の記録も残る。よって分類は上記に準じた。

「白鳥数千羽集まり」西国巡礼道中記

「白鳥」を動物に、季節は本文より冬に、場所は鳥が集まってきた山、と分類した。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」西国巡礼道中記

「金波、銀波、るりの玉なす波間に浮かぶ竹生島こそ、七福神が宝を積み込む舟のようである。」と訳される竹生島の御詠歌である。「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明。場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「比良おろし吹きおこり」西国巡礼道中記

「比良おろし」という記述が多くみられる。当時の人々にとって、渡航を妨げる冬の湖北の風は脅威だったのだろう。季節は冬に、場所は湖に分類した。

「岩は崩れ、地は裂け」竹生島誌

むかし愛児の髪を下ろしこの島に出家沙門に入れた母親が情愛の念によりひそかに戒律を犯して魚肉を与え慰めたところ山神怒りて岩は崩れ、地は裂け、この世の地獄の様相を呈したという伝説である。音の種類は「他」に、季節は「不明」、場所は「山」とした。

「風波きびしく」竹生島誌

その昔、風波厳しく舟が竹生島に取り付くことのできなかったときに、笈を岩にかけて御詠む歌を唱え去ったという笈岩の言い伝えによる。「波」の音、「風」の音、季節は不明。場所は「岸壁」とした。

「鳥が来て種を落とし樹林が形成される以前、篠竹が生い茂った」西国観音霊場・新紀行

竹生島が形作られる時の伝説である。鳥を「動物」に、繁茂した篠竹を「草木」に分類し、繁茂する様子を「静寂」とした。季節は不明、場所は「山」とした。

「「都布都布」とつねに音が,, 湖面に飛沫が,, やがて風塵が積もり, 島となった」西国
観音霊場・新紀行

同じく竹生島形成の時の伝説である。「都布都布」は「つぶつぶ」と発音する. 湖面の飛沫を
「水」に, 風塵を「風」に分類. 季節は不明, 場所は「湖」とした.

「波にうつろふ朱のたまがき」神を齋く島のメモリー竹生島

名寄・隆祐からの一節. 昔は朱の玉垣が, 弁天堂へ続く石段に並んでいたのだらうとされる.
「波」の音に分類, 季節は不明, 場所は「湖」「社寺」とした.

6 - 4 - 3 大正時代

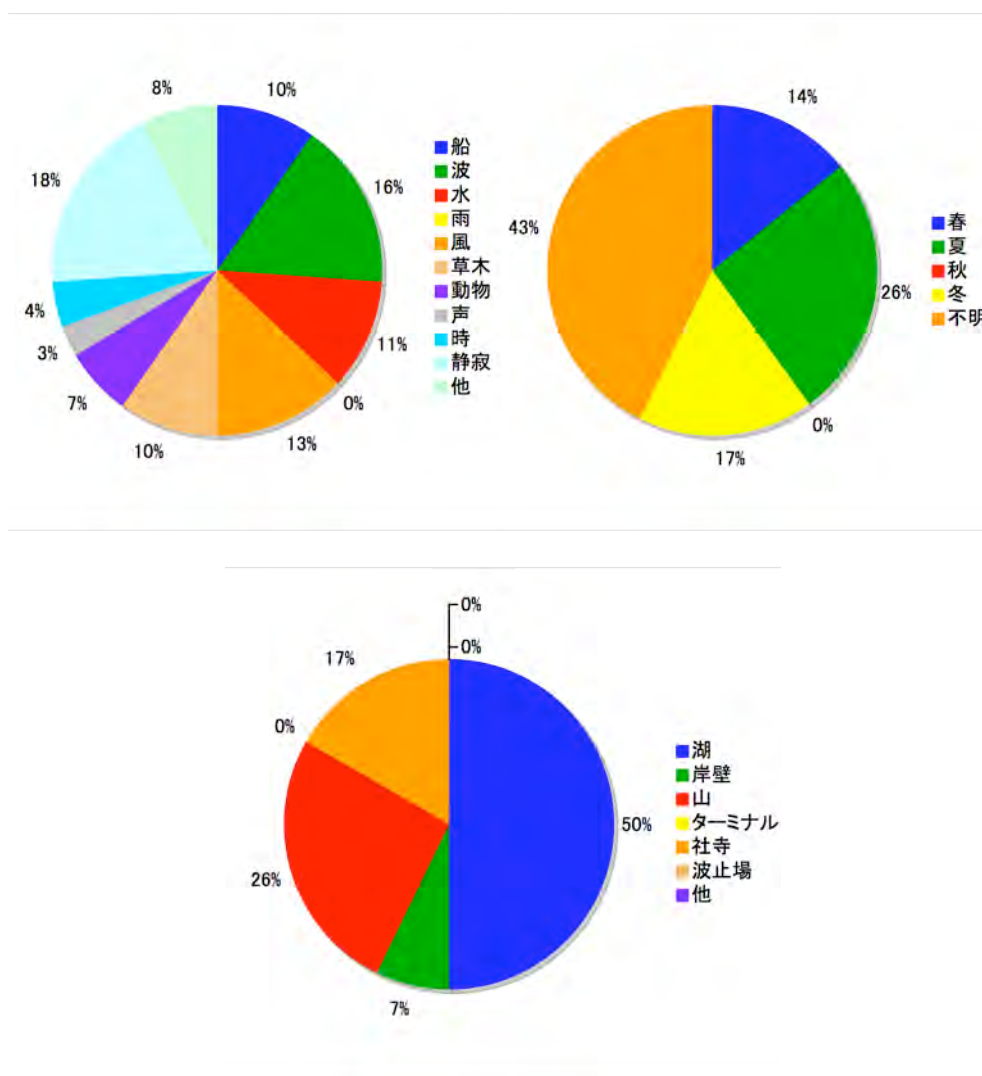


図 6-7 大正時代の抽出語句の各カテゴリの割合

図 6-7 は大正時代の記述のカテゴリの内訳である. 船, 波, 風, 静寂の割合が多い. 以下に詳

しく分析する.

「水ごりの一群や風を孕む帆等の風情は」竹生島遊覧

「風を孕む帆」を「風」と「船」に, 「水ごりの一群」を「動物」に分類. 季節は原文より冬とし, 場所は湖上とした.

「杜鵑若葉に泣く頃」竹生島遊覧

「杜鵑」を「動物」に, 「若葉」を「草木」に分類. 季節は春とし, 場所は山とした.

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり, 月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」竹生島遊覧

波(水), 草木, 動物に分類. 「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「小島,, 翼の如く這うてる風情や, 小さき魚族が盛に游動」竹生島遊覧

「小さき魚族が盛んに游動」より「波」, 「水」, 「動物」に分類. 正確な季節は不明. 場所は「湖」, 「山」とした.

「山には名物の竹を初め老松古杉繁茂して, その間に堂塔伽藍を隠見し」竹生島遊覧

「山には名物の竹を初め老松古杉繁茂」より「草木」と, 「老松古杉繁茂」から連想される「静寂」に分類. 季節は不明. 場所は「山」と「社寺」とした.

「緑樹の露滴る如き岩陰に清涼を入る折々」竹生島遊覧

「緑樹」より「草木」, 「露滴る如き岩陰に清涼を」より「水」, 「静寂」に分類. 季節は夏, 場所は山とした.

「波濤を徐に漕て, 汽船を浮かべて」竹生島遊覧

「汽船を浮かべて」より「船」, 「波濤を徐に漕て」より「波」と「静寂」に分類. 季節は不明, 場所は湖とした.

「広々たる太湖, 漁舟の便に頼る事嫌いてか」竹生島遊覧

「水」と「静寂」に分類. 「広々たる太湖」という表現から雄大さ, 静寂を感じる. 季節は不明. 場所は湖とした.

「さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響いて」竹生島遊覧

「さざ波」を「波」に, 「琴弦」を他(楽器)に分類. 季節は原文より夏, 場所は湖とした. 並みの音を琴に例えるという現代では使われなくなった表現が用いられている.

「汀のしぶき軽く面を翻すときの心地よさ」竹生島遊覧

「汀のしぶき」を「波」,「水」に分類. 季節は原文より夏, 場所は岸壁とした.

「北風荒く, 鹹水幽寂」竹生島遊覧

「北風」より「風」,「鹹水幽寂」より「静寂」に分類した. 季節は原文より冬, 場所は山, 社寺とした.

「残紅水を彩り島影倒に映りて, 緑は湖心をひたす」竹生島遊覧

「水を彩り」より「水」,「緑は湖心を」より「草木」に分類. 「ひたす」より連想される「静寂」にも分類をした. 季節は夏, 場所は湖である.

「やがて頻りに鳴動して, 日月光輝きて, 山の端いづる如くにて」竹生島遊覧

弁財天が降臨したときの描写とされる一節である. 「頻りに鳴動して, 日月輝きて」とは特別な「時」を表すような描写だと思われる. 季節は不明. 場所は弁財天が降臨したとのことから社寺とした.

「虚空に音楽聞こえ, 春の夜の,, 夜遊の舞楽も時過ぎて,, 海づらに, 波風しきりに鳴動にて」竹生島遊覧

「波風しきりに鳴動にて」より「波」,「風」,「舞楽」より「声」に分類. 「波風しきりに鳴動」は龍神が湖上に出現する描写であるため, 特別な時間を表すと判断し「時」に分類した. 季節は春, 場所は湖とした.

「社壇の扉を押し開き, 嶺風吹くとても, 沖漕ぐ船はよも尽きじ」竹生島遊覧

「沖漕ぐ船」より「船」,「嶺風」より「風」と「冬」に分類. 場所は「湖」と「社寺」とした.

「南風の烈しく」竹生島遊覧

「風」に分類. 季節は不明. 場所は原文が島を紹介していることより, 山とした.

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」竹生島遊覧

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし, それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした. 季節は不明. 場所は波間に浮かぶ, より湖とした.

「櫓の音軽く波を漕で」竹生島遊覧

「櫓」より「船」,「波を漕で」より「波」に分類. 季節は不明, 場所は島巡りの一節のため, 湖とした.

「風波の為, 和舟が島に着くことが出来なかった, 御詠歌を唱えて,,」竹生島遊覧

「風波」より「風」,「波」に,「和舟」より「船」に分類.「御詠歌」を「声」に分類した.季節は不明,場所は「湖」に分類.

「点々と滴る水の音簌簌と夏なお戦ぐ冷たき空気が」竹生島遊覧

「点々と滴る水の音」を「水」に,「戦ぐ冷たき空気」を「風」に,「簌簌と」から連想される「静寂」に分類.季節は夏,場所は山とした.

「水ごりの一群や風を孕む帆等の風情は」竹生島略誌

「風を孕む帆」を「風」と「船」に,「水ごりの一群」を「動物」に分類.季節は原文より冬とし,場所は湖上とした.

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり,月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」竹生島略誌

波(水),草木,動物に分類.「緑樹影沈んで」という語句を静寂に,謡曲の中での季節は春のため季節を春に,場所は湖上のため湖と分類した.

「山には名物の竹を初め老松古杉繁茂して,その間に堂塔伽藍を隠見し」竹生島略誌

「山には名物の竹を初め老松古杉繁茂」より「草木」と,「老松古杉繁茂」から連想される「静寂」に分類.季節は不明.場所は「山」と「社寺」とした.

「緑樹の露滴る如き岩陰に清涼を入る折々」竹生島略誌

「緑樹」より「草木」,「露滴る如き岩陰に清涼を」より「水」,「静寂」に分類.季節は夏,場所は山とした.

「波濤を徐に漕て,,汽船を浮かべて」竹生島略誌

汽船を浮かべて」より「船」,「波濤を徐に漕て」より「波」と「静寂」に分類.季節は不明,場所は湖とした.

「広々たる太湖,,漁舟の便に頼る事嫌いてか」竹生島略誌

「水」と「静寂」に分類.「広々たる太湖」という表現から雄大さ,静寂を感じる.季節は不明.場所は湖とした.

「さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響いて」竹生島略誌

「さざ波」を「波」に,「琴弦」を他(楽器)に分類.季節は原文より夏,場所は湖とした.並みの音を琴に例えるという現代では使われなくなった表現が用いられている.

「汀のしぶき軽く面を翻すときの心地よさ」竹生島略誌

「汀のしぶき」を「波」,「水」に分類. 季節は原文より夏, 場所は岸壁とした.

「北風荒く, 鹹水幽寂」 竹生島略誌

「北風」より「風」,「鹹水幽寂」より「静寂」に分類した. 季節は原文より冬, 場所は山, 社寺とした.

「残紅水を彩り島影倒に映りて, 緑は湖心をひたす」 竹生島略誌

「水を彩り」より「水」,「緑は湖心を」より「草木」に分類. 「ひたす」より連想される「静寂」にも分類をした. 季節は夏, 場所は湖である.

「やがて頻りに鳴動して, 日月光輝きて, 山の端いづる如くにて」 竹生島略誌

弁財天が降臨したときの描写とされる一節である. 「頻りに鳴動して, 日月輝きて」とは特別な「時」を表すような描写だと思われる. 季節は不明. 場所は弁財天が降臨したとのことから社寺とした.

「虚空に音楽聞こえ,,, 春の夜の,, 夜遊の舞楽も時過ぎて,, 海づらに, 波風しきりに鳴動にて」 竹生島略誌

「波風しきりに鳴動にて」より「波」,「風」. 「舞楽」より「声」に分類. 「波風しきりに鳴動」は龍神が湖上に出現する描写であるため, 特別な時間を表すと判断し「時」に分類した. 季節は春, 場所は湖とした.

「社壇の扉を押し開き, 嶺風吹くとても, 沖漕ぐ船はよも尽きじ」 竹生島略誌

「沖漕ぐ船」より「船」 「嶺風」より「風」と「冬」に分類. 場所は「湖」と「社寺」とした.

「南風の烈しく」 竹生島略誌

「風」に分類. 季節は不明. 場所は原文が島を紹介していることより, 山とした.

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」 竹生島略誌

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし, それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした. 季節は不明. 場所は波間に浮かぶ, より湖とした.

6 - 4 - 4 昭和時代

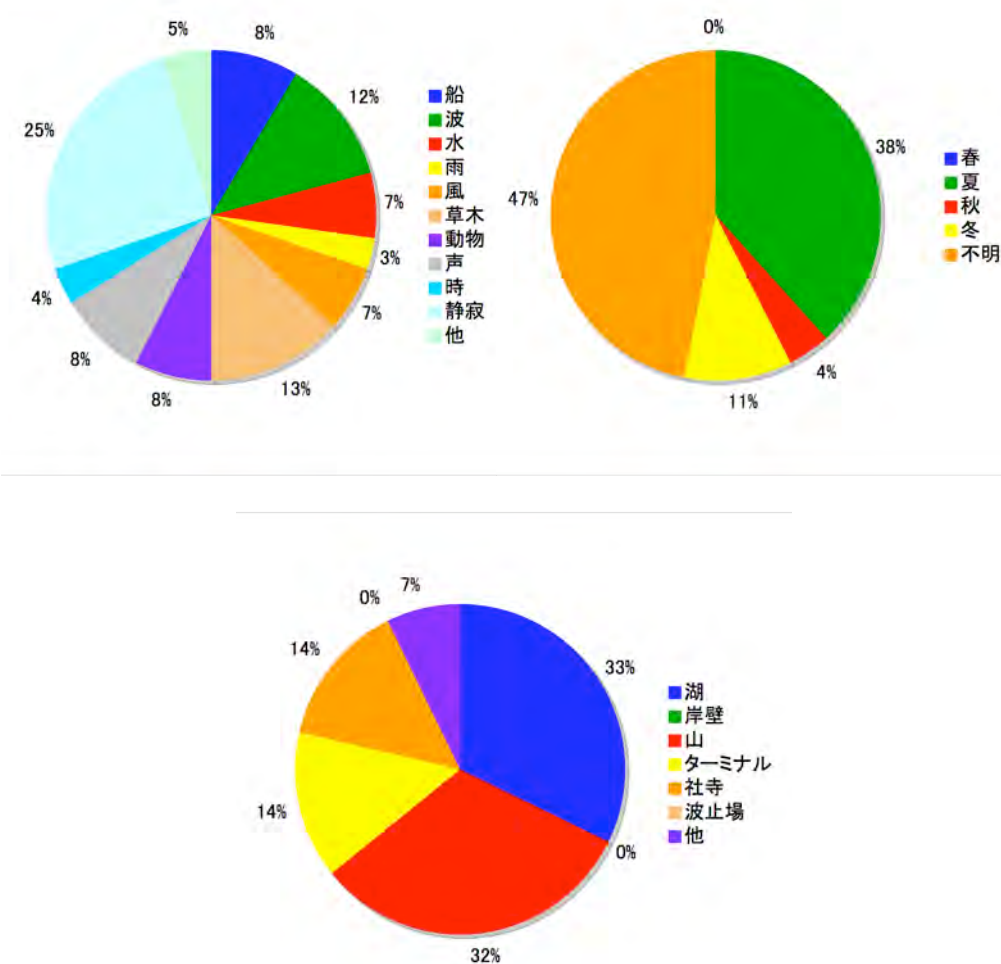


図6-8 昭和時代1の抽出語句の各カテゴリの割合

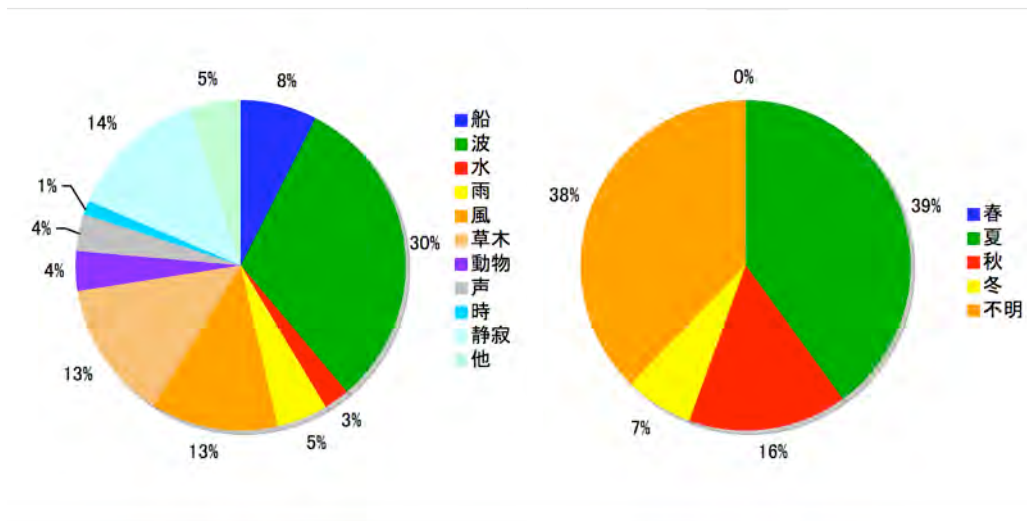


図 6-9 昭和時代 2 の抽出語句の各カテゴリの割合

図 6-8, 9 は昭和時代の記述のカテゴリである。上図が 1980 年まで, 下図は 1980 年から 1989 年までの内容となっている。昭和は文献の数が多く, 分析に偏りが出ないように, 抽出語句の総数を 2 分割した。

昭和期内では, 波の音, 静寂の様子が一定して高い評価を受け, 風, 森林の音がそれに続く。また, 「モーターの音がひびくから, 連絡船が出るのだろう。(西国巡礼 1975)」のようにエンジン船の就航以後, 船のエンジン音の記述が見て取れるようになる。短い船旅であるが, 島への巡礼への気持ちと相まって, 船の音は特別な思いをを起こさせるのかもしれない。

以下に詳細に分析する。

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり, 月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」 巡礼の旅

波(水), 草木, 動物に分類. 「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「真青な水面に影を映して」 巡礼の旅

「真青な水面」を「水」に分類, 「影を映す」との表現から, 湖の雄大さ, 静寂がうかがえる. 季節は原文より夏, 場所は湖とした.

「ひたひたとよせるさざ波の」 巡礼の旅

「さざ波」より「波」, 連想される「静寂」に分類した. 季節は不明である. 場所は著者白州正子が勧める海津の浜辺からの景色のため, その他とした.

「物音ひとつししない浜辺に立って」 巡礼の旅

「物音ひとつししない浜辺」より「静寂」に分類した. 季節は不明である. 場所は著者白州正子が勧める海津の浜辺からの景色のため, その他とした.

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり, 月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」 西国巡拝記

波(水), 草木, 動物に分類. 「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「伊吹おろし, 比良八荒に, 湖北の天地が荒れ狂う冬期であろうと」 西国巡拝記

「伊吹おろし, 比良八荒に, 湖北の天地が荒れ狂う」より「波」「水」「雨」「風」に分類した. 「荒れ狂う」という表現より, 湖北の気候への恐れがうかがえる. 季節は冬, 場所は湖とした.

「宝巖寺は, 翠緑の蔭にしずもっている」 西国巡拝記

「翠緑の蔭にしずもる」より「草木」, 「静寂」に分類. 季節は夏である. 場所は「山」, 「社寺」とした.

「老杉, 老松に鬱蒼と」 西国巡拝記

「老杉, 老松」より「草木」に分類. 古木が鬱蒼と茂る様子から「静寂」に分類した. 季節は夏, 場所は山である, 古木が鬱蒼と茂る様子は, 竹生島において評価され続けている要素である.

「水面に映る島影は冴え冴えと樹木の緑に染まっている」 西国巡拝記

「水面に映る」より「水」, 「樹木の緑」より「草木」に分類. 樹木の緑に映る島影より「静寂」にも分類した. 季節は夏, 場所は湖である.

「汽笛を鳴らして,,溢れ出した人渦で身動きもできなく」西国巡拝記

出港を知らせる「汽笛」より「船」,「時」,「溢れ出した人渦」より「声」に分類. 季節は夏, 場所はターミナルである.

「呼び込みの女性たちの金切り声と」西国巡拝記

「金切り声」より「声」に分類. 季節は夏. 場所は土産物店のため,「他」とした. 船を降りてすぐの, 土産物店の呼び込みは圧巻である. 気さくな店員達が話しかけてくれる.

「こね返す観光客の熱鬧にまじって,,心の洞を吹き抜けてゆく潮風は」西国巡拝記

「観光客の熱鬧」より「声」,「潮風」より「風」に分類した. 「心の洞を吹き抜ける」という表現は, 巡礼により心が洗われるような感覚を覚えた著者の心境であろう. 心の「静寂」を思わせる. 季節は夏, 場所は社寺である.

「混みよりのすさまじさは」西国巡拝記

巡礼により込み合う竹生島の熱気を表している. これは「声」に分類した. 季節は夏, 場所は社寺である.

「人の背越しにのびあがりのびあがりしているうちに, 乗船をうながす汽笛が, ドラがけたたましく」西国巡拝記

「人の背越しにのびあがりのびあがりしているうちに」とは宝物館の混みようを表す表現である. これは「声」に分類した. 「乗船をうながす汽笛」より「船」,「時」に分類. 季節は夏, 場所は「社寺」,「ターミナル」である.

「乾いた音をたてて錨があがり 船は静寂をとりもどした島をあとに」西国巡拝記

碇を上げる「船」の音, 船が去り, 「静寂」を取り戻す島が記されている. 季節は夏, 場所はターミナルである. 巡礼者の滞在中と去った後の動と静のコントラストが読み取れる.

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」西国巡拝記

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし, それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした. 季節は不明. 場所は波間に浮かぶ, より湖とした

「島々が浮かび, 島巡りの遊覧船も出て, 自然の美しい風光を目の当たりに」西国三十三ヶ所

「島巡りの遊覧船」より「船」,「自然の美しい風光」より「風」に分類している. 季節は不明である. 場所は船の浮かぶ「湖」, 風を感じる「山」とした.

「杉や松などの老木におおわれ」西国三十三ヶ所

「老木」より「草木」に分類. 古木に覆われる島の様子を「静寂」とした. 季節は不明, 場所は山である.

「参拝していると, 出向を知らせる汽笛が鳴っている」西国三十三ヶ所

「出港を知らせる汽笛」の「船」, 「時」に分類した. 季節は不明, 場所は社寺. そしてターミナルである.

「口々にはしゃぎながら石段へ石段へ」西国巡拝記

「口々にはしゃぐ」を「声」に分類. 季節は夏, 場所は社寺である.

「孤島の静けさを取り戻す」巡礼の寺

巡礼者は「船」に乗り, 残された島は再び「静寂」となる. 動と静のコントラストである. 季節は夏, 場所は山とターミナルである.

「汽笛を鳴らしながら」巡礼の寺

汽笛を鳴らし, 島を去る「船」の描写である. 季節は夏, 場所は湖, ターミナルである.

「マツ, スギ, ヒノキの老木, 澄み切った水の中を泳ぎ回っている魚」関西巡礼の旅

古木生い茂る描写より「草木」, 「澄み切った水の中を泳ぐ魚」より「水」と「動物」に分類した. 季節は不明, 場所は湖と山である.

「伊吹おろし, 比良おろしと呼ばれる風が強く」関西巡礼の旅

冬期に湖北の湖を荒らす「風」の描写である. 季節は冬, 場所は湖とした.

「日本海からの風雪を運んでくるため, 秋が深まると, 湖が荒れて, 波が高い」カラー巡礼の旅

「風雪を運んでくる」, 「湖が荒れて」より「波」, 「水」, 「雨」, 「風」に分類. 「秋が深まる」と「風雪を運んでくる」により, 秋か冬か検討し, 冬とした. 場所は湖である.

「岩の屹立するかたちでありながら,, 竹林がみえ, 松樹の生い茂る様を眺めると」カラー巡礼の旅

「竹林」, 「松樹の生い茂る様」より「草木」と, 連想される「静寂」に分類した. 季節は不明である. 場所は「岩の屹立」より「山」とした.

「吐き出された様に下船した,, , ぞろぞろと」西国巡礼紀行

港に着いた船から下船する人達の様子である. 雑踏を「声」と分類した. 季節は不明, 場所はターミナルである. 閑寂な島の表情が一変, 盛り上がる瞬間である.

「どっと詰めかけた参拝者がわれ勝ちにと」西国巡礼紀行

島は狭く、巡礼者は船の着く時間に集中するため、毎回このような騒ぎとなるようだ。「声」に分類。季節は不明である。場所は社寺とした。

「風にあおられる雪が」西国巡礼

「風にあおられる雪」より「雨」と「風」に分類。「雪」より季節は冬とし、場所は山部分とした。

「竹や松、杉などに覆われ、まだ人の踏まない土地がある」西国巡礼

「竹や松、杉」より「草木」に分類。「まだ人の踏まない土地」より「静寂」に分類した。木々は不明、場所は山である。竹生島には未踏の土地もあり、信仰の島ということからの人々の山への敬意がうかがえる。

「モーターの音がひびくから、連絡船が出るのだろう、栈橋を走ってゆく人の姿が多い」西国巡礼

「モーターの音」が現れる。「船」に分類した。船の音は出港の合図代わりの意味もあり、「時」に分類、走っていく人達の声「声」と分類した。季節は不明である、場所は「山」から聞いた船の音と、船の繫留してある波止場とした。

「遠くかすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島」竹生嶋誌

琵琶湖哀歌の一節である。彦根城を遠くに眺めながら、「波に暮れる」という表現で日没を表している。「波」、「静寂」に分類した。季節は不明である。場所は「波に暮れる」という表現から湖とした。

「三井の晩鐘音絶えて なみすすりなく浜千鳥」竹生嶋誌

琵琶湖哀歌の一節であり「遠くかすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島」の続きである。三井寺の晩鐘の音もやみ、訪れる静寂の中に響く浜千鳥の声が映し出されている。「波」、「動物」、「静寂」に分類。季節は不明である。三井寺(大津市)の晩鐘の音は竹生島では聞こえないと思われるが、「三井寺の晩鐘も消える時間帯」と解釈し、場所は竹生島と考えて、山とした。

「杉、桧が繁茂し、白鷺、青鷺、鵜が数多く、群をなして奇声かしましくとびかうさまは」竹生嶋誌

白鷺、青鷺、鵜の声の描写である。「動物」、「草木」に分類した。季節は不明であるが、鳥は四季を通じて生息していると思われる。場所は山とした。

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」竹生嶋誌

波(水)、草木、動物に分類。「緑樹影沈んで」という語句を静寂に、謡曲の中での季節は春のた

め季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」竹生島誌

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし, それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした. 季節は不明. 場所は波間に浮かぶ, より湖とした.

「島の茂った樹間に見える堂塔が」竹生島誌

繁茂する森林の中に佇む堂塔が描写されている. 「草木」, 「静寂」に分類. 場所は「山」, 「社寺」とした.

「月の夜の金波銀波に浮かぶ竹生島」竹生島誌

月の夜に浮かぶ竹生島が, 竜宮城に見えたのかもしれないとしている「波」, 「静寂」に分類. 季節は不明. 場所は湖とした.

「奥深く暗くて点々と水滴が滴り夏なお寒き風がほほをなぜる」竹生島誌

滴る「水」と夏も冷たい「風」が「静寂」とともに記されている. 季節は夏, 場所は霊窟ということで「その他」とした.

「竹が茂り, 松, 杉に覆われ」西国三十三所巡礼

森林が繁茂する様子である. 「草木」に分類した. どっしりと繁茂する様相は「静寂」である. 季節は不明, 場所は山とした.

「深緑 竹生島の沈影」西国三十三所巡礼

琵琶湖八景のひとつである. 竹生島は「深緑」として評価されており, 森林が竹生島にとって大きな要素だということがわかる.

琵琶湖八景は, 琵琶湖の雄大さと変化に富んだ風景を広く紹介するため, 1949年に選定された. 「月明 彦根の古城(彦根城のこと)」, 「涼風 雄松崎の白江」, 「新雪 賤ヶ岳の大観」, 「煙雨 比叡の樹林」, 「深緑 竹生島の沈影」, 「夕陽 瀬田・石山の清流」, 「暁霧 海津大崎の岩礁」, 「春色 安土・八幡の水郷」の8つである.

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」竹生島誌

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし, それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした. 季節は不明. 場所は波間に浮かぶ, より湖とした.

「四方は切り立った崖で覆われ, 老松, 老杉がそれらを」札所めぐりあいの旅

「老松, 老杉」を「草木」に分類. 「老松, 老杉」という表現が静寂思わせる. 竹生島を構成する重要な要素なのである. 季節は不明, 場所は山とした.

「白波をけたてて彦根からの快速船がやってくるのが」札所めぐりあいの旅

「波」と「船」に分類した。竹生島への渡航手段は快速船のみであり、竹生島とは切っても切れない関係にある。季節は不明、場所は湖とした。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」札所めぐりあいの旅

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明、場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「島中の樹に蟬が鳴く竹生島」句集 竹生島

「島中の樹」を「草木」に分類、昆虫も「動物」に分類した。季節は「蟬」の語より夏、場所は山とした。夏の竹生島は蟬の音で覆われている。

「船行かず雪積むままの竹生島」句集 竹生島

雪の季節の竹生島を詠んだ句である。冬期は竹生島への船は欠航し、雪が竹生島を包む。「雨」、
「冬」に分類、場所は、船の停泊するターミナルとした。

「古木が茂っています」同行二人

「草木」、「静寂」に分類した。古木の繁茂する竹生島は多くの評価を得ている。季節は不明、場所は山とした。

「吹き下ろす風は湖水とは思えぬ程の大波が」同行二人

「波」、「水」、「風」に分類した。冬期の比良おろしと呼ばれる風は、荒れる海のような波を起こし、夏期は穏やかな湖を豹変させる。季節は冬、場所は湖とした。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」同行二人

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明、場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「船の航跡にうららかな太陽の光が」同行二人

「船」の後ろに描かれる「波」の描写、「うららかさ」という表現が、巡礼の後の心の清らかさを表しているようである。季節は夏、場所は湖とした。

「(弁財天が祀られていることを指して)正しい審判の背後には、弁財天の持たれる琵琶の音声のあることを象徴している。音をよく聞く、声をよく聞くのが審判の要諦であることを示している」同行二人

審判を象徴する琵琶として、「時」に分類した。季節は不明、場所は他である。弁財天の持つ琵琶の意味を語った語句である。弁財天は「音をよく聞く、声をよく聞くのが審判の要諦」ということを象徴し、琵琶を携えているのであろうか。

「波が、白く寄せていくところで」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」に分類. 季節は不明, 場所は岸壁とした.

「帰りには途中から猛烈な嵐となりまして」西国巡礼の旅 観音のころ

「波」, 「雨」, 「風」に分類. 船旅になる竹生島巡礼において, 嵐は巡礼者を脅かす大きな脅威である. 季節は秋, 場所は湖とした.

「竹や杉, 松といった島の樹木は, 風にあおられ始めました」西国巡礼の旅 観音のころ

「風」, 「草木」に分類. 荒れる琵琶湖の様相が綴られている. 季節は秋, 場所は山とした.

「浪が激しく砕けていたのには驚きというより, こわくなりました」西国巡礼の旅 観音のころ

「波」, 「秋」, 「岸壁」に分類. 竹生島に寄せる波は, 穏やかさと恐ろしさ, 二つの感情で評価されている.

「風が吹き荒れだしたのです」西国巡礼の旅 観音のころ

「風」, 「秋」, 「湖」に分類. 秋から冬にかけての風には, 畏怖の念が見て取れることが多い.

「周囲には三角波も立ち, 小さな観光船は, 徐々に徐々に安心できないと思うような揺れを始めたのです」西国巡礼の旅 観音のころ

「船」, 「波」, 「秋」, 「湖」に分類. 表情を変える琵琶湖は, 船旅の中では命の危険を感じることもある.

「大きなスピーカーから, 太い男の声で, アナウンスがありました. 天候が悪化し始めたので, なるべく早く彦根に戻りたい」西国巡礼の旅 観音のころ

「声」, 「秋」, 「ターミナル」に分類. 荒れた天候での船旅は, 船が大きな観光船になっても落ち着かないようだ.

「さらに雨風が強くなり, スピーカーの太い声が, しきりに帰船を促すため」西国巡礼の旅 観音のころ

「雨」, 「風」, 「声」, 「秋」に分類. 場所は寺で聞いたアナウンスのため, 「社寺」とした.

「とびという鳥が輪をかいている」神を齋く島のメモリー竹生島

「動物」に分類. 季節は原文より夏, 場所は社寺とした.

「波は常に岩を洗い」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」に分類. 季節は不明, 場所は波が寄せる岸壁とした.

「夕波の竹生島に」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」に分類. 季節は不明, 場所は湖とした. 波に暮れ行く, とは御詠歌にも詠まれたサウンドスケープである.

「深緑 竹生島の沈影」神を齋く島のメモリー竹生島

琵琶湖八景のひとつである. 竹生島は「深緑」として評価されており, 森林が竹生島にとって大きな要素だということがわかる.

琵琶湖八景は, 琵琶湖の雄大さと変化に富んだ風景を広く紹介するため, 1949 年に選定された. 「月明 彦根の古城 (彦根城のこと) », 「涼風 雄松崎の白江 », 「新雪 賤ヶ岳の大観 », 「煙雨 比叡の樹林 », 「深緑 竹生島の沈影 », 「夕陽 瀬田・石山の清流 », 「暁霧 海津大崎の岩礁 », 「春色 安土・八幡の水郷」の 8 つである.

「草木 », 「静寂」に分類. 季節は不明, 場所は山とした.

「小舟が, 白い巡礼姿を乗せて行く波をみた」神を齋く島のメモリー竹生島

「船 », 「波」に分類. 季節は不明, 場所は湖とした. 現在となっては, 小舟を使い巡礼姿で嶋を回することは不可能なようである¹⁾.

「白い花が緑を背景に空へと舞う. それは冬の吹雪のようであった」神を齋く島のメモリー竹生島

「風 », 「草木」に分類した. 季節は夏, 場所は山である. 花の舞う様が冬の吹雪のよう, とはなんと風情のある表現であろうか.

「波の白さと一緒になって岩壁にぶつかってはくだけていた」神を齋く島のメモリー竹生島

「波 », 「草木」に分類. 白い花びらが波の色と同じ色になって岩に砕けているという描写である. 季節を夏, 場所を岸壁とした.

「白い花が風に散り急いでいる」神を齋く島のメモリー竹生島

「風 », 「草木」に分類. 散り急ぐとは, 風が吹くのを待っている, とのことだろうか. 風の心地よさが汲み取れる. 季節は夏, 場所はターミナルとした.

「夏嵐とよぶにふさわしいような風が花を散らしていた」神を齋く島のメモリー竹生島

「風 », 「草木」に分類. 夏にも風がきつい日があるが, 冬のように恐ろしいといった感情はみられない. 季節は夏, 場所はターミナルとした.

「多くの人々が群がり集まっていた」神を齋く島のメモリー竹生島

「声」に分類. 季節は夏である. 場所は社寺とした. 限られた時間内での巡礼は, ごったがえすほどの熱気をみせる.

「島に寄せる波の花が」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」に分類. 季節は夏, 場所は岸壁とした. 波を花びらに例えるところが赴き深い.

「波に揺れる船上で,,,竹生島が上下していた」神を齋く島のメモリー竹生島

「船」, 「波」に分類. 季節は夏, 場所は山とした.

「小さな荒神岩に, 白い波がしぶきを」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」, 「夏」, 「岸壁」に分類.

「波は岩に砕けては」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」, 「夏」, 「岸壁」に分類.

「周囲は波の玉垣で, 陸地は遠く霞のかなた」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」, 「夏」, 「湖」に分類.

「涼風が吹き抜けていき, 先ほどの船はすでに」神を齋く島のメモリー竹生島

「船」, 「風」に分類. 風の去った後には船の後だけが残るという記述である. 季節は夏, 場所は社寺とした.

「波打つ湖のこころの広さ」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」, 「夏」, 「湖」に分類. 湖の雄大さを思わせる語句である.

「厄よけのかわらけを深々とたたえた水に投げた」神を齋く島のメモリー竹生島

「水」, 「夏」, 「社寺」に分類. かわらけ投げは神社でおこなう厄よけである. かわらけに願いを込め, 岬に向かい投げる. 眼下には一面琵琶湖が広がっている.

「波が寄せ続けて音を岩にひびかせて」神を齋く島のメモリー竹生島

「波」に分類. 季節は夏, 場所は岸壁とした. 波が竹生島になんらかの音のメッセージを届けているのかもしれない.

「三井の晩鐘 音絶えて なみすすりなく 浜千鳥」西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内

琵琶湖哀歌の一節であり「遠くかすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島」の続きである. 三井寺の晩鐘の音もやみ, 訪れる静寂の中に響く浜千鳥の声が映し出されている. 「波」, 「動物」, 「静寂」に分類. 季節は不明である. 三井寺(大津市)の晩鐘の音は竹生島では聞こえないと思わ

れるが、「三井寺の晩鐘も消える時間帯」と解釈し、場所は竹生島と考えて、山とした。

「波静かな湖面を」西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内

「波」，「静寂」に分類。季節は不明，場所は湖である。

「遠くかすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島」西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内

琵琶湖哀歌の一節である。彦根城を遠くに眺めながら、「波に暮れる」という表現で日没を表している。「波」，「静寂」に分類した。季節は不明である。場所は「波に暮れる」という表現から湖とした。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明。場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「茂った木々の間から見える堂塔の姿を」西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内

「草木」，「静寂」に分類。季節は夏，場所は社寺とした。繁茂する木々の中に佇む堂塔が印象的なサウンドスケープを形成している。

「月の夜の金波銀波に浮かぶ」西国三十三所観音巡礼 法話と札所案内

「波」，「静寂」に分類。季節は不明，場所は湖とした。

「雪風は湖北の海を荒らして」西国巡礼三十三所観音めぐり

「雨」，「風」に分類。荒れる琵琶湖はいつの時代も脅威である。季節は冬，場所は湖とした。

「森が覆いかぶさるように密生している」西国巡礼三十三所観音めぐり

「草木」，「静寂」に分類。季節は不明，場所は山とした。「覆いかぶさる」という表現が、竹生島の森林の有り様を、よく表していると言える。

6 - 4 - 5 平成時代

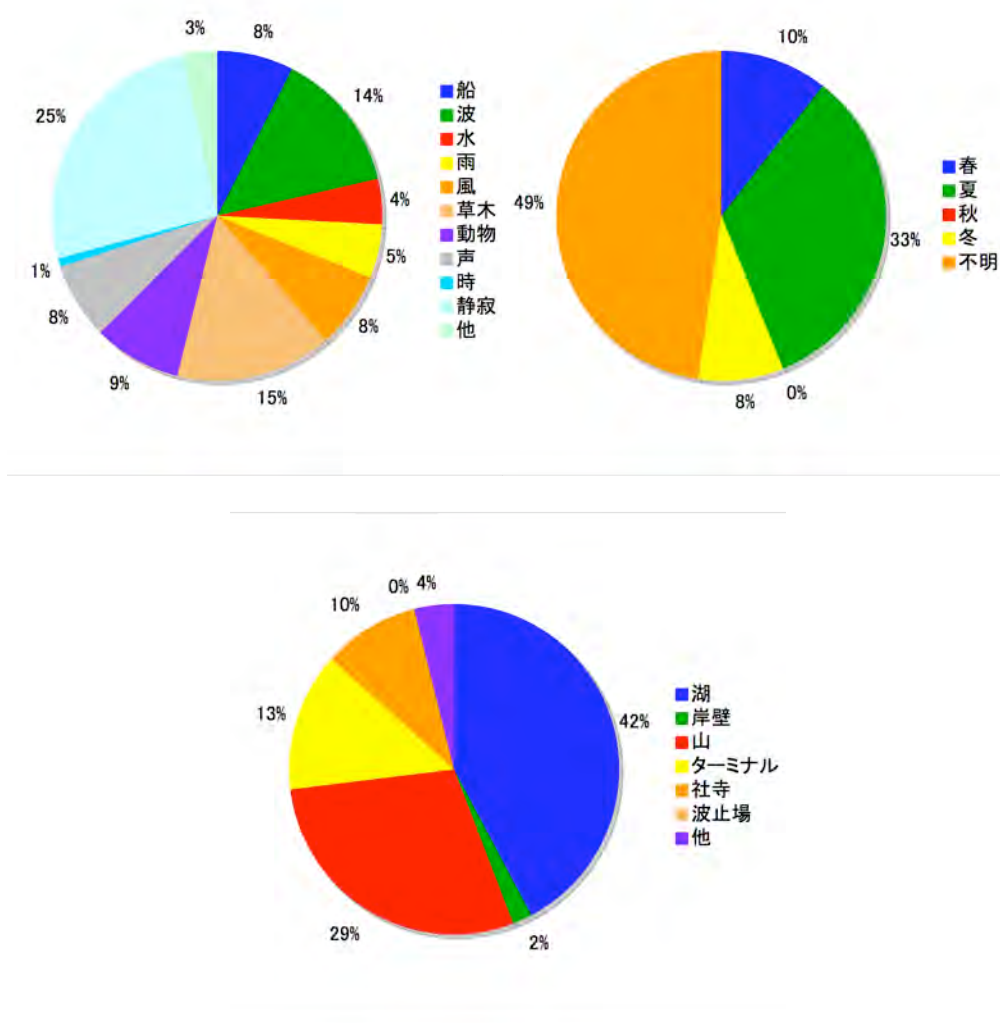


図 6-1 0 平成時代の抽出語句の各カテゴリの割合

図 6-1 0 は平成時代の記述のカテゴリである。やはり波, 森林, 静寂の音の割合が多い。「フェリーはバスン, バスンと派手にエンジン音を立てて, 竹生島に到着した。(西国三十三か所ガイジン珍札珍道中 2003)」や, 「ジェットエンジンの高速船が, (御詠歌の旅 1995)」など, 昭和に一部みられたエンジン音の記述が増えてきている。また, 「緑深き竹生島に 鵜の糞白し (やすらぎ 1996)」は, 近年問題となっている鵜の獣害が記述されている。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」西国・新西国観音霊場巡拝紀行

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明。場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」西国 33 ヶ所 巡拝

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明。場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「波静かな湖面に浮かぶ深緑の竹生島の島影や」西国 33 ヶ所 巡拝

「波」、「草木」、「静寂」に分類。季節は不明、場所は湖と山とした。琵琶湖八景色の一節を引用し、静かな湖に浮かぶ緑の島を評価している。

「深緑 竹生島の沈影」西国 33 ヶ所 巡拝

琵琶湖八景のひとつである。竹生島は「深緑」として評価されており、森林が竹生島にとって大きな要素だということがわかる。

琵琶湖八景は、琵琶湖の雄大さと変化に富んだ風景を広く紹介するため、1949年に選定された。「月明 彦根の古城（彦根城のこと）」、「涼風 雄松崎の白江」、「新雪 賤ヶ岳の大観」、「煙雨 比叡の樹林」、「深緑 竹生島の沈影」、「夕陽 瀬田・石山の清流」、「暁霧 海津大崎の岩礁」、「春色 安土・八幡の水郷」の8つである。

「草木」、「静寂」に分類、季節は不明、場所は山とした。

「絶壁の島岸や樹木の緑が鮮明になり、神を斎気祀る島という言葉が彷彿とさせる」西国三十三ヶ所めぐり

「樹木の緑」を「草木」に、「神を斎気祀る島」を「静寂」に分類。季節は不明。場所は湖、岸壁とした。屹立した岸壁や、その上に静かに佇む森林が、神格的な感覚を思い起こさせるのかもしれない。

「常緑樹に覆われ、その山肌に並ぶ伽藍や石段の」西国三十三ヶ所めぐり

「常緑樹」を「草木」に、その中に隠見する堂塔を「静寂」に分類。季節は不明。場所は山、社寺とした。静かな緑の中に佇む社寺は、竹生島の重要なサウンドスケープのようだ。

「月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して」西国三十三ヶ所めぐり

「波間に浮かぶ」との記述より波に分類をし、それより全体の記述により連想される静寂にも分類をした。季節は不明。場所は波間に浮かぶ、より湖とした。

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兔も波を走るかおもしろき島のけしきや」御詠歌の旅

波(水), 草木, 動物に分類. 「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「ジェットエンジンの高速船」御詠歌の旅

「船」に分類. 季節は春, 場所は湖である. 船旅は竹生島を訪れる人達にとって新鮮な経験のようである.

「春風駘蕩」御詠歌の旅

「風」, 「静寂」に分類. 季節は春, 場所は湖に分類とした. 春風駘蕩とは, 春風がそよそよとどこかに吹くさま, 穏やかでのんびりした人柄のたとえである.

「蟬の一念 鳴くばかりなり 島覆う」西国巡礼と俳句

「草木」, 「動物」に分類. 季節は夏, 場所は山である. 蟬の鳴き声が島を覆い尽くすという表現から, 夏の空気が伝わってくるようである.

「竹生島の 読経に合ふや 蟬の声」西国巡礼と俳句

「動物」, 「声」に分類. 季節は夏, 場所は社寺である. 読経の声と蟬の声がマッチしているという表現. 竹生島の蟬も経を読んでいるのだろうか.

「湖面には鵜と思われる鳥が気持ち良さそうに」西国巡礼と俳句

「水」, 「動物」に分類. 季節は夏, 場所は湖である. カワウの獣害に悩む竹生島だが, 巡礼者, 観光客には, のびのびと暮らす野鳥と写るのだろう.

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり, 月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」西国巡礼と俳句

波(水), 草木, 動物に分類. 「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「小雨まじりの 涼風起こる 宝巖寺」西国巡礼と俳句

「雨」, 「風」に分類. 季節は夏, 場所は社寺である. 雨風に清々しさを感じるのは, 巡礼という状況, 寺という場所が関係しているとも考えられる.

「緑深き竹生島に 鵜の糞白し」やすらぎ

「草木」, 「静寂」, 「動物」に分類. 季節は不明, 場所は山とした. 獣害を端的にあらわした句である. 緑と白のコントラストが見て取れるが, 鵜の糞により森林は枯死しつつある.

「天海の間 宝巖寺 朱く立つ」やすらぎ

「水」に分類. 季節は不明, 場所は湖, 社寺とした. 「天海の間」という表現に, 神格性を感じ

る。

「風光に恵まれた湖上をほどよい船の旅」西国三十三ヶ所巡り

「船」,「風」に分類. 季節は不明, 場所は湖である. 船旅は, 竹生島を訪れるという感覚を一層実感させてくれるものなのかもしれない.

「今津港で船を待っていると,, 島に弁当はないよ!」西国三十三ヶ所巡り

「声」に分類. 季節は不明, 場所はターミナルである. 島には軽食があるのみで, 大がかりな食事は難しい. 島を取り巻く人達は, 観光客・巡礼者達を気遣っている.

「深緑 竹生島の沈影」西国三十三ヶ所巡り

「草木」,「静寂」に分類, 季節は不明, 場所は山とした.

「緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり, 月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや」西国巡礼

波(水), 草木, 動物に分類. 「緑樹影沈んで」という語句を静寂に, 謡曲の中での季節は春のため季節を春に, 場所は湖上のため湖と分類した.

「ひたひたとよせるさざ波の」西国巡礼

「さざ波」より「波」, 連想される「静寂」に分類した. 季節は不明である. 場所は著者白州正子が勧める海津の浜辺からの景色のため, その他とした.

「物音ひとつしない浜辺に立って」西国巡礼

「物音ひとつしない浜辺」より「静寂」に分類した. 季節は不明である. 場所は著者白州正子が勧める海津の浜辺からの景色のため, その他とした.

「大琵琶に降る雪積もる竹生島」句集 竹生島

「雨」,「静寂」に分類. 季節は冬, 場所は山とした.

「天守より見る白雪の竹生島」句集 竹生島

「雨」,「静寂」に分類. 季節は冬, 場所は山とした.

「降りしきる雪に見えざる竹生島」句集 竹生島

「雨」,「静寂」に分類. 季節は冬, 場所は山とした.

「大琵琶の豊かな水に人泳ぐ」句集 竹生島

「水」,「声」に分類. 季節は夏, 場所は湖である.

「大琵琶の中に神島緑なす」句集 竹生島

「草木」，「静寂」に分類, 季節は不明, 場所は山とした.

「月照らす大琵琶の水真平ら」句集 竹生島

「水」，「静寂」に分類. 季節は不明, 場所は湖とした.

「琵琶湖周航の歌が流れ」古寺巡礼ひとりある記

「船」，「声」に分類. 季節は夏, 場所は湖とした.

「自然林に覆われている」古寺巡礼ひとりある記

「草木」，「夏」，「山」に分類した.

「海上波穏やか」古寺巡礼ひとりある記

「波」，「静寂」，「夏」，「湖」に分類した.

「稲妻ショーはなかなか見もので さながら花火大会のようだ」西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中

「雨」，「夏」，「ターミナル」に分類した. 外国人には, 落雷も花火に感じられるのだろうか.

「われわれを見てすっとんきょうな声をあげた」西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中

「声」，「夏」，「ターミナル」に分類した. 外国人の巡礼は珍しいようだ.

「派手にエンジンを吹かして走り去った」西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中

「エンジン」を「船」に, 季節は夏, 場所はターミナルとした

「風が強くなり, その風にあおられて, すぐしたの浜辺で白波が立った」西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中

「波」，「風」，「夏」，「ターミナル」に分類.

「フェリーはバスン, バスンと派手にエンジン音を立てて, 竹生島に到着した」西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中

「エンジン」を「船」に, 季節は夏, 場所はターミナルとした. 派手なエンジン音は, 竹生島にとって異質な印象を受けなくもないようだ.

「フェリーターミナルで拡声器で」西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中

「声」，「夏」，「ターミナル」に分類.

「フェリーのデッキで風にあたりながら,,, またしても話し合った」西国三十三か所ガ

イジン珍礼珍道中

「風」,「声」,「夏」,「湖」に分類. フェリーは巡礼前後でよい話し合いの場となるようだ.

「北西の風が吹き,特に三月は危険」西国巡礼の旅

「風」,「冬」,「湖」に分類した. 比良おろしの描写である.

「南のわずかな波打ち際にのみ,,そこへ,,高速船が」西国観音霊場・新紀行

「船」,「波」に分類,季節は不明,場所は寺社からの眺めのため,「寺社」とした.

「夏の竹生島は,いつ参拝しても湖面をわたってくる風があって,心地よい」西国観音霊場・新紀行

「風」に分類. 季節は夏,場所は湖,山とした.

「三井の晩鐘 音絶えて なにすすり泣く浜千鳥」西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り

琵琶湖哀歌の一節であり「遠くかすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島」の続きである. 三井寺の晩鐘の音もやみ,訪れる静寂の中に響く浜千鳥の声が映し出されている. 「波」,「動物」,「静寂」に分類. 季節は不明である. 三井寺(大津市)の晩鐘の音は竹生島では聞こえないと思われるが,「三井寺の晩鐘も消える時間帯」と解釈し,場所は竹生島と考えて,山とした.

「遠くかすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島」西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り

琵琶湖哀歌の一節である. 彦根城を遠くに眺めながら,「波に暮れる」という表現で日没を表している. 「波」,「静寂」に分類した. 季節は不明である. 場所は「波に暮れる」という表現から湖とした.

「常緑樹に覆われ」西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り

「草木」,「静寂」に分類. 季節は不明,場所は山とした.

「青い波間にぼんやりと見とれたり,快いエンジン音に身を任せ」西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り

「船」,「波」に分類. 季節は不明,場所は湖とした. エンジン音も現代の人にとっては心地良いものようだ.

「しっとりとした墨絵のような風景のなか,鬱蒼と繁る樹林の深い緑に包まれて」西国三十三ヶ所を歩く

「草木」,「静寂」に分類. 季節は不明,場所は山である. 「墨絵のような風景」に竹生島の素朴さを感じることができる. 鬱蒼とした森林は竹生島ならではの.

6 - 5 「音×季節」, 「音×場所」のクロス集計

前節までの, 時代別の音のカテゴリ比率に加え, 竹生島で評価されてきた音と季節, 場所の組み合わせを明らかにするために音と季節, 場所の関係をアイテムにクロス集計を行った.

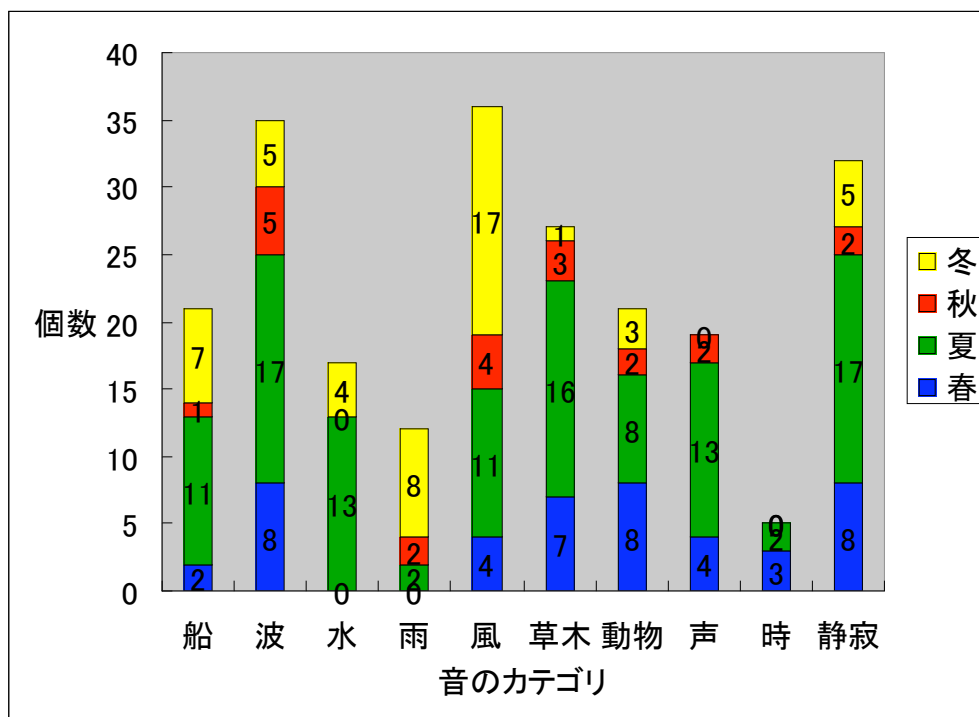


図6 - 11 各音における季節の割合(個)

上の図は各音カテゴリにおける季節の割合である. 春と夏で半数以上を占め, 穏やかな季節の評価が高いことがわかる. 秋や冬では, 降り積もる雪の記述や, 荒れる波風の記述が多い.

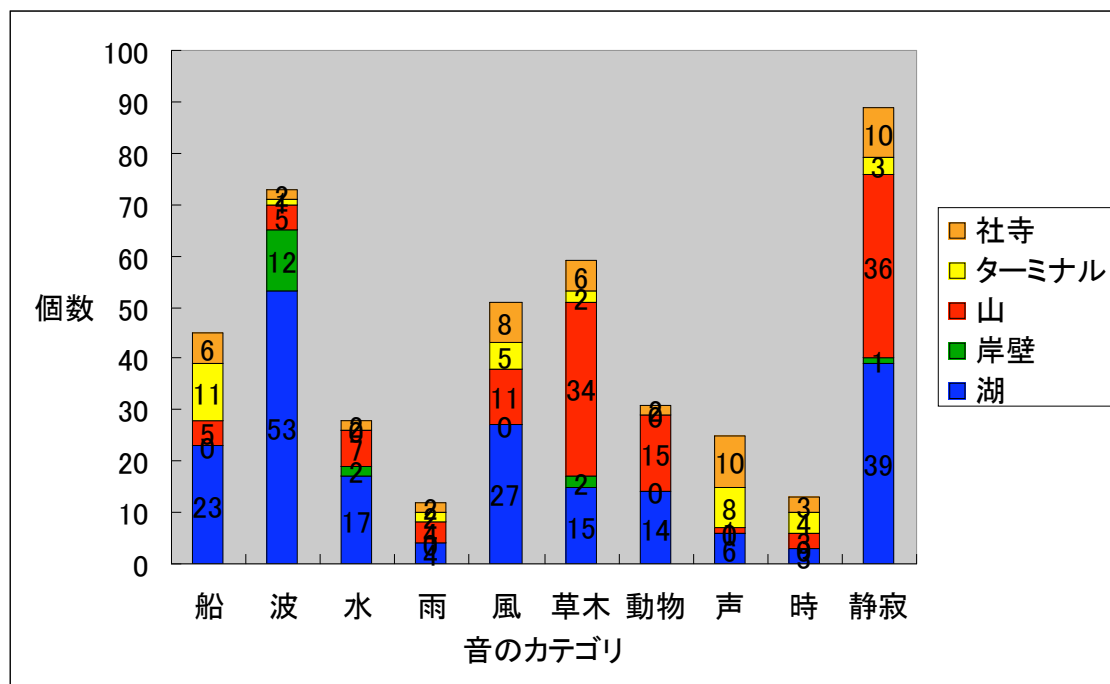


図 6－1 2 各音における場所の割合

上の図は各音カテゴリにおける場所の割合である。「湖」と「山」という大きな2つの要素がみてとれる。社寺やターミナルの記述は全体からみると極めて少なく、「湖」と「山」という竹生島を構成する自然に高い評価をしているようだ。

以下に時代毎の比率を記載しておく。

6 - 5 - 1 江戸時代まで

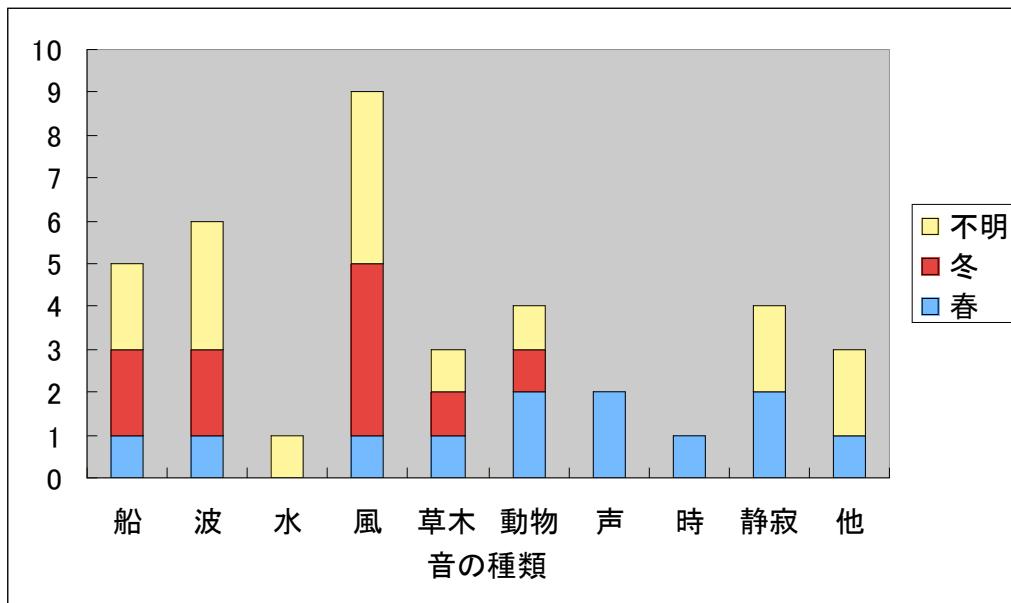


図 6 - 1 3 江戸時代までの各音における季節の内訳(個)

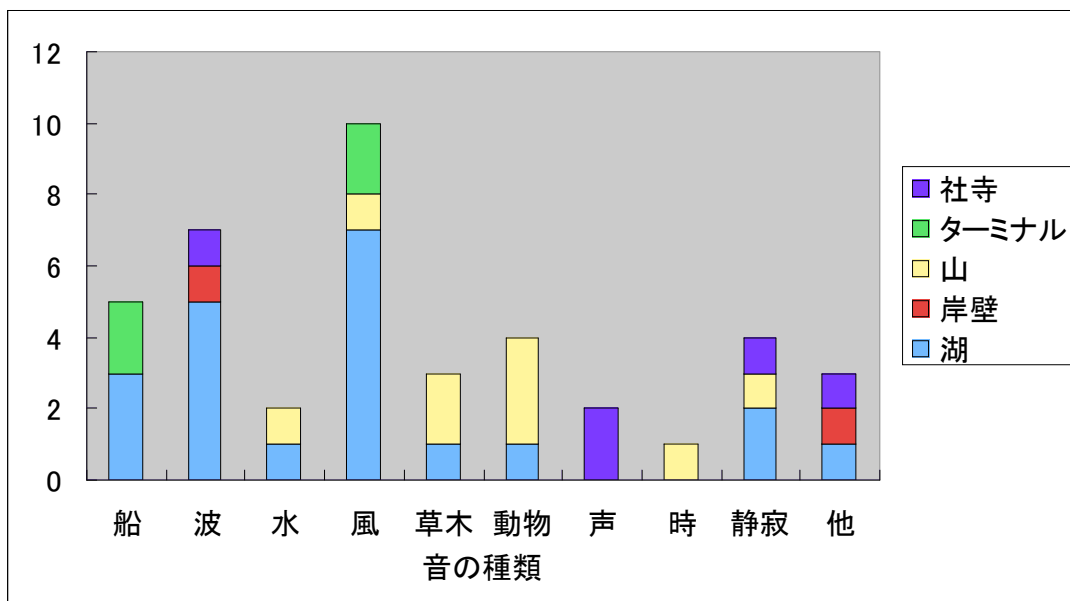


図 6 - 1 4 江戸時代までの各音における場所の内訳(個)

6 - 5 - 2 大正時代

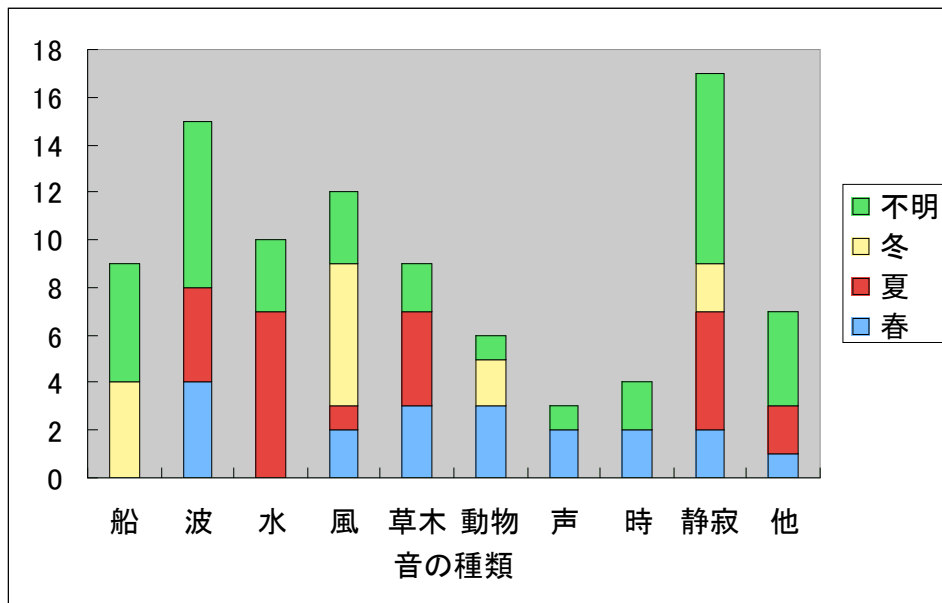


図 6 - 1 5 大正時代の各音における季節の内訳(個)

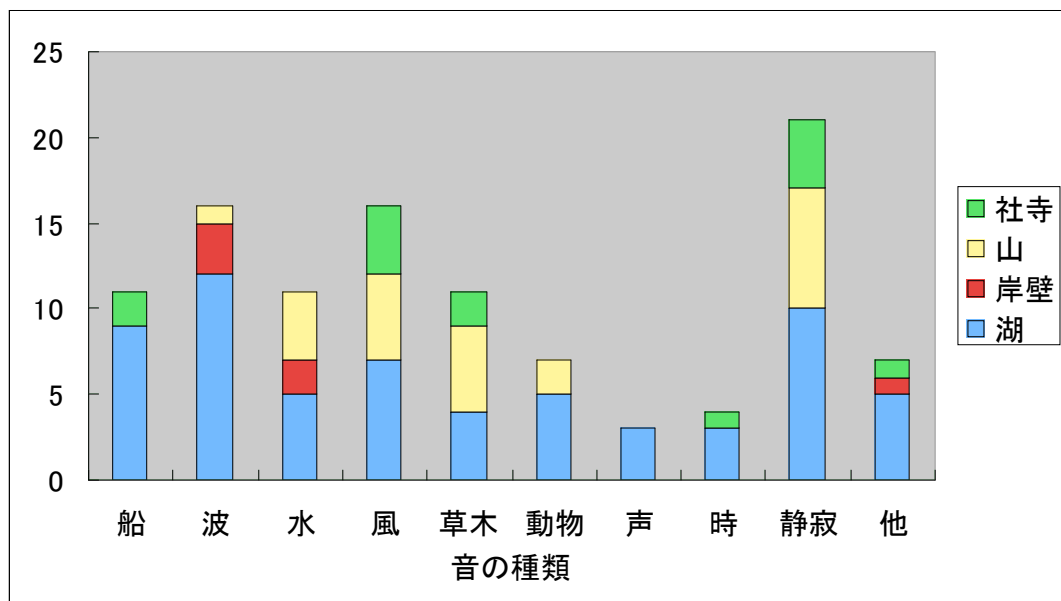


図 6 - 1 6 大正時代の各音における場所の内訳(個)

6 - 5 - 3 昭和時代1

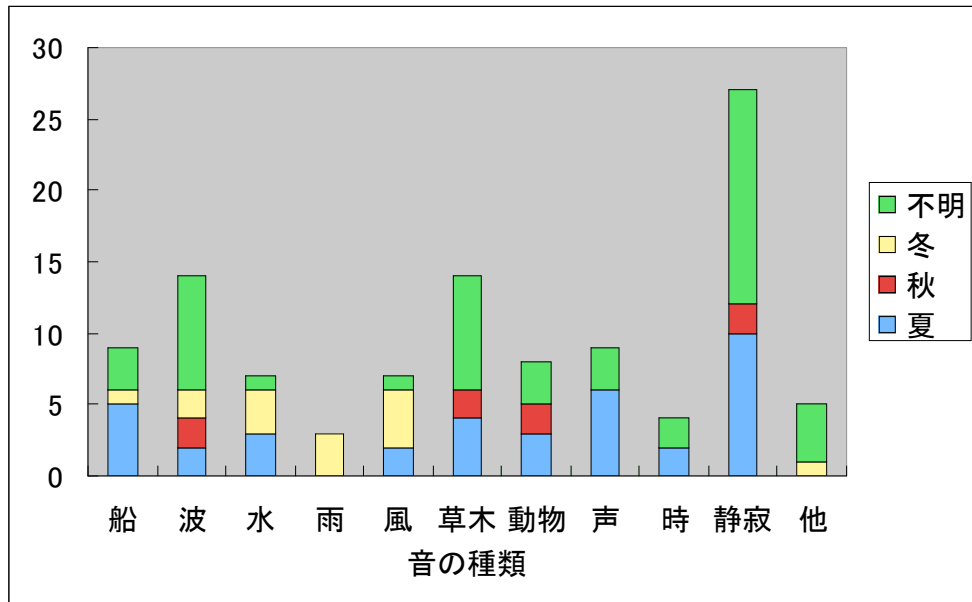


図 6 - 1 7 昭和時代1の各音における季節の内訳(個)

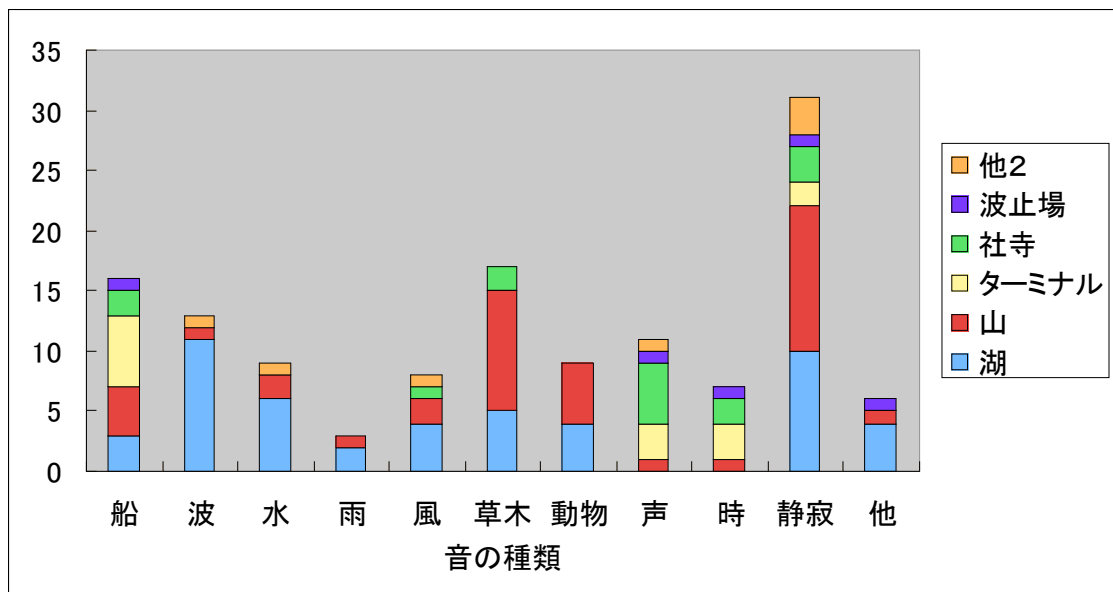


図 6 - 1 8 昭和時代1の各音における場所の内訳(個)

6 - 5 - 4 昭和時代2

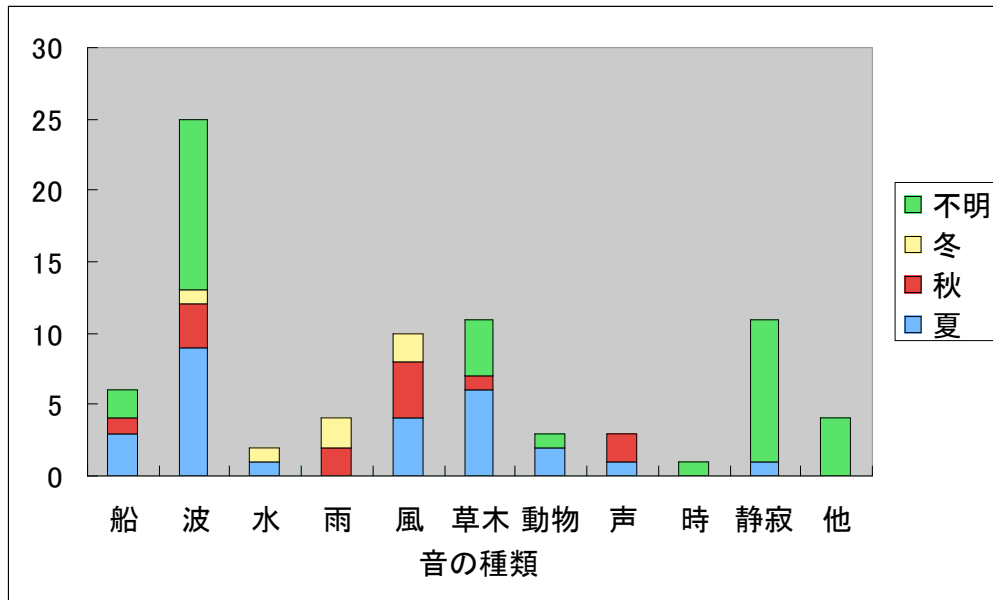


図6-19 昭和時代2の各音における季節の内訳(個)

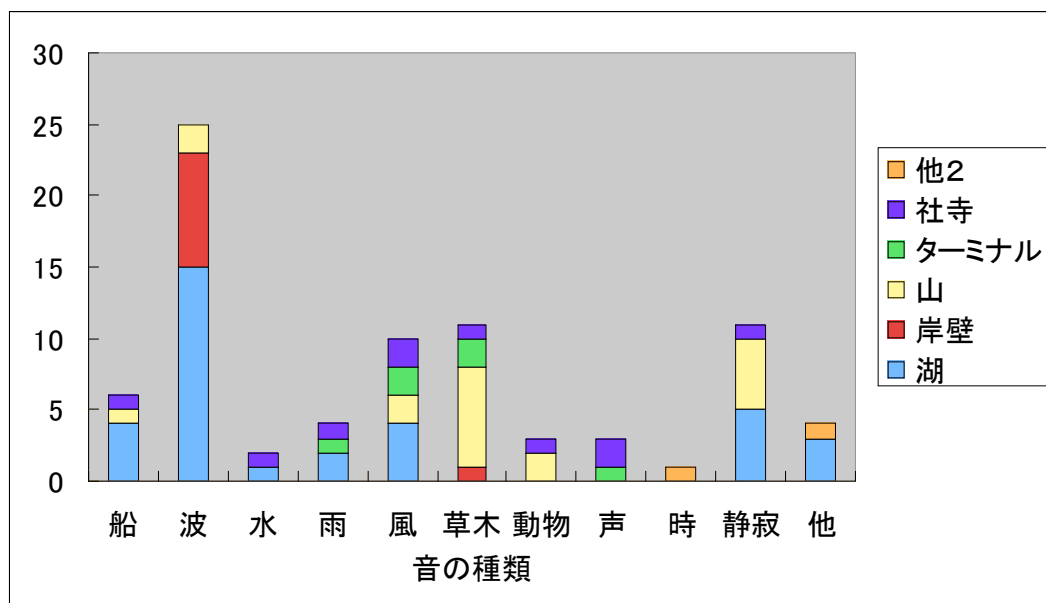


図6-20 昭和時代2の各音における場所の内訳(個)

6 - 5 - 5 平成時代

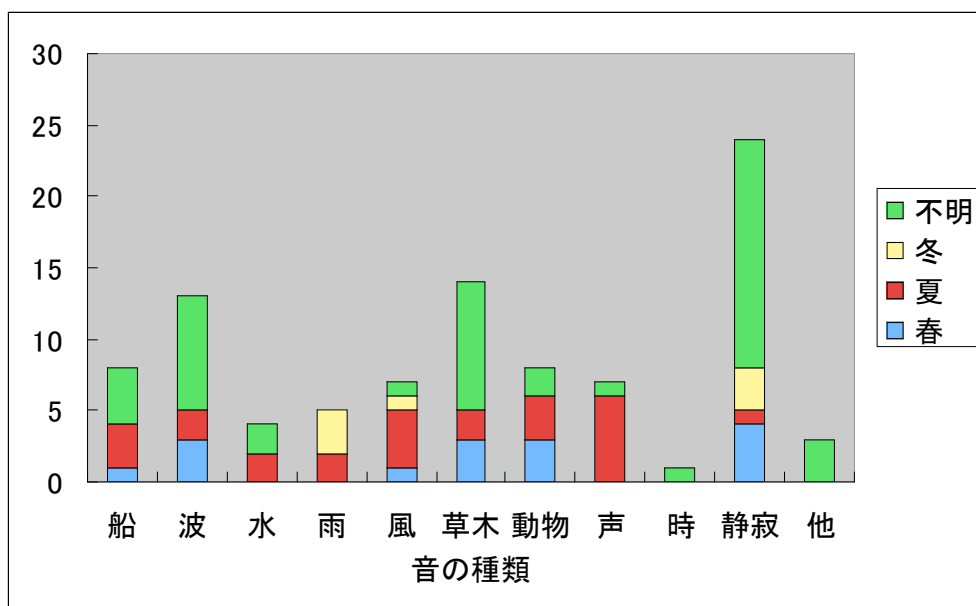


図 6 - 2 1 平成時代の各音における季節の内訳(個)

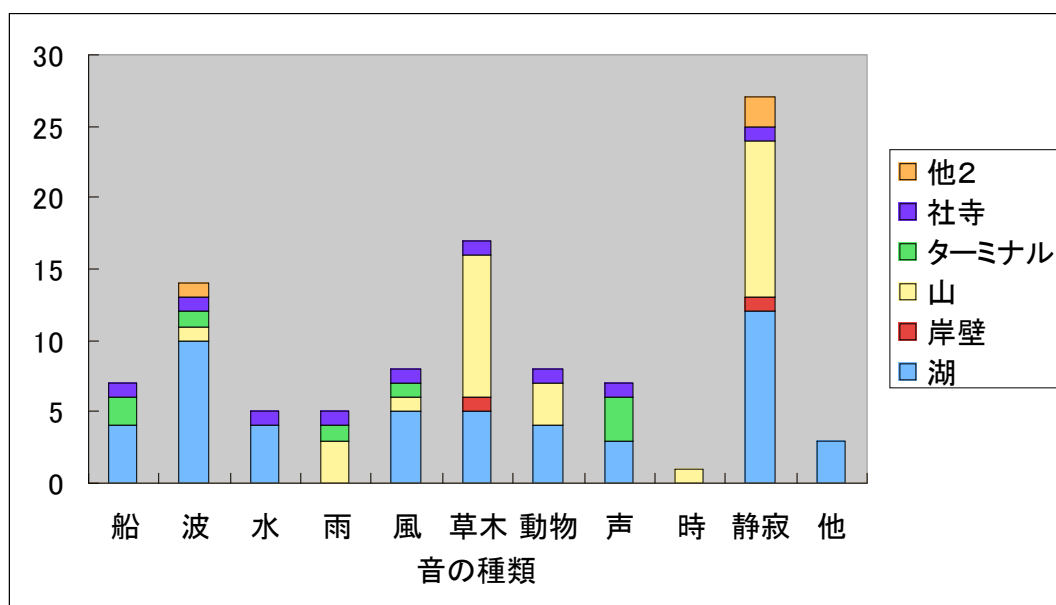


図 6 - 2 2 平成時代の各音における場所の内訳(個)

6 - 5 - 6 音と季節,場所からみる時代変遷

本節ではこれまでの分析より考えられるサウンドスケープの時代変遷をまとめる。

江戸時代以前において竹生島で評価の高かった音の要素は、「船」の音(13%)と「波」の音(15%),そして「風」の音(23%)と「静寂」(11%)であり,季節は「春」(24%)と「冬」(38%)という対照的な季節の評価が高いという結果となった.場所では,「湖上」(47%)が大多数を占め,次いで「山」(22%),「社寺」(13%)と続いている。

大正時代に入ると,「船」の音(10%),「波」の音(16%),「風」の音(13%),「静寂」(18%)という江戸時代以前において評価が高かった音に加え,「水」の音(11%),「草木」の音(10%)の評価が高くなってくる.季節は「春」(14%)と「冬」(17%)を「夏」(26%)が上回っている.場所は「湖上」(50%)に加え,「山」(26%),「社寺」(17%)の評価が依然高い。

昭和時代1では,「波」(12%),「草木」(13%),「静寂」(25%)の要素が大きな割合を占めるようになり,季節は夏(38%)が大多数である.場所はこれまで評価の高かった「湖」(33%)に加え,「山」(32%)が同等の評価を受けるようになる.また,ターミナル(14%)や社寺(14%)の評価が高まってくる。

昭和時代2になると「波」(30%),「風」(13%),「草木」(13%),「静寂」(14%)という4つの要素が高評価となる.季節は特定可能なものの中では「夏」(39%)が多く,次いで「秋」(16%),「冬」(7%)が少数続く.場所は「湖上」(38%)が多く,次いで「山」(20%)が多いが山は昭和1に比べ,若干の減少傾向がみられる。

平成になると,「波」(14%),「草木」(15%),「静寂」(25%)の3要素の評価が高く,「船」(8%),「声」(9%),「動物」(9%)の3要素が続く.季節は「冬」(8%)が減少し,「春」(10%),「夏」(33%)が多くを占めるようになる.穏やかな季節のほうが渡航・巡礼には都合が良いのだろう.場所は「湖上」(42%)が多数である。「山」部分も,増加(29%)し,「湖」と「山」という大きな二つの要素がみてとれる.ターミナル(13%),社寺(10%)の評価も高まる。

全体としては「静寂」,「草木」,「波」,「船」,「風」の音の評価が高く,場所は「湖上」,「山」という大きな2要素の評価が高い。

6 - 6 音とその音が聞かれた状況の関係の時代変遷を明らかにするための,音,季節,場所をアイテムとした数量化理論第Ⅲ類分析

6 - 4で分類したデータを基に,今節では音と音が聞かれた季節,場所の関係を包括的に捉えるために,数量化Ⅲ類による分析を試みた.これにより,カテゴリ同士の相関関係を座標平面上で表すことができる。

以下に示す座標平面上で,カテゴリ間の関係を検討していく。

6 - 6 - 1 巡礼記から抽出した語句を用いての数量化理論Ⅲ類分析

以下に, 巡礼記から抽出した語句を用いて行った数量化理論Ⅲ類分析においての, 各カテゴリの布置を示す. 空間上, 近くに布置するカテゴリほど密接な関係がある. 数量化Ⅲ類の固有値とカテゴリースコアを示す.

表 6 - 1 1 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係の固有値

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第 1 軸	0.5381	12.84%	12.84%	0.7336
第 2 軸	0.4851	11.58%	24.42%	0.6965
第 3 軸	0.4428	10.57%	34.99%	0.6655

表 6 - 1 2 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係のカテゴリースコア

カテゴリ	第 1 軸	カテゴリ	第 2 軸	カテゴリ	第 3 軸
草木	-1.2666	時	-1.3590	岸壁	-2.6432
山	-1.0275	山	-1.2849	声	-1.3594
静寂	-0.9339	草木	-1.0800	時	-1.3217
動物	-0.9112	社寺	-0.9477	夏	-1.0085
岸壁	-0.5345	動物	-0.7947	草木	-0.6571
波	-0.4017	声	-0.7458	社寺	-0.6364
水	-0.3655	ターミナル	-0.5750	ターミナル	-0.6304
湖	-0.1244	春	-0.5472	動物	-0.4203
春	-0.0981	静寂	-0.3363	春	-0.3611
冬	0.2017	雨	-0.1288	静寂	-0.1941
秋	0.4465	風	0.0105	波	-0.1824
夏	0.5498	冬	0.1582	山	-0.0693
風	0.6377	夏	0.1810	水	0.1515
雨	0.6629	船	0.3196	秋	0.4439
社寺	1.0685	水	0.3220	船	0.5916
船	1.1467	湖	0.6599	湖	0.6985
時	1.9910	秋	0.7876	風	1.5908
声	2.4130	波	1.4175	雨	2.5951
ターミナル	2.5865	岸壁	4.2836	冬	2.6131

この表から, 軸の解釈を行なう. 第 1 軸では, プラス方向に大きく「船」, 「ターミナル」, 「社寺」等のデータが傾いており, マイナス方向に「岸壁」, 「静寂」, 「草木」といった項目があがっている. 「自然空間—人工空間」の軸とした. 第 2 軸では, プラス方向に「湖」, 「波」などの項

目が挙がっているのに対し、マイナス方向では「山」、「草木」などの記述がある項目が挙がっており、「山空間—湖空間」の軸とした第3軸では、マイナス方向に「声」、「夏」、「草木」、「動物」など明るいイメージを持つ項目が関する項目が挙がっているのに対し、プラス方向では「静寂」、「雨」、「冬」など暗いイメージの項目が占めている。そのことより「明るいイメージ—暗いイメージ」の軸とする。

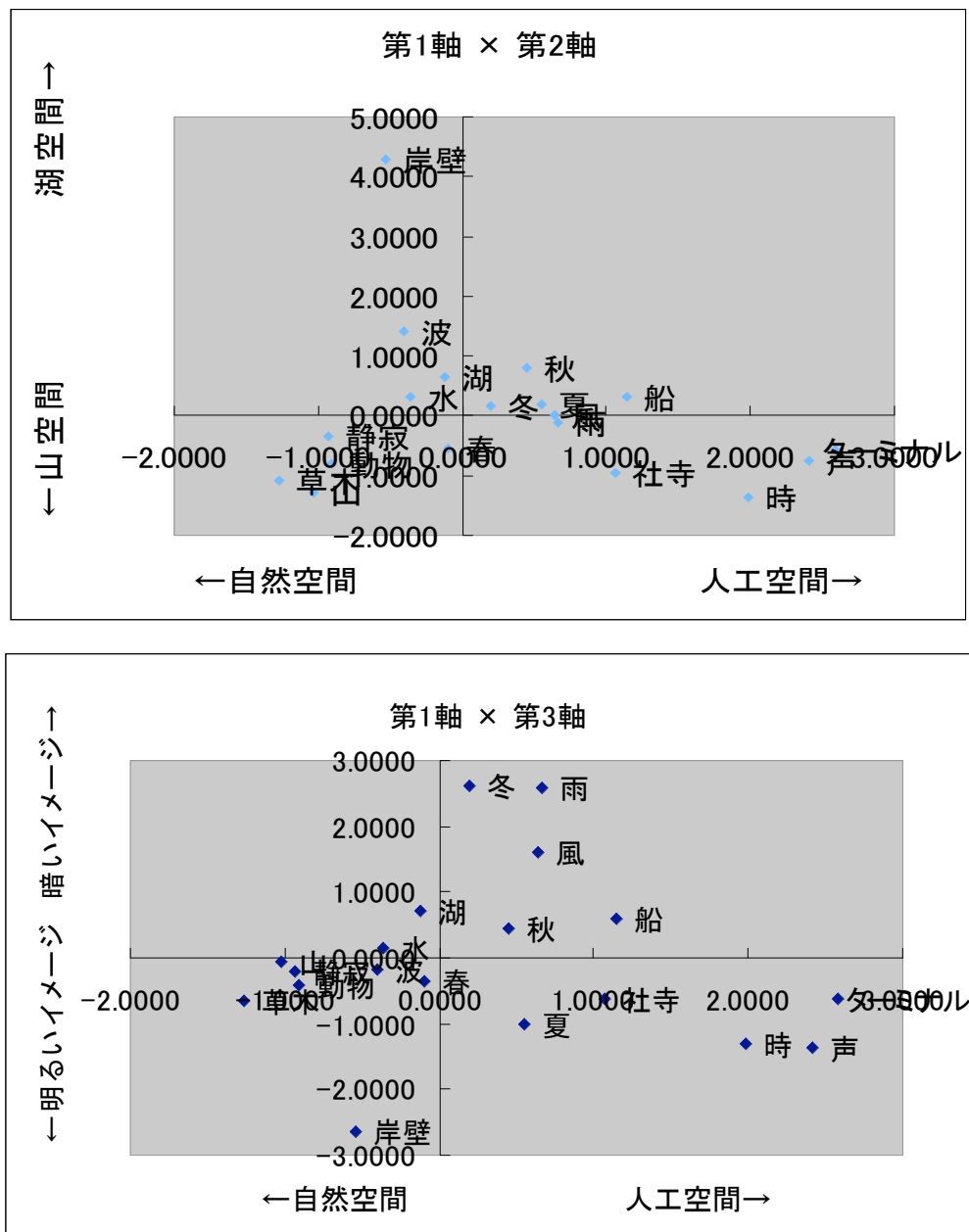


図6-23 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係

この平面において、「声」と「ターミナル」、「社寺」、「岸壁」は単独で位置する傾向にあり、他の環境要素と関係が少なく、独自のサウンドスケープを形成していることを示している。対照的に「風」と「雨」や、「草木」と「山」、そして「波」と「水」のカテゴリ間は距離が近

く、お互いに関係性の強いサウンドスケープであるといえる。

季節カテゴリは、いびつではあるが反時計回りに季節の移り変わり(春→夏→秋→冬)と対応した布置をしている。そして、「雨」や「風」の音が冬に、「社寺」や「声」の音が夏に評価されることが多いことを反映して、これらの音の布置は、原点から各季節カテゴリを結ぶ方向の延長線上にある。

以下に時代ごとの、抽出語句の布置を示す。

6 - 6 - 2 カテゴリの布置の時代変遷

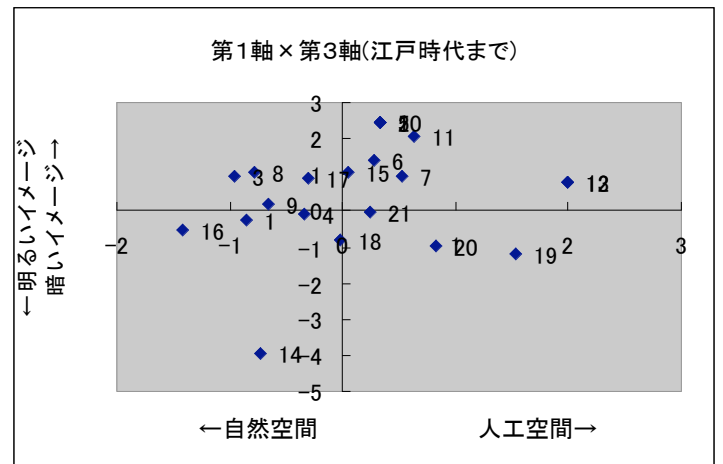
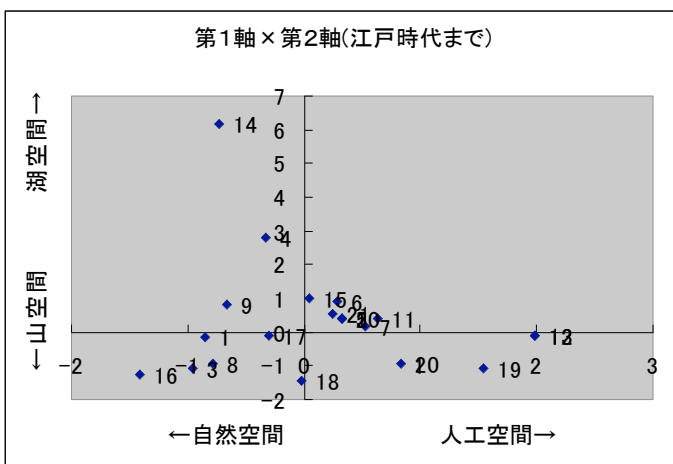


図6-24 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(江戸時代まで)

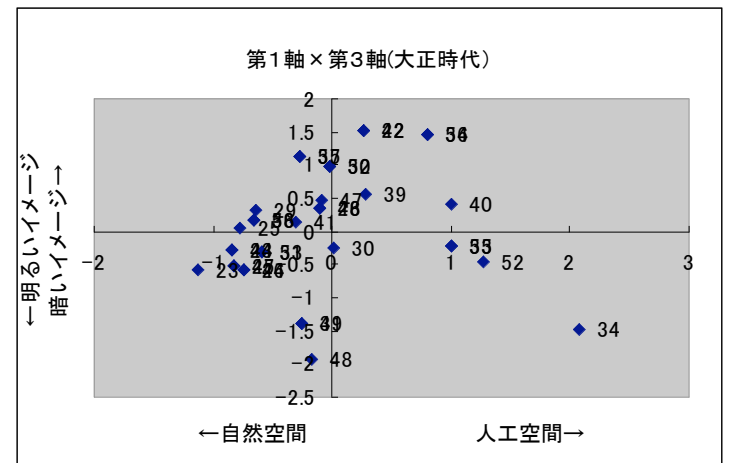
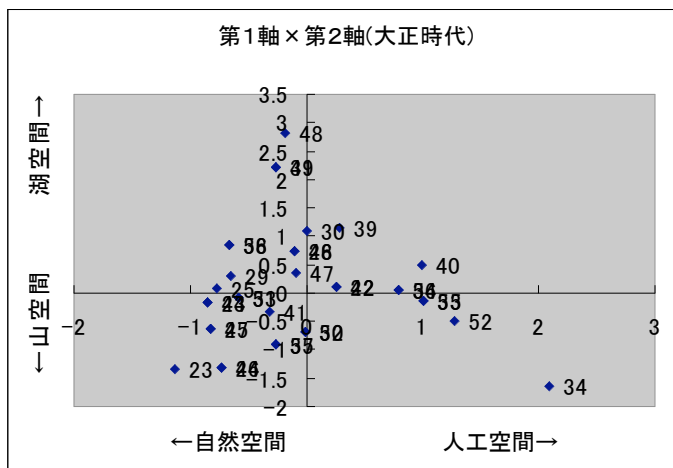


図6-25 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(大正時代)

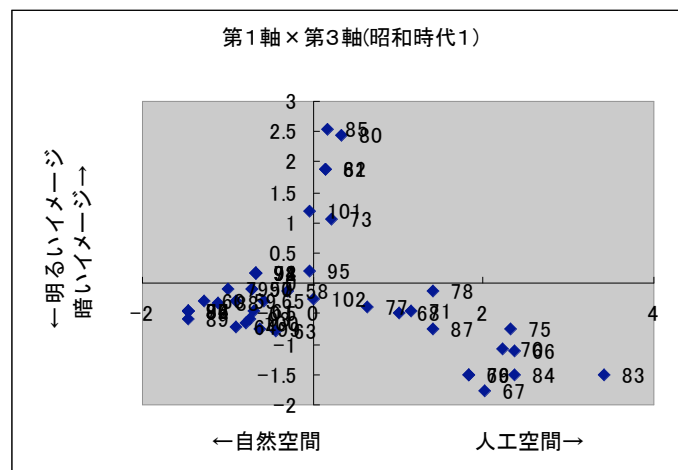
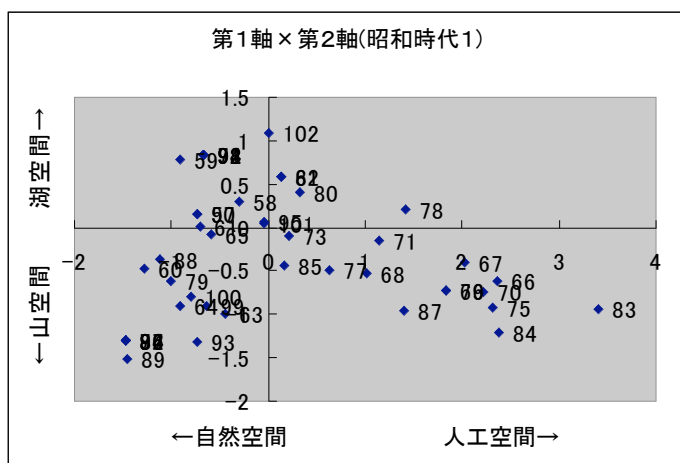


図6-26 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(昭和時代1)

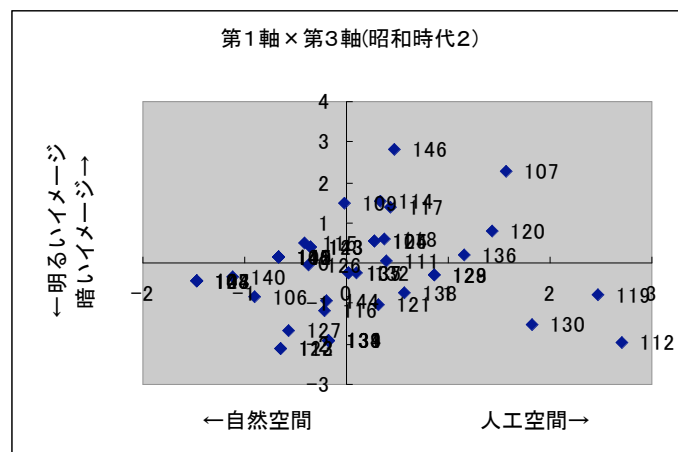
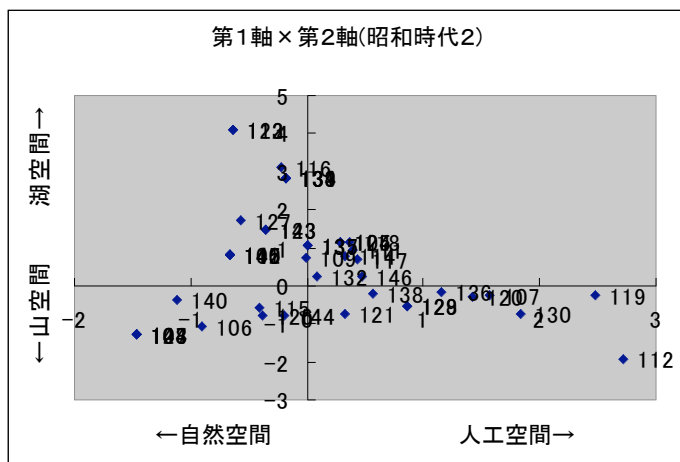


図6-27 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(昭和時代2)

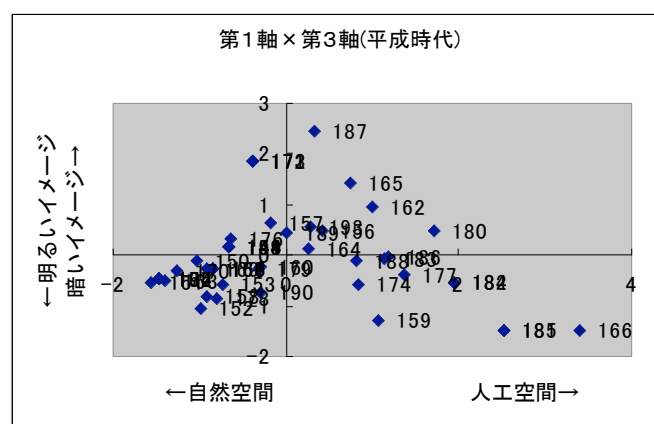
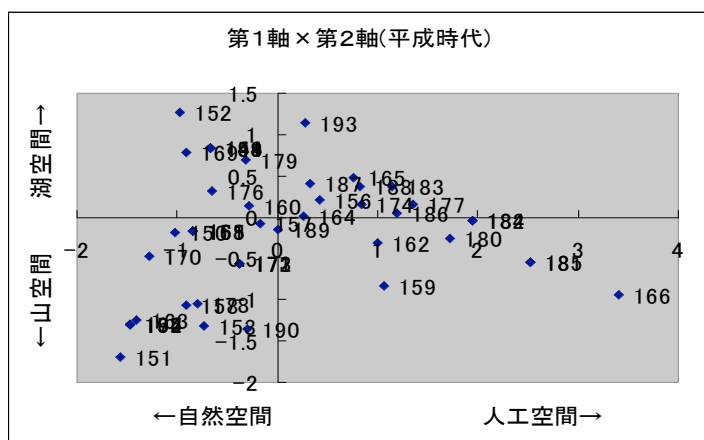


図6-28 巡礼記に記された音, 季節, 場所の関係(平成時代)

布置の時代変遷をみると、「自然空間—人口空間」軸での評価に大きな変化は無く、島の自然と、建造物双方が幅広く評価されていることがいえる。

「山—湖」軸では時代とともに山から湖に推移する傾向が見て取れる。しかし山空間の評価が大きく減少しているということではなく、湖空間の評価が高くなってきた、とみるべきだろう。雄大な琵琶湖中をいく船旅は、大きな印象を与えるのかもしれない。

「明るいイメージ—暗いイメージ」軸では、時代とともに暗いイメージから明るいイメージに推移している。この軸のプラス方向には「波」、「湖」、「雨」、「冬」など畏怖の対象として捉えられていた要素が多く、過去 of 自然への神格性の表れがみてとれる。時代の流れとともに、軸のマイナス方向へ推移しているということは、このような自然への畏怖や崇拜の念が薄れ、「夏」や「声」「草木」にみられるような、明るいイメージを島に持つようになったのではないだろうか。

【参考文献および脚注】

1) 峯覚雄, 2007-11-01, ヒアリング

7 - 1 緒言

本研究の目的は、竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにすることであった。第四章では西国三十三箇所巡礼の巡礼記をテキストとして、そこから竹生島で評価されてきたサウンドスケープを分析した結果明らかになったことを記す。

7 - 2 竹生島の伝統的な音風景の捉え方のまとめ

表7-1に竹生島のサウンドスケープについて筆者が感じたイメージ、明らかになったことを列挙する。カテゴリ毎に、音に対する感情やイメージがみてとれた。

表7-1 各音カテゴリが象徴していると思われるイメージ

時代区分	カテゴリ	イメージ	備考
江戸時代まで	船	小舟	自然への恐怖 自然の美しさ
	波	静寂 きびしさ 虚ろい	
	水		
	雨		
	風	烈風 坂風 比良風	
	草木	静寂 樹林	
	動物	鳶 白鳥	
	声		
	時		
	静寂		
	他	楽器 岩崩れ 地裂け	
大正時代	船	帆 汽船	
	波	琴弦 心地よさ おそろしさ	
	水	清々しさ	
	雨		
	風	恐ろしさ 嶺風 戦慄 静寂	
	草木	繁茂 水に反射した深緑	
	動物		
	声		
	時	弁財天	
	静寂		
	他		
昭和時代 1	船	汽笛 錨	琵琶湖哀歌 琵琶湖八景

	波	秋から冬にかけての荒れよう	
	水	真青 静寂 清々しさ	
	雨		
	風	比良嵐 比良八荒 清々しさ 美しい風光	
	草木	しずもる 静寂 老木	
	動物	鷺 カワウの奇声	
	声	寄港時の喧噪 呼び込み声	
	時	出港 乗船の合図	
	静寂		
	他		
昭和時代 2	船	快速船	琵琶湖哀歌 琵琶湖八景
	波	航跡 大波 砕ける波への恐怖 夕波	
	水		
	雨	雪に埋もれる竹生島 嵐	
	風	比良嵐 吹き荒れる 涼風	
	草木	茂り 覆われ 老木	
	動物	夏場の蝉 鳶	
	声	アナウンス 帰船の合図	
	時		
	静寂		
	他		
平成時代	船	高速船 エンジン音	琵琶湖八景色 神格性低下
	波	穏やかさ ひたひたと寄す	
	水		
	雨	雷	
	風	春風駘蕩 涼風	
	草木	湖面に浮かぶ深緑 自然林	
	動物	蝉 カワウ	
	声	拡声器 喧噪	
	時		
	静寂	静かな浜辺	
	他		

以下に時代毎の変遷を記す。

7 - 2 - 1 江戸時代まで

江戸時代以前において竹生島で評価の高かった音の要素は、「船」の音(13%)と「波」の音(15%),そして「風」の音(23%)と「静寂」(11%)であり,季節は「春」(24%)と「冬」(38%)という対照的な季節の評価が高いという結果となった.場所では,「湖上」(47%)が大多数を占め,次いで「山」(22%),「社寺」(13%)と続いている.

7 - 2 - 2 大正時代

大正時代に入ると,「船」の音(10%),「波」の音(16%),「風」の音(13%),「静寂」(18%)という江戸時代以前において評価が高かった音に加え,「水」の音(11%),「草木」の音(10%)の評価が高くなってくる.季節は「春」(14%)と「冬」(17%)を「夏」(26%)が上回っている.場所は「湖上」(50%)に加え,「山」(26%),「社寺」(17%)の評価が依然高い.

7 - 2 - 3 昭和時代1

昭和時代1では,「波」(12%),「草木」(13%),「静寂」(25%)の要素が大きな割合を占めるようになり,季節は夏(38%)が大多数である.場所はこれまで評価の高かった「湖」(33%)に加え,「山」(32%)が同等の評価を受けるようになる.また,ターミナル(14%)や社寺(14%)の評価が高まってくる.

7 - 2 - 4 昭和時代2

昭和時代2になると「波」(30%),「風」(13%),「草木」(13%),「静寂」(14%)という4つの要素が高評価となる.季節は特定可能なものの中では「夏」(39%)が多く,次いで「秋」(16%),「冬」(7%)が少数続く.場所は「湖上」(38%)が多く,次いで「山」(20%)が多いが山は昭和1に比べ,若干の減少傾向がみられる.

7 - 2 - 5 平成時代

平成になると,「波」(14%),「草木」(15%),「静寂」(25%)の3要素の評価が高く,「船」(8%),「声」(9%),「動物」(9%)の3要素が続く.季節は「冬」(8%)が減少し,「春」(10%),「夏」(33%)が多くを占めるようになる.穏やかな季節のほうが渡航・巡礼には都合が良いのだろう.場所は「湖上」(42%)が多数である.「山」部分も,増加(29%)し,「湖」と「山」という大きな二つの要素がみてとれる.ターミナル(13%),社寺(10%)の評価も高まる.

7 - 2 - 6 音, 季節, 場所の関係

竹生島で評価されてきたサウンドスケープにおいて,「声」と「ターミナル」,「社寺」,「岸壁」は他の環境要素と関係が少なく,独自のサウンドスケープを形成している.対照的に「風」と「雨」や,「草木」と「山」,そして「波」と「水」のカテゴリはお互いに関係性の強いサウンドスケープであるといえる.

7 - 2 - 7 サウンドスケープの捉え方の変遷

竹生島を「山」や「湖」といった自然空間と、「社寺」、「ターミナル」等の人口空間に分類した場合、自然空間の評価が高い。しかし評価が大きく偏ることは無く、島の自然と、建造物の双方が幅広く評価されていることがいえる。

竹生島を「山」空間と「湖」空間という要素に分類した場合、時代とともに「山」から「湖」を評価する傾向が見て取れる。しかし「山」空間の評価が大きく減少しているということではなく、「湖」空間の評価が高くなってきた、とみるべきだろう。

島に抱くイメージでは、時代とともに暗いイメージから明るいイメージを持つようになっていく傾向がみられ、現代では、過去に「波」、「湖」、「雨」、「冬」などの要素が持っていた自然への畏怖や崇拜といった感覚が薄れ、「夏」や「声」「草木」にみられるような、明るいイメージを島に持つようになってきていると思われる。

結果として、竹生島の環境は大きく変化しておらず、それを評価する人々の意思が変化してきていると考えられる。山から湖へ、そして暗く悲観的なイメージから、明るく楽観的なイメージへと評価が移ってきたことが、竹生島におけるサウンドスケープの変遷として明らかになったといえる。このような変遷の背景には、技術の進歩によって渡航が容易になったことや、近年の観光化による影響も大きいと考える。

以上のようなことが竹生島で評価されてきたサウンドスケープとして、「巡礼記」において見出すことができた。加えて、竹生島を構成するサウンドスケープの「基調音」、「信号音」、「標識音」についての筆者の見解を以下に述べる。

「基調音」(基盤をなす音)

「波」、「風」、「草木」、「静寂」といった自然の音。これらは竹生島そのものといっても良い。

「信号音」(意識的に聴かれる音)

「船」の汽笛、「鳥」の鳴き声、「発電機」の音。

「標識音」(尊重され、注意されるような性質をもった共同体の音)

「波」の静寂さ、荒々しさ、「風」の清々しさ、比良嵐などの烈風、繁茂する森林の鬱蒼とした様子、静寂といった、様々な表情を見せる自然が竹生島の標識音であると言える。

7 - 3 巡礼地としての特性

本研究では竹生島を対象としてサウンドスケープを追ってきたが、「波の音」と「山の静寂の音」が竹生島で評価されてきたサウンドスケープであることが明らかとなった。これは水神である弁財天を祀る竹生島の特性がよく出た結果だと言える。また、サウンドスケープを構成する要素に大きな変化がないことが明らかとなった。開発などにより、時とともにサウンドスケープが急激に変化してゆく中、1000年以上に渡り姿を留めていることは、巡礼の聖地であるからだけではなく、巡礼の確立以前から、竹生島の環境が評価され続け、それが西国三十三箇所巡礼に受け継がれていったものだと予想する。

現代の音環境は、自然の音を聞くという文化の荒廃が危惧されている¹⁾が、このような世相の中で、環境を維持し続ける竹生島は、人々に「自然の音を聞く」という感覚を想起させるきっかけとなるかもしれない。

「変わらない」サウンドスケープが評価されているのではなく、結果的に大きく変わることも無く「残り続けた」サウンドスケープが、評価されているサウンドスケープである。

竹生島の、巡礼地としての特性は、評価されてきたサウンドスケープに神格性が宿っていることであろう。水神として弁財天を祀ることにより、多くの信仰を集め、現在に至る脈々とした信仰の流れを生み出し、維持して来たのである。

7 - 4 竹生島の景観と文化の維持について

前節で述べたように景観と文化を継承して来た竹生島であるが、現在はその両方の維持に困難を極めている。竹生島に関わる主体も少なく、竹生島の活性が大きな力を得ないことも問題に拍車をかけている現状である。

カワウによる森林の枯死は環境に甚大な被害をもたらし、安定した電力の供給が無いために防犯・防災、そして文化財の管理にも問題がある。カワウの駆除は定期的に行われているが、根本的な解決にはなっておらず、依然、枯死は進行している。電力問題についても、島側から電力供給の要請は出されているが、採算の問題等で実現の見通しは未だ立っていない。

長い歴史を積み重ねて来た竹生島が目に見える形で崩れていこうとしている現在、早急な対応が求められる。また、竹生島に関わる主体の少なさ、関心の低さも問題であり、幅広い層からの意見を以て、維持管理の提言がなされることを期待する。

7 - 5 伝統的な音風景の捉え方を生かした環境づくりに向けて

本研究では、「波の音」と「山の静寂の音」という竹生島で評価されてきたサウンドスケープを明らかにした。またそれらの要素が、長い歴史に渡り、人々の感受性に受け継がれ、1000 年以上も継承されているものであることがわかった。そして前節で述べたように現在の竹生島は、カワウの獣害による森林の枯死からくる島の環境の崩壊、電力不足による防犯・防災、文化財管理問題、島に関わる主体の少なさ、という 3 つの問題を抱えている。このような問題を受けとめ、竹生島の活性のため、本研究で明らかにしたサウンドスケープを用いたよりよい環境づくりに向けた筆者の提言を、本論文の締めくくりとして以下に述べる。

①現代まで受け継がれてきた竹生島の伝統的なサウンドスケープは貴重な財産であり、損ねることなく維持しつつ、かつ積極的に活用すべきである。現在まで脈々と続いて来たサウンドスケープ、ひいては島の環境が失われることは避けなければならない。方向性としては、安易な観光化や事業に頼るのではなく、自然の多く残る環境を生かしたプランや、寺社があることを生かした宗教的なもの、例えば参籠や修行体験、が考えられる。また、御詠歌「月も日も 波間に浮かぶ 竹生島 船に宝を つむこちして」や、琵琶湖八景のひとつ「深緑」、謡曲の一節「緑樹影沈んで魚木にのぼる景色あり 月海上に浮かんでは兎も波を走るか おもしろき気色や」と古来より詠われた景色を実体験する場を設けても良いだろう。鮮やかなサウンドスケープ、景観を体験

できるはずだ。島に滞在してみれば、開発の進んだ陸地との環境の差異を体感することで、自然の音を聞く文化を再認識するきっかけとなるかもしれない。

本研究の結果よりを踏まえ、以下に今後の竹生島活性への提案を述べる。

●竹生島を取り巻く主体を中心とした、竹生島に滞在し、自然や文化に触れる宿泊学習やワークショップ、イベント等を実施(巡礼地としての体裁を残した活性化)

自然の音を聞くことを体験し、脈々と続いてきた自然、巡礼という文化を味わうことで、竹生島活性の一步となるのではないだろうか。参籠や寺での修行体験など自然を敬い、自然とともに生活していたかつての生活を体験することにより、竹生島の「標識音」＝「様々に表情を変える自然の音」を再評価するきっかけとなるだろう。

竹生島を取り巻く様々な主体(行政、自治体、個人)が、竹生島の過去と未来を「繋ぐ」意思を持つことで、現代の竹生島の「巡礼の地」としての顔とは違った、新たな一面を発見できるだろう。

②上記で述べたような計画をおこなうにも、安定した電力の供給やカワウの駆除といった施策は必須だと思われる。自然環境を維持し、それを、音に耳を傾けることを忘れている人達、自然環境に触れることの少ない人達に体験してもらう機会を設けることができれば、それが竹生島の活性、自然保護への意識へ繋がっていくはずである。

【参考文献および脚注】

1) 永幡幸司, 前田耕造, 岩宮眞一郎; 歳時記に詠み込まれた音環境の時代変遷の統計的分析, 日本音響学会誌, 52(2), 77-84(1996)

A P P E N D I X

分析対象文献からの抽出・分類データ

No	タイトル	著者	出版年	出版社	該当項	時代区分	記述	船	波	水	雨	風	草木	動物	声	時	静寂	春	夏	秋	冬	湖	岸壁	山	ターミナル	社寺	波止場
1	謡曲竹生島(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)		1320		9	江戸まで	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや			1				1	1		1	1					1				
2	西北紀行(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	貝原益軒	1689		14	江戸まで	湖上の風は冷たい						1									1	1				
3	西北紀行(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	貝原益軒	1689		14	江戸まで	緑を岸壁が囲い							1										1			
4	西北紀行(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	貝原益軒	1689		14	江戸まで	波は岩壁を荒い続けていた		1														1		1		
5	西北紀行(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	貝原益軒	1689		14	江戸まで	逆風吹いて行きがたし						1														
6	西北紀行(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	貝原益軒	1689		14	江戸まで	その小舟は、ゆれる波に、見え隠れしながら竹生島へ	1	1														1	1			
7	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1786	草津宿街道交流館	38	江戸まで	烈風で吹き折られて航行不能	1					1					1						1			
8	西国巡礼道中記	益子廣三郎	1812	太子町史編集委員会	97	江戸まで	白鳥数千羽集まり							1											1		
9	西国巡礼道中記	益子廣三郎	1812	太子町史編集委員会	97	江戸まで	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して		1									1						1			
10	西国巡礼道中記	益子廣三郎	1812	太子町史編集委員会	97	江戸まで	比良おろし吹きおこり						1											1	1		
11	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1812	草津宿街道交流館	38	江戸まで	比良山おろしが吹き出して上陸できなかった	1				1											1	1			
12	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1849	草津宿街道交流館	38	江戸まで	風向きが悪く出航できず	1				1														1	
13	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	1860	草津宿街道交流館	38	江戸まで	風向きが悪く出航できず	1				1															1
14	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	45	江戸まで	岩は崩れ、地は裂け																		1		
15	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	45	江戸まで	風波きびしく		1			1												1			
16	西国観音雪場・新紀行	松本章男	2004	大法輪閣	257	江戸まで	鳥が来て種を落とし樹林が形成される以前、篠竹が生い茂った							1	1			1							1		
17	西国観音雪場・新紀行	松本章男	2004	大法輪閣	257	江戸まで	「都布都布」とつねに音が、湖面に飛沫が、やがて風塵が積もり、島となった。			1		1												1	1		
18	平家物語竹生島詣(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	不明		琵琶法師		江戸まで	谷間に鳴く鳥の声は老いさびて聞こえ、ほととぎすが夏の訪れをつけて							1	1			1							1		
19	平家物語竹生島詣(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	不明		琵琶法師		江戸まで	琵琶を差し出したので、経正はこれをひいた									1			1							1	
20	平家物語竹生島詣(神を齎く島のメモリー竹生島より引用)	不明		琵琶法師		江戸まで	しばらく経文を唱えた									1		1	1							1	
21	神を齎く島のメモリー竹生島	名寄・隆祐			16	江戸まで	波にうつろふ朱のたまがき		1															1			1
22	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	4	大正	水ごりの一群や風を孕む帆等の風情は、	1						1									1	1			
23	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	17	大正	杜鵑若葉に泣く頃							1	1				1						1		
24	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	5	大正	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや	1						1	1			1	1						1		
25	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	16	大正	小島、の、翼の如く這うてる風情や、小さき魚族が盛に游動	1	1					1									1		1		
26	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	3	大正	山には名物の竹を初め老松古杉繁茂して、その間に堂塔伽藍を隠見し							1				1							1		1
27	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	3	大正	緑樹の露滴る如き岩陰に清涼を入る折々、					1		1				1	1					1			
28	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	1	大正	波濤を徐に漕て、汽船を浮かべて	1	1									1					1				
29	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	1	大正	広々たる太湖、漁舟の便に頼る事嫌いか				1							1						1			
30	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	3	大正	さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響いて							1						1				1			
31	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	3	大正	汀のしづき軽く面を翻すときの心地よさ		1		1										1				1		
32	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	4	大正	北風荒く、鹹水幽寂						1					1						1		1	
33	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	4	大正	残紅水を彩り島影倒に映りて、緑は湖心をひたす			1				1				1	1					1			
34	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	5	大正	やがて頻りに鳴動して、日月光輝きて、山の端いづる如くにて、										1									1	
35	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	5	大正	虚空に音楽聞こえ、春の夜の、夜遊の舞楽も時過ぎて、海づらに、波風しきりに鳴動にて	1	1			1			1	1		1					1				
36	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	5	大正	社壇の扉を押し開き、嶺風吹くとても、沖漕ぐ船はよも尽きじ	1																1		1	
37	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	13	大正	南風の烈しく						1												1		
38	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	14	大正	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して		1									1						1			
39	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	16	大正	櫓の音軽く波を漕で	1	1															1			
40	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	17	大正	風波の為、和舟が島に着くことが出来なかった、御詠歌を唱えて	1	1						1									1			
41	竹生島遊覧	不明	1917	宝蔵寺事務所	17	大正	点々と滴る水の音瑟瑟と夏なお戦ぐ冷たき空気が					1	1					1		1					1		
42	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	4	大正	水ごりの一群や風を孕む帆等の風情は、	1					1		1									1	1		
43	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	5	大正	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや	1						1	1			1	1					1			
44	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	3	大正	山には名物の竹を初め老松古杉繁茂して、その間に堂塔伽藍を隠見し							1				1							1		1
45	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	3	大正	緑樹の露滴る如き岩陰に清涼を入る折々、					1		1				1		1					1		
46	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	1	大正	波濤を徐に漕て、汽船を浮かべて	1	1															1			
47	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	1	大正	広々たる太湖、漁舟の便に頼る事嫌いか	1		1								1						1			
48	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	3	大正	さざ波の音琴弦を弄するが如く妙に響いて		1											1					1		
49	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	3	大正	汀のしづき軽く面を翻すときの心地よさ		1		1									1					1		
50	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	4	大正	北風荒く、鹹水幽寂						1					1						1		1	
51	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	4	大正	残紅水を彩り島影倒に映りて、緑は湖心をひたす					1		1				1	1					1			
52	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	5	大正	やがて頻りに鳴動して、日月光輝きて、山の端いづる如くにて、										1								1		
53	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	5	大正	虚空に音楽聞こえ、春の夜の、夜遊の舞楽も時過ぎて、海づらに、波風しきりに鳴動にて	1				1			1	1		1						1	1		
54	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	5	大正	社壇の扉を押し開き、嶺風吹くとても、沖漕ぐ船はよも尽きじ	1																1	1		1

No	タイトル	著者	出版年	出版社	該当項	時代区分	記述	船	波	水	雨	風	草木	動物	声	時	静寂	春	夏	秋	冬	湖	岸壁	山	ターミナル	社寺	波止場
55	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	13	大正	南風の烈しく						1											1			
56	竹生島略誌	馬場海嘉	1925	宝蔵寺事務所	14	大正	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積み心地して		1								1					1					
57	巡礼の旅	白州正子	1965	淡文新社	170	昭和前期	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや	1					1	1			1			1	1						
58	巡礼の旅	白州正子	1965	淡文新社	170	昭和前期	真青な水面に影を映して			1							1		1			1					
59	巡礼の旅	白州正子	1965	淡文新社	174	昭和前期	ひたひたとよせるさざ波の	1									1										
60	巡礼の旅	白州正子	1965	淡文新社	174	昭和前期	物音ひとつしない浜辺に立つて										1										
61	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	228	昭和前期	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや	1					1	1			1	1			1						
62	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	225	昭和前期	伊吹おろし、比良八荒に、湖北の天地が荒れ狂う冬期であろうと、	1	1	1	1										1	1					
63	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	225	昭和前期	宝蔵寺は、翠緑の陸にしずもっている						1				1	1						1		1	
64	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	228	昭和前期	老杉、老松に鬱蒼と						1				1	1						1			
65	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	228	昭和前期	水面に映る島影は冴え冴えと樹木の緑に染まっている				1		1				1	1			1						
66	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	229	昭和前期	汽笛を鳴らして、、溢れ出した人渦で身動きもできなく	1								1	1		1							1	
67	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	230	昭和前期	呼び込みの女性たちの金切り声と・・・									1				1							
68	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	230	昭和前期	こね返す観光客の熱鬧にまじって、、心の洞を吹き抜けてゆく潮風は、しろじろと						1			1	1	1								1	
69	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	230	昭和前期	混みようのすさまじさは									1			1							1	
70	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	230	昭和前期	人の背越しにのびあがりのびあがりしているうちに、乗船をうながす汽笛が、ドラがけたたましく	1								1	1		1						1	1	
71	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	230	昭和前期	乾いた音をたてて錨があがり 船は静寂をとりもどした島をあとに	1										1	1						1		
72	西国巡拝記	杉本苑子	1966	大法輪閣	232	昭和前期	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積み心地して		1									1				1					
73	西国三十三ヶ所	平幡良雄	1967	札所研究会	172	昭和前期	島々が浮かび、島巡りの遊覧船も出て、自然の美しい風光を目の当たりに	1				1										1			1		
74	西国三十三ヶ所	平幡良雄	1967	札所研究会	173	昭和前期	杉や松などの老木におおわれ						1				1							1			
75	西国三十三ヶ所	平幡良雄	1967	札所研究会	176	昭和前期	参拝していると、出向を知らせる汽笛が鳴っている	1								1										1	1
76	西国巡拝記	杉本苑子	1967	大法輪閣	229	昭和前期	口々にはしゃぎながら石段へ石段へ、、									1			1							1	
77	巡礼の寺	三浦美佐子 小川光三	1967	保育社	83	昭和前期	孤島の静けさを取り戻す	1										1	1						1		
78	巡礼の寺	三浦美佐子 小川光三	1967	保育社	83	昭和前期	汽笛を鳴らしながら	1											1			1				1	
79	関西巡礼の旅	首藤一	1968	実業之日本社	158	昭和前期	マツ、スギ、ヒノキの老木、澄み切った水の中を泳ぎ回っている魚				1			1	1							1		1			
80	関西巡礼の旅	首藤一	1968	実業之日本社	155	昭和前期	伊吹おろし、比良おろしと呼ばれる風が強く						1									1	1				
81	カラ―巡礼の旅	佐和隆研	1973	淡文社	192	昭和前期	日本海からの風雪を運んでくるため、秋が深まると、湖が荒れて、波が高い	1	1	1	1											1	1				
82	カラ―巡礼の旅	佐和隆研	1973	淡文社	196	昭和前期	岩の屹立するかたちでありながら、、竹林がみえ、松樹の生い茂る様を眺めると						1					1						1			
83	西国巡礼紀行	中西芳郎	1974	東京堂出版	127	昭和前期	吐き出された様に下船した。。。そろそろと										1									1	
84	西国巡礼紀行	中西芳郎	1974	東京堂出版	128	昭和前期	どっと詰めかけた参拝者がわれ勝ちにと										1										1
85	西国巡礼	澤野久雄	1975	平凡社	133	昭和前期	風にあおられる雪が					1	1									1		1			
86	西国巡礼	澤野久雄	1975	平凡社	133	昭和前期	竹や松、杉などに覆われ、まだ人の踏まない土地がある							1				1									
87	西国巡礼	澤野久雄	1975	平凡社	134	昭和前期	モーターの音がひびくから、、連絡船が出るのだから、棧橋を走ってゆく人の姿が多い	1								1	1	1							1	1	
88	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	19	昭和前期	三井の晩鐘音絶えて なみすすりなく浜干島		1						1			1						1			
89	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	43	昭和前期	杉、桧が繁茂し白鷺、青鷺、鵜が数多く群をなして奇声かしましくとびかうさまは						1	1										1			
90	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	19	昭和前期	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや	1						1	1			1			1	1					
91	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	19	昭和前期	遠くかずむは彦根城 波に暮れ行く竹生島		1									1				1					
92	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	37	昭和前期	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積み心地して		1									1				1					
93	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	38	昭和前期	島の茂った樹間に見える堂塔が						1					1						1		1	
94	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	38	昭和前期	月の夜の金波銀波に浮かぶ		1									1				1					
95	竹生島誌	澤実英	1975	宝蔵寺事務所	43	昭和前期	奥深く暗くて点々と水滴が滴り夏なお寒き風がほほをなせる				1	1						1	1								
96	西国三十三所巡礼	渡辺守順	1976	白川書院	223	昭和前期	竹が茂り、松、杉に覆われ							1				1						1			
97	西国三十三所巡礼	渡辺守順	1976	白川書院	227	昭和前期	深緑竹生島の沈影							1				1						1			
98	西国三十三所巡礼	渡辺守順	1976	白川書院	227	昭和前期	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積み心地して		1									1				1					
99	竹生島	中井一郎	1977	手書き原稿		昭和前期	水鳥の 嘴振かたや 竹生島								1					1				1			
100	竹生島	中井一郎	1977	手書き原稿		昭和前期	涼しさや 兎の消えし 竹生島							1				1		1				1			
101	竹生島	中井一郎	1977	手書き原稿		昭和前期	冬の海 見やりて寒し 竹生島	1		1												1	1	1			
102	竹生島	中井一郎	1977	手書き原稿		昭和前期	涼しさを 波にちらすや 竹生島			1													1	1			
103	礼所めぐりあいの旅	竹村節子	1982	日本交通公社	74	昭和後期	四方は切り立った崖で覆われ、、老松、老杉がそれらを						1					1						1			
104	礼所めぐりあいの旅	竹村節子	1982	日本交通公社	75	昭和後期	白波をけたてて彦根からの快速船がやってくるのが	1	1														1				
105	礼所めぐりあいの旅	竹村節子	1982	日本交通公社	75	昭和後期	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積み心地して		1									1				1					
106	句集 竹生島	山田佳郷	1984	東京四季出版		昭和後期	島中の樹に蝉が鳴く竹生島						1	1					1					1			
107	句集 竹生島	山田佳郷	1984	東京四季出版		昭和後期	船行かず雪積むままの竹生島					1									1					1	
108	同行二人	松原泰造	1985	講談社	210	昭和後期	古木が茂っています						1				1							1			

No	タイトル	著者	出版年	出版社	該当項	時代区分	記述	船	波	水	雨	風	草木	動物	声	時	静寂	春	夏	秋	冬	湖	岸壁	山	ターミナル	社寺	波止場
109	同行二人	松原泰造	1985	講談社		210	昭和後期	吹き下ろす風は湖水とは思えぬ程の大波が			1	1										1	1				
110	同行二人	松原泰造	1985	講談社		210	昭和後期	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して			1						1										
111	同行二人	松原泰造	1985	講談社		212	昭和後期	船の航跡にうらかな太陽の光が	1	1										1			1				
112	同行二人	松原泰造	1985	講談社		213	昭和後期	正しい審判の背後には、弁財天の持たれる琵琶の音声のあることを象徴している。音をよく聞く声をよく聞くのが審判の要諦であることを示している								1											
113	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		6	昭和後期	波が、白く寄せていくところで			1												1				
114	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		217	昭和後期	帰りに途中から猛烈な嵐となりまして			1		1								1		1				
115	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		218	昭和後期	竹や杉、松といった島の樹木は、風にあおられ始めました。					1	1							1			1			
116	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		218	昭和後期	浪が激しく砕けていたのには驚きというより、こわくなりました			1										1			1			
117	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		218	昭和後期	風が吹き荒れだしたのです					1								1		1				
118	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		218	昭和後期	周囲には三角波も立ち、小さな観光船は、徐々に徐々に安心できないと思うような揺れを始めたのです	1	1											1		1				
119	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		219	昭和後期	大きなスピーカーから、太い男の声で、アナウンスがありました。天候が悪化し始めたので、なるべく早く彦根に戻りたい								1				1					1		
120	西国巡礼の旅 観音のころ	松原哲明	1986	咬成出版社		219	昭和後期	さらに雨風が強くなり、スピーカーの太い声が、しきりに帰船を促すため、				1	1			1				1						1	
121	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	とびという鳥が輪をかいている							1					1							1
122	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		9	昭和後期	波は常に岩を洗い			1												1				
123	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		9	昭和後期	夕波の竹生島に			1												1				
124	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		12	昭和後期	深緑一竹生島の沈影						1				1						1			
125	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		13	昭和後期	小舟が、白い巡礼姿を乗せて行く波をみた	1	1				1									1				
126	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		15	昭和後期	白い花が緑を背景に空へと舞うそれは冬の吹雪のようであった						1	1					1				1			
127	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		15	昭和後期	岩壁にぶつかってはくだけていた			1			1							1			1			
128	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		15	昭和後期	白い花が風に散り急いでいる						1	1					1						1	
129	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		15	昭和後期	夏嵐とよぶにふさわしいような風が花を散らしていた						1	1					1						1	
130	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	多くの人々が群がり集まっていた							1					1							1
131	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	島に寄せる波の花が			1									1				1			
132	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	波に揺れる船上で、竹生島が上下していた	1	1										1				1			
133	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	小さな荒神岩に、白い波がしがきを			1									1				1			
134	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	波は岩に砕けては			1									1				1			
135	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	周囲は波の玉垣で、陸地は遠く霞のかなた			1									1				1			
136	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		16	昭和後期	涼風が吹き抜けていき、先ほどの船はすでに			1			1						1							1
137	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		17	昭和後期	波打つ湖のこころの広さ			1									1				1			
138	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		17	昭和後期	厄よけのかわけを深々とたたえた水に投げた				1									1						1
139	神を齋く島のメモリー竹生島	びわ町観光協会	1986	びわ町観光協会		18	昭和後期	波が寄せ続けて音を岩にひびかせて			1									1				1			
140	西国三十三所観音巡礼 法話と礼所案内	西国礼所会	1987	朱鷺書房		140	昭和後期	三井の晩鐘 音絶えて なみすすりなく 浜千鳥			1													1			
141	西国三十三所観音巡礼 法話と礼所案内	西国礼所会	1987	朱鷺書房		140	昭和後期	並み静かな湖面を			1												1				
142	西国三十三所観音巡礼 法話と礼所案内	西国礼所会	1987	朱鷺書房		140	昭和後期	遠くかずむは彦根城 波に暮れ行く竹生島			1												1				
143	西国三十三所観音巡礼 法話と礼所案内	西国礼所会	1987	朱鷺書房		142	昭和後期	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して			1												1				
144	西国三十三所観音巡礼 法話と礼所案内	西国礼所会	1987	朱鷺書房		143	昭和後期	茂った木々の間から見える堂塔の姿を						1						1							1
145	西国三十三所観音巡礼 法話と礼所案内	西国礼所会	1987	朱鷺書房		143	昭和後期	月の夜の金波銀波に浮かぶ			1												1				
146	西国巡礼三十三所観音めぐり	佐和隆研	1988	西国礼所会		256	昭和後期	雪風は湖北の海を荒らして				1	1										1	1			
147	西国巡礼三十三所観音めぐり	佐和隆研	1988	西国礼所会		256	昭和後期	森が覆いかぶさるように密生している						1					1						1		
148	西国・新西国観音霊場巡拝紀行	漆原秀男	1991	矢谷印刷所		54	平成	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して			1												1				
149	西国33ヶ所 巡拝	小林茂	1993	ナンバー出版		101	平成	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して			1												1				
150	西国33ヶ所 巡拝	小林茂	1993	ナンバー出版		102	平成	波静かな湖面に浮かぶ深緑の竹生島の鳥影や			1												1		1		
151	西国33ヶ所 巡拝	小林茂	1993	ナンバー出版		103	平成	深緑一竹生島の沈影						1											1		
152	西国三十三ヶ所めぐり	藤井金治	1994	日本交通公社		101	平成	絶壁の島岸や樹木の緑が鮮明になり、神を齋気祀る島という言葉を防佛とさせる						1						1				1			
153	西国三十三ヶ所めぐり	藤井金治	1994	日本交通公社		101	平成	常緑樹に覆われ、その山肌に並ぶ伽藍や石段の、						1						1					1		1
154	西国三十三ヶ所めぐり	藤井金治	1994	日本交通公社		101	平成	月も日も波間に浮かぶ竹生島 船に宝を積む心地して			1												1				
155	御詠歌の旅	和田嘉寿男	1995	和泉書院		198	平成	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでほは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや			1			1	1								1				
156	御詠歌の旅	和田嘉寿男	1995	和泉書院		202	平成	ジェットエンジンの高速船	1											1							
157	御詠歌の旅	和田嘉寿男	1995	和泉書院		202	平成	春風胎蕩					1						1	1				1			
158	西国巡礼と俳句	瀧脇逸朗	1995	新風書房		63	平成	蟬の一念 鳴くばかりなり 島覆う						1	1					1				1			
159	西国巡礼と俳句	瀧脇逸朗	1995	新風書房		67	平成	竹生島の 読経に合ふや 蟬の声							1	1				1						1	
160	西国巡礼と俳句	瀧脇逸朗	1995	新風書房		63	平成	湖面には鵜と思われる鳥が気持ち良さそうに			1					1						1		1			

No	タイトル	著者	出版年	出版社	該当項	時代区分	記述	船	波	水	雨	風	草木	動物	声	時	静寂	春	夏	秋	冬	湖	岸壁	山	ターミナル	社寺	波止場
161	西国巡礼と俳句	洲脇逸朗	1995	新風書房		64	平成	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや		1				1	1			1				1					
162	西国巡礼と俳句	洲脇逸朗	1995	新風書房		67	平成	小雨まじりの 涼風起こる 宝厳寺					1	1					1							1	
163	やすらぎ	橋本周三	1996	AIM Press			平成	緑深き竹生島に 鞠の黄白し						1	1		1							1			
164	やすらぎ	橋本周三	1996	AIM Press			平成	天海の 間 宝厳寺 朱く立つ			1											1				1	
165	西国三十三ヶ所巡り	不明	1997	昭文社		116	平成	風光に恵まれた湖上をほどよい船の旅	1				1									1					
166	西国三十三ヶ所巡り	不明	1997	昭文社		117	平成	今津港で船を待っていると、島に弁当はないよ！							1											1	
167	西国三十三ヶ所巡り	不明	1997	昭文社		117	平成	深緑一竹生島の沈影						1			1							1			
168	西国巡礼	臼州正子	1997	風媒社		180	平成	緑樹影沈んで魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮かんでは兎も波を走るかおもしろき島のけしきや	1					1	1						1						
169	西国巡礼	臼州正子	1997	風媒社		184	平成	ひたひたとよせるさざ波の	1								1										
170	西国巡礼	臼州正子	1997	風媒社		184	平成	物音ひとつしない浜辺に立って									1										
171	句集 竹生島	山田佳郷	2001	東京四季出版			平成	大琵琶に降る雪積もる竹生島					1					1				1		1			
172	句集 竹生島	山田佳郷	2001	東京四季出版			平成	天守より見る白雪の竹生島					1					1						1			
173	句集 竹生島	山田佳郷	2001	東京四季出版			平成	降りしける雪に見えざる竹生島					1	1								1		1			
174	句集 竹生島	山田佳郷	2001	東京四季出版			平成	大琵琶の豊かな水に人泳ぐ					1						1			1					
175	句集 竹生島	山田佳郷	2001	東京四季出版			平成	大琵琶の中に神鳥緑なす						1			1								1		
176	句集 竹生島	山田佳郷	2001	東京四季出版			平成	月照らず大琵琶の水真平ら					1				1					1					
177	古寺巡礼ひとりある記	能村進	2001	大揚社			平成	琵琶湖周航の歌が流れ	1						1				1			1					
178	古寺巡礼ひとりある記	能村進	2001	大揚社			平成	自然林に覆われている						1					1					1			
179	古寺巡礼ひとりある記	能村進	2001	大揚社			平成	海上波穏やか		1							1	1				1					
180	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		304	平成	稲妻ショーはなかなか見もので さながら火花大会のようだ				1							1							1	
181	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		306	平成	われわれを見てずっとときような声をあげた							1				1							1	
182	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		306	平成	派手にエンジンを吹かして走り去った	1										1							1	
183	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		306	平成	風が強くなり、その風にあおられて、すぐしたの浜辺で白波が立った		1			1						1							1	
184	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		308	平成	フェリーはバスン、バスンと派手にエンジン音を立てて、竹生島に到着した	1					1					1							1	
185	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		310	平成	フェリーターミナルで拡声器で							1				1							1	
186	西国三十三か所ガイジン珍礼珍道中	クレイグ・マクラフラン	2003	小学館		310	平成	フェリーのデッキで風にあたりながら、、またしても話し合った					1				1		1								
187	西国巡礼の旅	草津宿街道交流館	2003	草津宿街道交流館		37	平成	北西の風が吹き、特に三月は危険					1									1	1				
188	西国観音霊場・新紀行	松本章男	2004	大法輪閣		255	平成	雨のわずかな波打ち際にのみ、、そこへ、高速船が	1	1																1	
189	西国観音霊場・新紀行	松本章男	2004	大法輪閣		265	平成	夏の竹生島は、いつ参拝しても湖面をわたってくる風があって、心地よい					1							1				1			
190	西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	2004	京都新聞出版センター		122	平成	三井の晩鐘 音絶えて なにすすり泣く浜千島							1		1	1						1			
191	西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	2004	京都新聞出版センター		122	平成	速くすむは彦根城 波に暮れ行く竹生島									1						1				
192	西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	2004	京都新聞出版センター		123	平成	常緑樹に覆われ						1			1							1			
193	西国三十三ヶ所 やすらぎの観音巡り	京都新聞出版センター	2004	京都新聞出版センター		123	平成	青い波間にぼんやりと見とれたり、快いエンジン音に身を任せ	1	1												1					
194	西国三十三ヶ所を歩く	歩く旅シリーズ古寺巡礼	2006	山と溪谷社		117	平成	しっとりとした墨絵のような風景のなか、鬱蒼と繁る樹林の深い緑に包まれて						1			1							1			

本稿は、滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻における研究成果を学位論文としてまとめたものである。

本研究の遂行ならびに本論文作成にあたり、テーマの設定、論の構成、プレゼンテーション等、全てにおいて終始適切かつ御懇切丁寧極まる御指導御鞭撻を賜りました滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻近藤隆二郎准教授には謹んで深甚なる敬意を表します。

本研究を進めるうえで、貴重な助言をいただいた金谷健准教授、高橋卓也講師に深く感謝いたします。

この一年間、研究ばかりか生活においても温かく見守ると同時に、公私にわたりご協力いただいた、近藤紀章氏、樋口幸永氏、迫間勇人氏に深く感謝いたします。

また、常に刺激を与えていただいた江口伸之氏、齋藤毅氏、田代麻依子氏、久野太一郎氏、溝江麻衣子氏、三輪亮介氏と一年間研究生生活を共に出来たことを深く感謝いたします。

私事になりますが、公私生活において触れ合うことも多く、支えていただいた友人の皆さんに深く感謝いたします。

最後に、女手ひとつで私の学生生活を支えてくれた母に心から感謝いたします。